

# 第 1 章

## 山形大学教員研修会 「第9回 教養教育ワークショップ」



日 時:平成19年8月9日(木)10時から16時30分まで

会 場:山形大学教養教育棟(山形市小白川町)

### 第1部 講演会 「学士課程教育改革とラーニングアウトカムズ」

講師 国立教育政策研究所 高等教育研究部  
総括研究官 川島 啓二 氏

### 第2部 ラウンドテーブル

No	テーマ	コーディネーター
ラウンドテーブル1	FDの義務化と個別支援FD	杉原 真晃 講師(高等教育研究企画センター)
ラウンドテーブル2	外国語教育センターの設置と外国語教育の充実	佐々木正彦 教授(外国語教育センター)
ラウンドテーブル3	授業支援システム(LMS)の教育効果	中村 三春 教授(高等教育研究企画センター)

### 第3部 全体会 「21世紀型教養教育を問う」

主 催 :山形大学教育方法等改善委員会・高等教育研究企画センター  
お問合せ:山形大学高等教育研究企画センター (023-628-4707)

## 第1章 山形大学教員研修会「第9回 教養教育ワークショップ」

### 山形大学教員研修会「第9回 教養教育ワークショップ」 —山形大学の活性化と授業改善の推進—



日時：平成19年8月9日(木) 10:00～16:30  
会場：山形大学教養教育棟  
主催：山形大学教育方法等改善委員会  
山形大学高等教育研究企画センター

#### 趣旨

山形大学の特色として、全学が一丸となって実施している教養教育の充実を挙げることができます。その充実を支え、恒常的に改善・発展させている装置がFDです。本学のFDは、全国的にも高く評価され、大学教育の研究者にも注目されています。その対外的な評価の一つとして、平成16年度の現代GPに選定された「地域ネットワークFD“樹氷”」があげられます。このワークショップには、“樹氷”を始めとして県内の大学等から多数の教職員が参加しております。さらに、8月6日から蔵王で実施された合宿セミナーには、全国の20校に及ぶ大学等からの教職員の参加がありました。このように、相互研鑽を理念とした本学のFDは学内から県内へ、そして全国へと広がりを見せています。

本ワークショップは3部構成となっています。第1部の基調講演は、国立教育政策研究所の川島啓二総括研究官にお願いしました。我々がFDで進めていることは、教員の教育力の向上ですが、その最終目標は学生の能力の向上にはかなりません。学生は大学に入学して卒業するまでに、どのくらい能力や技能を向上し、人間として成長しているのかという、初歩的であり、それがゆえに根本的である問いが我々に投げかけられています。このことは大学の教育理念から具体的な到達目標、そして各授業の目標から成績評価にまで通底した問題でもあります。「ラーニング・アウトカムズ」とは何なのか。私たちは組織的、個人的にどのように対処していかなければならないのか。みなさんと一緒に考えていくことにしましょう。「ラーニング・アウトカムズ」という根源的な問いが学士課程の改革を迫っています。

第2部は、ラウンドテーブルという名の分科会となっています。机を円く組んで、お互いの顔を見ながら山形大学が

推進している現在進行形の教育改善や、直面している問題について忌憚のない議論をしましょう。第1テーブルは「FDの義務化と個別支援FD」、第2テーブルは「外国語教育センターの設置と外国語教育の充実」、第3テーブルは「授業支援システム(LMS)の教育効果」です。

第3部は、全体会「21世紀型教養教育を問う」です。ラウンドテーブルで話し合われたことを全員で共有し、明日に繋げるためのものです。限られた時間ですが、参加者全員で実りを共有したいと思います。

本ワークショップによって、参加者のみなさま、参加大学等、そして山形大学のパワーが増幅することを主催者一同願っております。

#### 日程

- 10:00 開会  
あいさつ 仙道学長  
教育方法等改善委員会委員長 柴田副学長
- 日程説明
- 10:15 【第1部】基調講演  
演題：「学士課程教育改革とラーニング・アウトカムズ」  
講師：国立教育政策研究所高等教育研究部 総括研究官 川島 啓二 氏  
質疑応答
- 12:00 昼食・休憩
- 13:00 【第2部】ラウンドテーブル  
ラウンドテーブル1：FDの義務化と個別支援FD  
コーディネーター：杉原 真晃 講師(高等教育研究企画センター)  
ラウンドテーブル2：外国語教育センターの設置と外国語教育の充実  
コーディネーター：佐々木正彦 教授(外国語教育センター)  
ラウンドテーブル3：eラーニングと授業支援システム(LMS)の教育効果  
コーディネーター：中村 三春 教授(高等教育研究企画センター)
- 15:00 休憩
- 15:10 【第3部】全体会  
「21世紀型教養教育を問う」  
(各ラウンドテーブルの報告)
- 16:30 閉会



## 開会

**司会(浅野)** 皆さんおはようございます。それではただいまから山形大学の教員研修会第9回教養教育ワークショップを開催させていただきます。私は教育方法等改善会委員の浅野と申します。よろしくお願ひいたします。



それでは最初に、まず仙道学長からご挨拶をいただきましたと思います。

**仙道** おはようございます。一言ご挨拶申し上げます。



教養教育のワークショップも第9回ということですが、ずっと持続されてきたという、持続は力なりということだろうと思いますが、最近といっても5、6年のことだと思いますけれども、いわゆる教養教育をどういうふうにかえたいかということが盛んに論じられるようになってきていると思います。

戦後、教養部というものが作られて、アメリカのシステムを導入するような形で教養教育が進んできたと思いますけれども、それが一時、やはり専門教育の方が大事だということなどで、教養部が解体されたり、それから教養課程が短縮されたりしてきたわけですが、ここにきてやはりそうではないんだと。やはり教養教育というのは大学の学士課程教育の非常に大事なポイントなんだということが言われるようになってきたというふうに思われます。

一つはそういう社会的な要請といいますか、社会状況の変化に伴って大学生がやはり大分変わってきた。企業に行っても挨拶もできないような人が多くなってきているというようなことから、会社の要請でもあり社会の要請でもあるような形で、この教養教育ということが重視されてきているんだと思います。

山形大学ではもう9回ということになりますから、かなり早くからその教養教育の重要性ということを考えて、教員研修という形でこのワークショップをやってきたんだろうと思います。

最近、私がいつも申し上げますのは、ずっと持続されてきたわけですが、やはりこころへんで、一つまとめが必要ではないのかなと。今までやってきたことを総括して、まさに教養教育はいかにあるべきかといったことを大上段に構えて皆さんで議論をしていただきたいというふうに思っております。

そういう意味合いで今日は国立教育政策研究所の、まさに国の高等教育に対する政策についてご研究なさっている川島先生においでいただいたということは、大変意義のあることだろうと思います。

つまり、国が現時点で高等教育をどういうふうにかえようとしているのかと、教養教育をどういう風にかえようとしているのかということ、川島先生のお話から汲み取っていただいて、それに基づいて午後行なわれるというブレインストーミングに役立てていただければと思います。

山形大学の理念のうちの一つに、充実した人間教育ということ掲げておりますけれども、そういったことの発展のためにも是非このワークショップが成功裏に終わって、一つの道しるべとなることを祈念しております。一つよろしくお願ひします。どうもありがとうございました。

**司会** ありがとうございました。それでは続きまして、主催者を代表いたしまして、教育方法等改善委員会委員長、山形大学副学長の、柴田副学長からご挨拶申し上げます。

**柴田** おはようございます。



山形大学は、ご案内の通り一つの特徴は、教養教育を全学で担っているという一つ特徴があります。その意味では、非常に難しい部分と、非常にうまい部分があるわけですが、それをいかにその結合させていくかというのが大きな課題になっていると思います。そういうことで山形大学が活性化し進んでいく上では教養教育をどういうふうにかえさせるかということが大きな課題になっているんじゃないかなと思っています。そういうような意味で、今回開かれる教員研修会の中の一つとして教養教育のワークショップというのは非常に重要なものじゃないかなというふうに思っています。

その中で、本日、講演も聴きますけれども、そのあとの皆さんとの意見交換のラウンドテーブルの中で出てきている21世紀型教養教育というのがあって、教養教育というとなんとなくみんなわかっているようなんだけど、その概念というか大枠はわかっているけれども細かく詰めていくとなんとなくわからない。10人がいれば10人のその教



養教育についての考え方が出てくるんじゃないかなという感じがするわけです。

そういうことで、教養教育のあるべき姿というのはなにかということについて、答えは一つでなくてもいいんですけども、常に各人が、どういうものが教養教育かということ、恒常的に考えて進めていくということの中で、新しい21世紀型の教養教育というような形になってくるんじゃないかなと思うんですけども、そういうふうなプロセスの一つとして本日の研修会があると認識しております。

その意味で、皆さんの持っているイメージの教養教育と、スピーカーが話す教養教育の違いがあった場合に、その違いが何かということ、各自も考えてほしいという形で、特に、本日はその後でディスカッションができると思いますので、その場を有効に使っていただければよろしいんじゃないかなと思っています。暑い中ですけども、今日一日有意義な一日になるように祈念しております。本日はどうぞご苦勞様です。

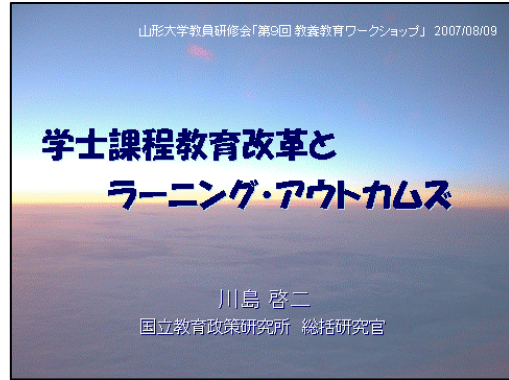
**司会** ありがとうございます。それでは本日の日程につきまして簡単にご説明申し上げます。このあと川島啓二先生からご講演をいただきます。時間は11時45分頃までを予定しております。その後、15分ほど質疑応答の時間をとらせていただきます。12時から13時までは昼食休憩とさせていただきます。13時から第2部、ラウンドテーブルに移らせていただきます。ラウンドテーブルの内容につきましてはまた後ほどご案内申し上げます。15時から10分間ほど休憩を挟みまして、15時10分から第3部、全体会。21世紀型教養教育を問うという形で各ラウンドテーブルからご報告をいただくと。全体で討論をするという形にしたいと思っております。全体として16時30分に閉会するというようにしております。よろしくお願い申し上げます。

**第1部 基調講演「学士課程教育改革と  
ラーニング・アウトカムズ」**  
講 師：国立教育政策研究所高等教育研究部  
総括研究官

川 島 啓 二 氏

**司会** それでは次に、早速川島先生からご講演をいただくわけですが、川島啓二先生の略歴について簡単にご紹介を申し上げます。

川島先生は京都大学大学院教育学研究科博士科後期課程を御終了のあと、芦屋大学助教授、国立教育研究所教育経営研究部高等教育研究室長を経て、現在、国立教育政策研究所高等教育研究部総括研究官をお勤めです。ご講演の表題はそこに掲げあるとおり、「学士課程教育改革とラーニング・アウトカムズ」となっております。それでは先生よりよろしくお願い申し上げます。



**川島** おはようございます。ただいまご紹介をいただきました川島でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

今日は「学士課程教育改革とラーニング・アウトカムズ」ということとお話をさせていただきます。この表紙の写真は、実は私が撮った写真でして、飛行機の中から撮った写真です。どこへ行った時のかは忘れまして。

日本の大学教育の一つの夜明けみたいなところを表せたらいいかなという思いがあるんですけども、まああんまり通じてないかもしれません。これは飛行機のガラス窓からの撮影で、結構自分なりにはよく撮れた写真なので、いつかこのパワーポイントの時に使ってやろうと思っていた次第であるわけです。



本題に入ります前に、ご紹介いただきましたですけども、私どもが勤めております国立教育政策研究所というところについて、ちょっと簡単にご説明というかご紹介ができればというふうな思うんですが。

さっきご紹介いただいたように、最初は、もともと国立教育研究所と言っていたものでした。それが2001年の、橋本行政改革の時の、省庁再編に伴いまして、文部科学省の教育課程調査官だとか教科調査官だとか、あるいはここにある、国立社会教育研修所だとかいうものが一緒になって、はっきり申し上げて焼け太り、というところちょっと語弊がありますが、大きな形で、2001年の1月に国立教育政策研究所という組織になったわけです。

それで、以前の国立教育研究所の時は、私も教育学畑の人間ですけども、教育学研究者の中ではこの国立教育研究所に勤めることが一種の憧れみたいところがありました。授業負担がとにかくありませんから。それで東京の目黒というところにあるんですけども、非常に優雅な研究生生活をしていらっやっったそうです。私が赴任したのは、7、8年



前で、その頃にはだんだんそういう雰囲気はなくなっていたんですけども、大変優秀な先生方が集まっていたということだそうです。

それで、実は今年、年末というか年が明けましたら、今、文部科学省の本省の建物を建て替えているわけなんですけれども、霞ヶ関一帯では一番高いビルになるそうです、30数階の。そちらに合流すると、つまり移転することになりました。研究環境は今と比較的いいんですけども、霞ヶ関の方に行ってしまうと、イメージとすると研究室が大体3畳一間ぐらいの広さというか狭さになってしまうことになっています。それも時の流れなんだろうなということ。

戻りますと今は目黒は、非常に広いです。100メートル四方ぐらいの敷地があって、建物が4つぐらいあります。先ほど申し上げましたように丸の内の方には、今文部科学省が仮に間借りしている、元三菱重工のビルですけども、余計な話かも知れませんが、三菱重工のビルといいますと覚えていらっしゃる人もいらっしゃるでしょうか、あの爆破事件があったあのビルです。もう何年も前になりました。

そちらに文部科学省が間借をしまして、そちらには教育課程調査官の方がいらっしゃるということで、教育課程研究センターと、我々は、カリキュラムセンターということでカリセン、カリセンというふうに言っているんですけども。例の全国一斉学力調査です。それを主にやっている人たちです。

それから上野庁舎の方には、国立社会教育研修所からなりましたが、社会教育実践研究センターということで、これはボランティア関係の一つの、なんといいますかポータルサイトみたいなものを作っているところなんです。その三つがあるということです。



これがそう、先ほどのお話ですね。第90条に、国立教育政策研究所は教育に関する政策にかかる基礎的な事項の調査、まあ基礎研究をするということなんです。いろいろ誤解を受けるんですけども、特に、あれをしる、これをしるということ、文部科学本省から、いつも細かいところまで指図されているということはありません。

それで、実は我々はこの「施設等機関」なんです。「施設等機関」といいますのは、この間まで、法人化される前までの国立大学が「施設等機関」でした。ですから国立の、国の施設ではあるわけですけども、それはまあ行政上の便宜上、ある上の部署にぶら下がっているということが「施設

等機関」の意味なんでしょうから、国立大学がそれなりの自治というのを認められていたと。で、今の我々もまだ「施設等機関」ということなので、決して文部科学省の「付属」の研究機関ではないわけです。付属とは厳密には言わない。ただ面倒くさいので対外的にご説明する時には付属の研究所ですというのが面倒くさくなくていいからそういうふうになっています。

そして、大学の先生方は法人化される前までは文部教官でいらっちゃったわけですけども、私の身分はまだ文部科学教官です。文部科学省、科技庁と一緒にになりましたから文部科学ですけども、文部科学教官ということで、細かい話になりますけれど、今や教育公務員特例法が適応される数少ない国家公務員という身分になっているわけなんです。

各省庁にいろいろ研究所っていうのがあって、「施設等機関」というのは一個だけにしろということに橋本内閣の時になりました。なったんですけども文部科学省だけは例外的に、科学技術政策研究所ということと、国立教育政策研究所ということが二つあります。これはなぜかっていう説明はちょっと難しいんですけども、総合科学技術会議ですね、内閣府付きの。あちらとの関係が深いからということで二つ認められているんだというふうな説明がされたりもします。

独立行政法人のほうは皆様よくご存知の大学評価・学位授与機構だとか大学入試センターだとかメディア教育開発センターというのがあると。もちろん独立行政法人はほかにも、ほかの省庁にもいっぱいあります。これ調べたんですけども途中で嫌になって止めました。普通の方にご説明しやすいように大学入試センターなんかは独立行政法人ですよ。うちは「施設等機関」ですよ。いうふうなことをご説明申し上げたい時にこの表を作ったということです。

ついでに言いますと、独立行政法人というのは民間ではできないけれども国が直接する必要がないというものについて行なうということでもあります。大学評価・学位授与機構なんていうのもそうなんですけれども、この間、我々評価機構、評価機構と略して呼んでおりますけれども、評価機構のある方の話を聞きますと、大学評価というのは別に独立行政法人でなくてもできるじゃないかというふうなことを、総務省の方の独立行政法人評価委員会の方から言われていると。

つまり、大学評価・学位授与機構でなくても、大学基準協会なり、あるいは日本高等教育評価機構っていう、私立大学協会ですね、あちらの方が作った評価機構があるからそういうところから手を引いてもいいんじゃないかと。つまり大学評価・学位授与機構は民間では絶対できないような、例えば高等専門学校の評価だとか、そういうところだけに特化すればいいんじゃないかというふうな主張もあるそうで、メディア教育開発センターもそういう圧力を受けているようでして、そういう行政改革の波というのはなかなか途切れることはないし、今のこういう組織的な配置というのも今後変わっていくのかもしれない。

ということで、前フリをさせていただいてやっと自分の話す

時間の方に移りたいと思いますが、さて、さつき仙道学長先生のほうから教養教育というお話がありました。それで実は私の今日の話の中で教養教育という言葉はおそらく、一回も使わないだろうというふうに思います。それはなぜかというふうに申しますと、どうも教養教育と専門教育の有機的なつながりだとか、教養教育と専門教育とのバランスだとか、そういう言い方をすること自体にそもそも、教養教育をもちろん否定するわけではありませんしそれが重要だというふうには思っておりますけれども、そういう二項的に、二つ並べて言うこと自体がそもそもやっぱりある種の限界をやっぱり持っているんじゃないかというのが、私どもの今日の問題意識であります。

つまり教養と専門っていつてしまいますと、どうしてもその大綱化以前の、教養部プラス専門課程というふうなイメージを持ってしまいます。つまり2足す2は4だと、いうイメージがどうしても抜けきれないわけです。そうじゃなくってやっぱり4年間一貫した学士課程の結果、学生がどういうふうに成長していくのか、どういことができるようになったのかということが問題になっているというのが、世界的な動向でもあるし今の日本の課題でもあるということを申し上げたいからであるわけです。

そもそも、1991年度の設置基準の大綱化のときの理念そのものが、何も2プラス2ということで分けるのではなくて、4年間一貫でどうなんだということがそもそものあの時のモチーフでもあったはずなんですけれども、今日のお話とはちょっと違うんですけれども、仙道学長がああいうふうにおっしゃいましたのでちょっと補足的に申し上げているわけなんですけれども、4年間で教養教育と専門教育をどういうふうに組み合わせていくのかということに各大学の、いつてみれば考え方なり戦略が問われてきていたんだというふうに思います。

ただ現実には、教養教育というのが専門教育からのプレッシャーを受けています。大綱化以前は、教養があって専門がありました。大綱化以後は専門と教養をあわせて4年間ということになったはずであったわけです。ですから文部科学省は各大学に対する調査を毎年していますけれども、その中でくさび形カリキュラムを組んでいますかということも毎年聞いてくるわけです。つまりくさび形、つまりお互いが入り込んでいるということであったわけです。

ところがこの、考え方としてはこうだったはずなのに、現実はどうなったかといいますと、教養教育と専門教育を同じ平面に並べてしまいますと、どうしても専門教育のほうからの圧力が強くなり教養教育はへこんでしまいます。加えて最近いろいろ学生が多様化してきて、学力の問題だとか学習意欲の問題というものが、強くその危機的な状況が叫ばれる中であって、多くの大学において高校での学びから大学への学びへの移行を手助けするための初年次教育、Fist Year Experience というふうに言いますが、その初年次教育のプログラムというものに取り組んでいる大学も多く出てきています。

つまり教養教育は専門からの圧力と、大学の先生はこちらをやった方が楽ですから、初年次教育からの圧力、両方

からのサンドイッチにあってそのアイデンティティが問われているという、そういう状況なんだろというふうに思います。

実際、教養教育の授業というのは、ある先生の調査によりますと、大体3分の1ぐらいに減っていると、3分の1というのは全体の中で、3分の1ぐらいに減っているということで、量的にも非常に、細っているということがあるということです。

こういうふうに二元的に分けていくことの発想を抜けて、4年間の中で専門的な教育と教養的な教育、あるいは初年次のものをどういうふうに組み合わせるのか。初年次教育にしてもどういうふうにその4年間の学士課程につながっていくかという、そういうトータルで考えていくという発想をできるだけ提起していきたいというふうに私は思っている次第であるわけです。

### アウトプットとアウトカム

- output:  
生産高、産出量、出力
- outcome:  
結果として生じた事態、成果

2

その結果として結局ラーニング・アウトカムズ、つまり、こんな初歩的なお話を申し上げて恐縮ですが、アウトプットとアウトカムです。アウトプットというのは非常に量的なもので、こういう生産高とかそういうものである。アウトカムというのは結果として生じた事態・成果ですから、アウトカムズというのは学習成果のことです。つまり何を教えるのかということではなくて、学生が何ができるようになったのかということが問われているという、そういうことであります。

### 本日のラーニング・アウトカムズ(学習成果)

- 学士課程教育改革の動向を知る
- ラーニング・アウトカムズが重視される背景を理解する
- ラーニング・アウトカムズとは何かを理解する
- 学士課程教育のラーニング・アウトカムズを考える際の課題を明示する
- 山形大学における課題を提起する

3

そういうわけで、本日の、今日皆さん方のラーニング・アウトカムズということで私から提示させていただきたいわけですが、学士課程教育改革の動向を知るといって。それからラーニング・アウトカムズが重視される背景を理解する。それからラーニング・アウトカムズとは何かを理解する。それから学士課程教育のラーニング・アウトカムズを考える際の課題を明示する。それから山形大学における課題を提起する、



ということをご自身のラーニング・アウトカムズとしてご提案させていただきたいというふうに思います。

### 本日の報告

1. 学士課程教育改革への道
2. 社会が求める人材像
3. 知識・能力の証明としての「学士号」
4. ラーニング・アウトカムズをめぐる内外の動向
5. ソフトスキルの獲得は……

4

今日の報告ですけれども、先ほどのラーニング・アウトカムズ、本日皆さんのラーニング・アウトカムズに大体添うような形になるわけでありましてけれども、歴史的な流れとして学士課程教育改革というのはどういふふうな道のりをたどってきたのかということ。それから、それと裏表の関係にあります社会が求める人材像について触れます。それからさつきから4年間一貫の学士課程という言い方をしていますけれども、じゃあそもそも学士号というのは何なのかということについてのお話をさせていただきます。それからラーニング・アウトカムズをめぐる内外の動向をまあ簡単にレビューさせていただいて、最後にあのラーニング・アウトカムズの中でも非常に、特に問題になると思われましてソフトスキル、つまりコミュニケーション能力だとかリーダーシップだとか、言葉としてはいろいろいえるけれども、実際どういふ能力なのか。あるいはその能力を測定するためにどういふツールがあるのかということが、なかなかピンとこないような話なんですけれども、それについてお話をさせていただければというふうに思います。

### 1. 学士課程教育改革への道

5

最初に学士課程教育ということをお話しします。かつては学部教育と、かつてはどうか今でも、学部教育という言い方をしておりました。そういう言い方は止めて学士課程教育という言い方に統一しましょうということに、文科省とか中教審の方でもそういうふうになっておりますし、私もそれに賛成ですので今日そういうふうにご提案するわけですけれども、学部教育概念のあいまいさを解消するというわけですけれども、学部教育といった場合、まずその学部段階の教育のことを今は指しております。

つまり大学院教育の対語としての学部教育という言い方がされているようですが、でも考えてみますと、学部っていうのは決して段階ではないわけですね。学部っていうのは専門分野、それも今だんだんいろいろなカタカナ学部が出てきて怪しくなってきましたけれども、一応専門分野、つまり学術の部という意味であります。

古い話を申し上げますと、部というのは「とがら」という意味もあるそうにして、つまりそういうことをやる人たちの集まりといえますか、そういうのになりますとだんだん英語のファカルティに近くなっていくんだろうと思うわけですが、そもそも学部っていうのは段階ではないわけですね。ですから大学院の対語というのはいかぬ。大体、学部教育という言い方をすれば、研究科教育という言い方をしたほうがよさそうなものですがそういう言い方はしないということがあります。

多くの大学で学部共通教育というのがあるわけですが、学部共通教育は、あれは学部教育のカテゴリーに、おそらく皆さんは入れて使っている。大方の大学がそういうふうに入れて使っているというふうには思いますが、これほど、何というか矛盾した概念といえますか、学部教育に入れて、学部は専門を指す言葉であるはずなわけですから、学部共通教育という言い方はあまりよろしくない、ということが言えるんだろうというふうに思います。

それから大綱化以前の教養教育ですね、教養部の教育、これは学部教育なんですか。学部段階の教育という意味では学部教育でありますけれども、あの頃の学部教育といえますと、どちらかというと教養部の教育じゃない専門課程の教育というふうなニュアンスも含まれていたというふうに思います。実にあいまいであったわけです。加えて学部を持たない大学もございます。筑波大学、福島大学、それから金沢大学ももう学部を無くすという方向で、もうこれは決まっているということでもあります。学部概念というのはいかぬし、まずそれから英語に訳せない、という問題があります。

ならば大学教育が適切かというふうにいえますと、たぶん大学教育が比較的適切な言葉に近いんでしょうけれども、実は大学という概念も法令上はかなりいい加減といえますかあいまいなところが多いわけです。

まず学校教育法の規定をざっと見ていきますと、その、大学の修業年限は4年とすると。ただし特別の学部、つまり、医学部、歯学部、薬学部、獣医学部ですけれども、それについては6年でもいいという規定があるわけですね。ですからここであの、大学っていうのは4年間、4年が原則だと。4年制大学本主義という言葉をよく我々は使いますが、本主義っていうのは「本」にそれから「体」という字ですけれども、4年制大学っていうのを基本的に考えているわけです。ですからそこで、ここでの規定には大学院の話なんて何も入っていないわけですね。もう4年が大学だっているわけですから。

ところが一方では大学には大学院を置くことができるというふうには書いてあるわけです。で、そのくせですね、設置基準、設置基準というのは学校種別に作られているものです。大学というものは、学校教育法に規定されているわけですからあれは一種の学校、あれはカテゴリーです。設置基準

は大学設置基準と大学院設置基準が別にあるということで別の学校種というふうな位置づけ方がされている。

おまけにもっとひどいことに専門職大学院設置基準もある。専門職大学院というのは、学校種ではないわけですね。あれはあくまでも大学院です。専門職学位課程を持つ大学院であるのに、それも設置基準があって一種の学校種のような扱いを受けているということで、このあたりは本当に決まっていないという問題があります。

それからもっと酷いといえますか、学部を置くことなく大学院を置くものを大学とすることができるといって、いわゆる大学院大学もあるということで、大学院だけの、大学院課程だけの大学もあるということで、なかなか学部という言葉をちゃんと使えないということがあります。

ですから、大学とか、大学院という組織ではなく、その課程に基づく教育というものを中心に考えていく必要があるというふうな考え方がでてきたというわけであるわけです。

そうやってきますと、課程を修了したということはいったいどういうことなのかということが問われてくると思います。学士課程を修了したというのは一体、修了した人間というのは一体どういう人間になっているのか。あるいは修士課程を修了した人間というのはどういう人間になっているのかということで、そこでそのまさに学習成果、ラーニング・アウトカムズが問われてくるという話になってきているわけで、流れとしてはそうやってきているわけです。

いろいろ政府関係の資料を用意させていただいている中で、「我が国の高等教育の将来像」という、「第3章新時代における高等教育機関のあり方」というところがあると思いますけれども、その(1)大学の下の囲みの中、その3パラグラフ目、4行でありますけど、読ませていただきますと、「国際的通用性のある大学教育」、ここでは大学教育という言葉を使っているんですけど、「大学教育または大学院教育」、少なくとも学部教育という言葉はここでは使っていないということです。「大学院教育の課程の修了に係る知識・能力の証明としての学位」、この「課程の修了に係る知識・能力の証明としての学位」、という言葉も非常に重要であるわけですけれども、「の本質を踏まえつつ、今後は、教育の充実の観点から学部や大学院といった組織に着目した整理を、学士・修士・博士・専門職学位といった学位を与える課程中心の考え方に再整理していく必要がある」、というふうなここで述べられているのも、私が今申し上げたことの反映であるわけなんです。

#### 高等教育政策の流れ(2000年代～)

- 1998年10月26日 21世紀の大学像と今後の改革方策について  
—競争的環境の中で個性が輝く大学—(答申)(次学審議会)
- 2002年8月5日 法科大学院の設置基準等について(答申)
- 大学院における高度専門職業人養成について(答申)
- 大学の質の保証に係る新たなシステムの構築について(答申)
- 2004年4月 国立大学の法人化  
=大きな制度改革
- 2005年1月28日 我が国の高等教育の将来像(答申)・・・「機能的分化」
- 2005年9月5日 新時代の大学院教育—国際的に魅力ある大学院教育の構築に向けて—(答申)・・・「大学院教育の実質化」
- 2007年夏頃 学士課程教育の改革案?・・・教育コンテンツが焦点に?

6

ということで、今、我が国の高等教育の将来像についてのお話をしましたけれども、高等教育政策の大きな流れをちょっと見ていきますと、1991年が例の設置基準の大綱化によって、いわゆる自然科学、人文科学、社会科学という、そんなカテゴリーがなくなったということなんですけれども、大きな二つの答申というのがあります、一つは1998年の「21世紀の大学像と今後の改革方策について」。サブタイトルが競争的環境の中で個性が輝く大学へ、というものでした。この時はまだ大学審議会でした。それから2005年の1月ですね、1月28日の、「我が国の高等教育の将来像」というものが、これは中央教育審議会の大学分科会から出されています。この二つの答申が非常に重要なものであるわけです。

この二つの答申ですね。21世紀の大学像と今後の改革方策について。これはどういうことをそこで謳われているかという、今日のお話に関係するのは1番です。課題探求能力というのが大学教育の目標なんだということが言われました。ただ、世間的に非常に大きかったのは4番目です。評価システムというのを導入しなさいということが、ここではっきり、第三者評価ですね、言われて、これが1998年でしたけれども、略して我々は「21世紀答申」という言葉をよく使います。ですから今日も「21世紀答申」という言葉を使うかもしれませんが、この答申だというふうに理解してください。これを受けて、さっき申し上げたような大学評価・学位授与機構というのができたりとか、大学基準協会が認証評価機関として準備していくというふうな体制ができていって、例の2004年の大学評価の開始ということになってきたわけです。

それから、あと真ん中の2つですね。裁量権を拡大したということだとか組織運営システムの確立なんかで、例えば大学のガバナンスのあり方なんかについて新しいことが言われました。それからちょっとここで5番目に書いておくべきだったんですけども、高度専門職業人教育ということがここでも、そういう体制を整えなさいということが言われてきて、つまりそういう評価の問題と高度専門職業人養成というのがその「21世紀答申」での宿題であったわけです。2002年の8月に、我々は3部作、3部作というふうに言うんですけども、ちょうど法曹改革と連動する形での法科大学院の設置。それからいわゆる専門職大学院ですね。それから認証評価システムの、いわゆる3部作答申が出てきたわけです。ところがその頃からですね、行政改革の波を横波に受けながら結局くすぶっていた法人化問題というのが2004年に結実するというかそういう結果になるということに、大雑把に言えばそういうことになります。

何が申し上げたいかといいますと、2000年代の前半の4、5年の間非常に大きな制度改革というのが行なわれたということをお願いしたいというわけです。

2005年の「我が国の高等教育の将来像」これは略称「将来像答申」というふうに言いますのでご了承ください。そこでは「機能的分化」ということが言われます。つまり例の7つのカテゴリー。そういうのは皆さんもう当然ご承知ですよ。大学は7つのカテゴリーに分かれていくだろうということが言わ



れておりました。

実はですね、この二つの答申というのはかなりトーンが違  
うんです。つまり「21世紀答申」というのは非常にその明確  
なビジョンというのがありました。つまり競争的環境の中で、  
やっぱり非常に強調したかったのが評価システムです。だ  
から評価というのを導入するんだっていうことが、あそこでか  
なり明確なメッセージとしてあって、21世紀の日本の高等  
教育システムはこうなるんですよっていう形での言われ方が  
されておりました。

それに対して先ほどの、「高等教育の将来像」は、大体  
七つに分かれていこうという言われてしまっていて、  
言ってみれば、もうお手上げという感じで機能的分化してい  
くだろうというふうな言われ方がそこでされたわけです。

お手上げっていうのはどういう意味かっていいますと、そ  
れまで、これは初等・中等教育政策でも同じですけども、  
文教政策は主にやっぱり予算積み上げ方式でやってきた  
わけです。ですから高等教育政策についても、特に量的な  
規模を一体どれくらいにするかということがそれまでの高等  
教育政策の一番の関心事でした。初等中等教育政策では  
それが義務教育費の国庫負担金だとか教員の定数だとか  
かっていうことであつたわけです。だからそれがいつも一番文  
科省の大きな関心事になる。

初等中等教育政策の方も例の義務教育費の国庫負担  
問題が3分の1になって、そういう今までの文科省の、言っ  
てみれば牙城が一部崩されたというふうに申し上げてよろし  
いかと思うんですけども、高等教育政策の方でも、本当  
に多様化が進展する中でその計画的整備、計画という言葉  
がキーワードであつたわけです。それがもうできないと。後  
はもうこういうふうに、言ってみれば各大学が七つの機能の  
中からどれを選ぶか。もちろん一つの大学が複数を選んで  
もかまわないわけですけども、それはそういうふうになっ  
ていくものですよという形で、お任せに近いようなニュアンスも  
あつたんだろうというふうに思うわけです。

ところが、今日お話しするラーニング・アウトカムズの話が  
この1年ぐらいでしょうか、割と強調されるようになりまして、  
それがなぜかといいますと、これは私の本当に独断と偏見  
といいますか私の理解なんですけれども、2006年に、例え  
ば経済産業省が出した社会人基礎力とか、厚生労働省が出  
してきた就職基礎能力っていうふうな概念が他省庁だと  
かマスコミの方から出されてきて、その影響が私は非常  
に強かつたんじゃないのかなと思います。もちろんそれだけ  
ではないでしょうけれども。

「21世紀の大学像と今後の改革方策について」の  
ポイント

- ① 「課題探求能力の育成」という大学教育の目標の  
明確化
- ② 各大学が特色ある教育・研究を自ら創意工夫して  
展開できるようにその裁量を拡大
- ③ 拡大した裁量をしっかりと使いこなせる責任ある組  
織運営システムの確立
- ④ 各大学に対する多面的な評価システムの確立

今日のお話に関係あるところといいますと、課題探求能  
力というところなんです。これは文科省の公的な説明なんです  
けれども、これは「21世紀答申」です、1998年の「21世紀答  
申」でこれが高等教育の目標だというふうに提示されたわけ  
ですけども、「主体的に変化に対応し、自ら将来の課題  
を探求し、その課題に対して幅広い視野から柔軟かつ総  
合的な判断を下すことのできる力」というふうに書かれてい  
るわけです。

課題探求能力

主体的に変化に対応し、自ら将来の  
課題を探求し、その課題に対して幅広  
い視野から柔軟かつ総合的な判断を下  
すことのできる力。

何を注意していただきたいかと言いますと、あくまでもこ  
れは、高等教育を受ける個人のスコープの範囲内で能力  
が語られているということです。

つまり、実は「将来像答申」では、21世紀型市民という言  
葉が出てきます。こちらは、「専攻分野についての専門性を  
有するだけではなく、幅広い教養を身に付け、高い公共  
性・倫理性を保持しつつ、時代の変化に合わせて積極的  
に社会を支え、あるいは社会を改善していく資質を有する  
人材」と言われておいて、公共性だとか社会という言葉が  
新たに付与されているわけです。

なぜそうなのかということが今日のテーマでもあるわけ  
ですけども、明らかにその個人の発達とか成長というスコ  
ープから広がっている。社会とか公共性というものが視野に  
入っている。あるいはそれとの関係を抜きにして、その個人  
の成長だとか、その個人の成長の基盤となる高等教育、大学  
教育を語ることはできないというふうな認識に立っているも  
のだというふうに言えるんだろうと思います。

我が国の高等教育の将来像(答申)

第3章 新時代における高等教育機関の在り方

1 各高等教育機関の教育・研究の質の向上に関する考え

(1) 大学

(エ) 学士課程

《学士課程の多様性》

- 学士課程段階での教育には「教養教育」や「専門基礎教育」等の役割が期待され  
る一方で、職業教育志向もかなり強い。したがって、今後の学士課程教育は、「21  
世紀型市民」の育成・充実に共通の目標として念頭に置きつつ、教育の具体的な方  
法論としては、様々な個性・特色を持つものに分化していくものと考えられる。例え  
ば、学士課程段階では、教養教育と専門基礎教育を中心として主専攻・副専攻の  
組合せを基本としつつ、専門教育は修士・博士課程や専門職学位課程の段階で完  
成させるもの(言わば「総合的教養教育型」)や、学問分野の特性に応じて学士課程  
段階で専門教育を完成させるもの(言わば「専門教育完成型」)等、多様な質の高い  
教育を展開することが期待される。

それで、これは「将来像答申」のある部分なんですけれど  
も、ちょっと細かいですけども読ませていただきます。まず  
上から4行目。学士課程という言葉がはっきり書いてありま  
す。ただこの時には学士課程の多様性という言葉がありま  
して、これもある意味では文科省としては、投げているとい

っちゃうといいすぎかもしれませんけれどもそういうニュアンスがあるのかもしれません。読みます。「学士課程段階での教育には教養教育や専門基礎教育等の役割が期待される一方で、職業教育志向もかなり強い。学士課程教育は21世紀型市民の育成・充実に共通の目標として念頭に置きつつ、」……。

実は「21世紀型市民の育成・充実に共通の目標として念頭に置きつつ」というのは、これは一応目標なんだけど教育の具体的方法論としてはさまざまな個性特色を持つものに分化していくものと考えられると。つまりもう分かちちゃうんだからどうしようもないじゃないのって言う意味の方がやや強かったんだろうというふうに思います。以下は読んでいただければいいんですけども。

**21世紀型市民**

専攻分野についての専門性を有するだけでなく、幅広い教養を身に付け、高い公共性・倫理性を保持しつつ、時代の変化に合わせて積極的に社会を支え、あるいは社会を改善していく資質を有する人材。

13

あと主専攻・副専攻というのたびたび言われることです。これは取り入れている大学が出てきましたので増えていくのかもしれない。最後の一行、「多様で質の高い」多様というのも曲者で、もう要するに分かれていってあとはもう自分たちとしてはあまりもう手を出せるところがないというふうな認識なんだろうというふうに思います。

**七つの機能(『将来像』より)**

- ① 世界的研究・教育拠点
- ② 高度専門職業人養成
- ③ 幅広い職業人養成
- ④ 総合的教養教育
- ⑤ 特定の専門的分野(芸術や体育等)の教育研究
- ⑥ 地域の生涯学習機会の拠点
- ⑦ 社会貢献(地域貢献・産学官連携等)

14

くどいようですが、先ほど申し上げたようにこれがなぜアウトカム重視というところに、なぜ強調されていったのかといいますと、もう一度おさらいしておきますと、ここですね、2006年の時にあとでお話しますが経済産業省とかの、その前後ですね、やはり若者の能力ということに対する関心が高まってきたということとやっぱり軌を一にしているのではないかとこのように思うわけです。

特に将来像ですね、やっぱりそういう文科省がちょっとお任せ的なところっていうのはなぜ出てきたかといいますと、大学ですね、特に学士課程が超マス化していく中で、やっぱり大学院教育というものがそこで逆に問われてきます。大

学院教育のやっぱりコースワークの実質化というのは要するにコースワークの重視ということですが、これも言われていますし、大学院、「新時代の大学院教育」という答申が出ましたし、大学院教育振興施策要綱でしたっけ、そういうアクションプランも出ていますので、大学院教育が実質化していく中でやっぱり学士課程教育に学士課程教育らしきみたいなのものがそこで求められてきているということ。

**「我が国の高等教育の将来像」の読み方**

- ・ 二つの報告書の対照
- ・ \*1998年10月  
「21世紀の大学像と今後の改革案について  
～競争的環境の中で個性が輝く大学～」
- ・ \*2005年2月  
「我が国の高等教育の将来像」

→メッセージ性の強さの違いは何故?

15

それから多様化の極限の中で、高等教育の一体性の危機という状態が出てきたんだろうと思います。先ほどから申し上げてますように政策による統御力というのは減退してきていると。だから政策、これはもう「将来像答申」でも言われていますけれども、規制と計画の時代から政策誘導の時代に変ったんだということであるわけです。

政策誘導の時代が変わるということはある程度のコンテンツへの関わりというのが当局側にとって求められてきます。つまりらしさの内容、つまり具体的で精密な吟味というものが教育内容や方法について求められてくるし、それからどういふふうな方法で関与していくかと。これの一つの答えがCOEでありGPであるというふうに考えてよろしいのではないのかな、というふうに思います。

**我が国の高等教育の将来像(答申)**

第5章 「高等教育の将来像」に向けて取り組むべき施策

2 将来像に向けて具体的に取り組むべき施策

(1) 早急に取り組むべき重点施策(「12の提言」)

◎ 高等教育の多様な機能と個性・特色の明確化についての関連施策(入学者選抜・教育課程の改善、「出口管理」の強化)

○ 大学・短期大学への進学率が約50%に達し、高等専門学校や専門学校を加えた進学率が約75%に達している状況を踏まえ、各高等教育機関の個性・特色の明確化を通じた機能別分化を促進すべきである。特に、各機関ごとのアドミッション・ポリシー(入学者選抜の改善)、カリキュラム・ポリシー(教育課程の改善)、ディプロマ・ポリシー(「出口管理」の強化)の明確化を支援する必要がある。

16

「将来像答申」の中で文科省が、「将来像答申」でちゃんと宿題として出ている事をやっているんだということを言うためのフレーズがあります。特にこの下の4行辺りですけれども、「各高等教育機関の個性・特色の明確化を通じた機能的分化を促進すべきである」と。「特に各機関ごとのアドミッションポリシー(入学者選抜の改善)、カリキュラム・ポリシー(教育課程の改善)、ディプロマ・ポリシー(出口管理の強化)の明確化を支援する必要がある。」と。今、学士課程教育に関する議論を文部科学省はやっておりますけれども、まさにこれを行っているんだということです。特にディプロマ・



ポリシーですね、出口管理。今日のアウトカムズ重視というのはまさに出口管理そのものだというふうに申し上げてもよろしいかというふうに思います。

**「将来像」からの提示と示唆  
＝システム環境の変化**

- ・① 大学の「超」マス化→大学院教育の「実質化」  
→学士課程教育に「らしさ」が求められる
- ・② 多様化の極限→高等教育政策の一体性の  
危機、政策による統御力の減退  
→「政策観」の転換:「政策誘導の時代」の到来

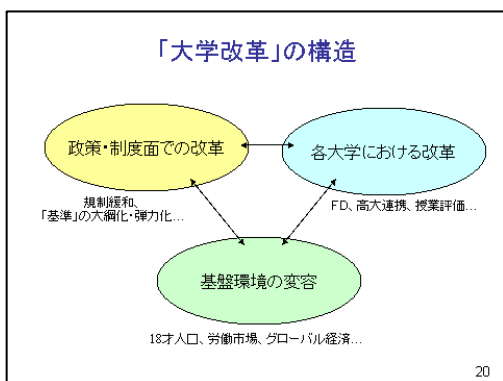
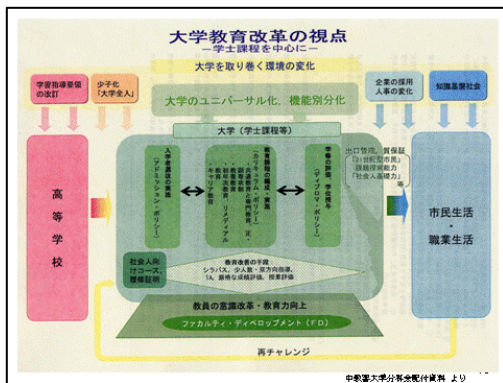
17

**上記システム環境の下での選択的プログラム  
支援行政を捉え直すと...**

- ・① 「らしさ」→教育内容・方法に関する各  
論の具体的で精緻な吟味
- ・② 教育内容への政策的関与(非関与)の  
あり方は？

18

これは私が書いた図でして。こういう制度面での改革と各大学における改革というのは、実は基盤環境というものによって非常に大きく影響されているということ。特にシステム環境です。



今日ぜひ考えていただきたいことに、知識基盤社会とい

う言葉をあとで申し上げますけれども、まさに知識基盤社会というのは何なのかということが、やはり今の制度改革なり各大学のそれぞれでの取り組みに忘れてはならない要因としてあるということです。その知識基盤社会をどう考えるのかということはまたあとで触れたいというふうに思います。あとでいうかもうすぐですけれども。

なぜラーニング・アウトカムズが重要なのかということなんですけれども、ここでずっと書いているのは一般的な、教科書的な説明であります。知識基盤社会というのが到来してきて、知識の量ではなく知識の活用能力が問題になってきているんだと。それから国際競争力の強化の中で、まさに、ある知識というものが圧倒的に国の経済力だとか国際競争力を左右してしまうということがあります。これはもう今の先端的な技術を見ていただければこれは枚挙に暇がないというふうに思います。

**知識基盤社会**

英語のknowledge-based societyに相当する語。論者によって定義付けは異なるが、一般的に、知識が社会・経済の発展を駆動する基本的な要素となる社会を指す。類義語として、知識社会、知識重視社会、知識主導型社会等がある。

21

それから労働環境の変容。特に企業側から即戦力重視ということが言われています。ただ即戦力といいますがこれはこういう問題をよく扱っているリクルートの研究所の人たちなんかがよく言っていることなんですけれども、即戦力というのはすぐに使える能力というのではなくて、企業の中に入ってからその企業の中で育成する時間ができるだけ短くて済む人間、それを実は即戦力というふうに言っているんだと。言葉の厳密な意味での即戦力なんてあるわけがないということです。

それから大学のユニバーサル化の中で、学習意欲の非常に希薄な学生が出てきている。学力の問題もさることながら、特にモチベーションに欠けている学生、これをどうするかという問題が非常に深刻な問題になっていると。それから大学教育のアカウンタビリティ。大学は一体何をしているんだと。大学から出てくる人たちが一体どういう付加価値を与えられて大学から出てきているのか。それは、その付加価値というのは果たして大学に投入されている資源にふさわしいだけのものであるのかということが問われてきているということ。それから一つちょっと忘れてのが、国際的な通用性の問題というのがもう一つあります。

結局、繰り返しですけれども何を教えるかということではなくて、結果として学生が一体どういうふうなことができるようになった学生として卒業していくのかということが問われてきているということが、ラーニング・アウトカムズが重要になってくる背景ということで、これは一応教科書的な説明であります。

もう一つ教科書的な説明を続けます。知識基盤社会、これも文科省の文書の中にある説明ですので、いわゆる公式見解ということになります。一般的に知識が社会・経済の発展を駆動する基本的な要素となる社会を指す、ということなんですけれども、これ以上の説明をしてくれないんです。実は中教審答申でも。

これで人を動かすのはちょっと言葉が足りないんじゃないのっていうのが私が思っているところでして、といっても私が考えたのはこのスライドだけなんですけれども、その中でここが足りないと思って、そこで考えたのがせいぜいこれぐらいなんですけれども。

それは、先ほど、課題探求能力のところの話と21世紀型市民のところ、社会性とか公共性というキーワードをお示ししたというふうに思います。そのことと関係あるわけですけども、まずその先端的・専門的知識というものが出てくると、その現実が変わっていくわけですね。我々を取り巻くまざまざまな物だとかそんなものも変わりますし、それから我々の規範意識そのものも変わっていくかもしれません。例えば遺伝子工学の発達、私は文科系人間なので理系のことはちょっと頓珍漢なことを申し上げてしまうかもしれませんが、遺伝子工学の発達というのは、今まで人間がまったく抗うことのできない、運命として受け入れざるをえなかったまざままな条件というものを可塑的にした、つまり作り変えていくことができるようにしてしまったわけです。それは当然我々の意識だとか規範というものを変えていくわけです。

つまりそれがここに書いてあります新たに出現した現実です。つまり操作できるようになってしまった、つまり技術を持ってきてしまった我々人間だとかその社会というものを一体どういうふうに考えていくのか、という問題が出てくるんだろうというふうに思います。つまり先端的な技術というものがどんどんどんどん進んでいって物事を解決していくようなツールとかテクニックというのが高められていくというだけではなくて、それが実は我々の基盤そのものを揺り動かしている。変えていっている。溶かしてしまっている。どんな表現がいいのかわかりませんが、そういう状況が生まれてきているんだろうというふうに思います。

これは例の手段的合理性の肥大化っていうふうな言葉で社会哲学の方で語られてきた言葉でもあるわけですけども、ですから高度技術がもたらす人間と社会の変容だとか、その中で個人が一体どのようにして展開していくのかという基盤みたいなものをどこが支えるのかということが問われてきている。まさにその答えが大学であり高等教育であるというふうに思うわけですけども、そういう、なにも経済発展のためだけの技術だとか社会が便利になるためだけだというのはなくて、まさに社会そのものが変わっていく。その社会の中で生きていく若者を実は大学が預かっているんだというところから考えていかなければいけない。

そういう中で、その大学が一体どういうことができる学生がそこで出て行くのかと。特に専門分野を超えたラーニング・アウトカムズ、つまり汎用的能力ということですけども、それはいろいろな能力があると思います。さっきから申し上げているようなコミュニケーション能力だとか、リーダーシッ

ブだとか問題解決力だとか、論理性だとかいろいろあると思いますけれども、そういう能力をどういう、まさにこのとてつもなく変わっていきこうとしている社会に対してどういうふうに生きていけるか、若者を育てていけるのかというところで大学が問われていると。だからこそラーニング・アウトカムズというのがそこで言われているんだというふうな受け止めるべきなんだらうと思います。

これは私が一応ひねり出したフレーズであるわけですけども、輻輳する公共空間において自らの立ち位置を見出す能力、というものをやっぱり大学は作っていったりやる必要がある。実は、いくつか、日本の例にしる外国の例にしる、人間と社会、人間と人間との関係性に関わるラーニング・アウトカムズという言葉が非常に大きい、多くそこで見られているということのそれは証明になるんだらうというふうに思います。

中央教育審議会 大学分科会制度・教育部会 学士課程教育の在り方に関する小委員会	
第1回 平成19年4月 6日(金)	} 非公開
第2回 平成19年5月10日(木)	
第3回 平成19年5月25日(金)	
第4回 平成19年6月 4日(月)	
第5回 平成19年6月12日(火)	
第6回 ?	

実は今、中教審の学士課程教育に関する、中教審もいろいろ組織が多くて、中央教育審議会の中に分科会がありまして、高等教育は大学分科会です。その中に部会がありまして、制度・教育部会というのがあってその下に「学士課程教育の在り方に関する小委員会」というのが作られまして、これが平成19年の4月からやっています。

まだ議論がホットな状態であるわけですけども、非常に異例なことに第2回から第5回までは非公開でした。普段中教審の議論は一応全部マスコミには、公開といってもマスコミ関係者ということに限定されるわけですけども。その大学教育の中身について細かいところについてまで触れているわけです。いずれ議事録として公開するからということもありますし、それから途中経過というものが漏れるということはどうも予断と偏見を与える危険性があるということで非公開でした。第6回が最終回でして、これは9月上旬に開かれる予定になっています。

小委員会の報告が部会にあがってさらに分科会にあがって、それが承認されるということですけども、ただこれは答申ということではなくてこの小委員会の中間報告という形になりそうです。つまり、はっきりいって格下げになったんだらうというふうに思います。当初の、いろいろなオプションの中では一番影響力の小さいものになったんだらうというふうに、私の理解ですよ、というふうに思います。

お手元の資料の中に、「学士課程教育の再生のために(試案)」というのがあると思います。これは右肩のところに「資料10」とありまして、「中央教育審議会大学分科会制



度・教育部会学士課程教育の在り方に関する小委員会（第1回）」と書いてありますように、第1回は公開したのでこれを私がお配りすることは別に問題ないし、第1回の資料については、実はこれはインターネット上にも公開されております。

今日ここで喋れということをお田先生から要請されたときに、その時は夏前までにこれは、この学士課程教育に関する議論は決着をつけるというふうな話だった。ですから私は今日はその結論みたいなことをちょこちょことお話させていただければ結構ネタは確保できるかなというふうに皮算用を踏んでいたわけなんですけれども、ずっと遅れてしまって、最初は夏前までというふうに言っていたんですけれども、夏ももう今盛りで、実は最後は9月だということなんです。

2回、3回、4回、5回の資料は皆さんにはお配りできないと。

それで、一枚目が基本的な考え方というところで、これは事務局が作った項目です。その中で特に問題、ここで強調されるのはその、「国による支援の方向性」というところで、最初の丸のところ。「機能的文化の促進とともに、学士課程教育の役割、わが国の学士の水準に関する枠組み作り」を国がやっぱり支援してやらなければならないというふうに考えているということです。

それからさっきの3つのポリシーです。これは当然冒頭に書いているということで、ここでも言い方にご注意いただきたいんですが、今度はさっきの、「将来像答申」の本文のところでは、21世紀型市民を何々しつつ分化していきだろうだったんです。ところがこのフレーズを見ると今度は分化していくとともに学士の水準に関する枠組み作りが必要ということで、逆転している。つまり重視しているところが逆転したというふうに、これも私の理解ですが、受け止めておそろくいんだらうというふうに思うわけなんです。

学士課程教育の改善充実に向けた主な意見の例ということで、これは主な意見の例ですので、その委員さんが言った個別の意見であります。ですからこの内容について文部科学省が何か責任を持つということではないわけなんですけれども、大体これに添う形で進んでいっているというふうに理解してよろしいかというふうに思うわけです。

それで例えば2のところ。「学修の評価、学位の授与（ディプロマ・ポリシー等）」というところの最初の丸ですけれども、「国として、学士課程で育成する21世紀型市民の内容、個々の専門分野を超えた汎用的能力」これはジェネリック・スキルという言葉で最近言われておりますけれども、そのジェネリック・スキル、つまり「日本の大学が授与する学士が最低限保障する能力の内容を明確にするべき」だと。大体この筋で物事は今進んでおります。

それから、各大学が抽象的な人材養成の目的に止まらず、各学習プログラムについて、到達目標、学習成果、文字通りラーニング・アウトカムズであります、を明確にすべきだと、いうふうに書いています。

それから飛ばしまして、3の「教育内容・方法等」でありますけれども、その最初の丸、白丸のところなんですけれども、

「明確にされた到達目標、学習成果の達成・習得に向け、順次性のある体系的な教育課程を編成することが必要」であると。これはカリキュラム・マップという言葉で集約されません。

それから次の白丸ですけれども、これは冒頭私が申し上げたことでもあるわけなんですけれども、「教養教育や専門教育の意味が曖昧化しており、そうした区分に拘るのではなく、4年間一貫した学士過程教育として総合化・構造化すべき」であると。

というふうなことが言われておまして、時間がないので全部は読みませんが、このように、本当に事細かに触れていっているということでもあります。もちろんこれは第1回目の委員会の時のペーパーでありますので、ここから抜けるものもあれば新たに加わるものもあるということはお承知おきいただきたいというふうに思います。

さて、それで、教育課程の話、学士課程の話は一応そうなんですけれども、もう一つ、考えておかなければならないのは攪乱要因としての政治過程という言葉は私は付けましたけれども、市場的競争モデルの方のベクトルは、それこそ波のように強い時もあれば引く時もあるという形で、いろいろとその大学、高等教育政策の方にも影響を及ぼしてまいります。

特に問題なのが、教育再生会議とそれから経済財政運営の基本方針、いわゆる「骨太の方針」というものであります。で、これも一応資料をお配りしております。教育再生会議の方は、座長が野依良治さんということもありまして、やっぱり主にその自然科学系のことが念頭にあり、それからいわゆるそのトップ人材の育成ということが重要なところがありますので、それほど学士課程のことが直接に入ってきているというわけではありません。

#### 攪乱要因としての政治過程 :市場的競争モデル

- 教育再生会議第二次報告
- 経済財政運営の基本方針2007  
“骨太の方針”  
閣議決定→政府全体を拘束
- 国際化圧力→9月入学？
- 経済的競争力の強化圧力  
→人材モデル

23

時間も押していますのでそれはちょっと飛ばしますが、それから経済財政運営の基本方針、いわゆる骨太です、こちらの方も、非常に重要な問題があるんですが、こちら資料をお配りしていると思います。問題なのは、資料の3ページですか、「大学・大学院改革」というところで、「以下の改革を含め教育再生会議第二次報告に基づき重点的に取り組む」というふうに書かれておまして、教育再生会議の報告に基づくという文言が入っちゃっているということです。

それから教育の質の保証で、卒業認定の厳格化ということで今日のラーニング・アウトカムズと多少関係があるところがあります。それからちょっと話が外れますけれども、国際

化の取り組みのところが5,6行目ぐらいでしょうか、大学の4月入学原則を弾力化して、国立大学について、全国立大学での9月入学枠の設定を実現するというふうに断定されております。

こちらにも書いていますように、骨太の方針というのは実は閣議決定されているわけです。閣議決定というのは政府全体を拘束します。政府全体を拘束するという事は必ずそれを制度化する、100%制度化することと同義ではありませんけれども、少なくとも政府としてはアクションを起こさなければならないということになってくるわけなんです。

近くの岩手大学ではもう既に9月入学枠の設定に向けて、大学院だけでしたでしょうか、動き出しているというふうに聞いておりますので、9月入学もこれは間欠泉のように湧いちゃ沈み湧いちゃ沈みきて、あんまり大学関係者は本気にはしていなかったところがありますけれども、閣議決定されてしまったということかなりの重みがあるということで、そういう、どうしても政治過程のほうでも問題が出てくると。

ついでに言うて参議院選挙の結果、当然政治的なさまざまな要因が影響するわけですから参議院の選挙の結果この閣議決定の重みといいますか強みといいますか、押しの強さが弱くなったことはこれまた確かでもあるということで、これはちょっと今後わからないということがあります。それからずっと絶えず続くこの経済的競争力の強化圧力というところから人材モデルということが出てきていて、そして次の社会が求める人材像の話へいくということになっていくわけがあります。

長丁場ですのでそこまで何かご質問かなにかあれば、一分ほど考えてください。

**司会** それではここまでのところで何かご質問あれば。



**小田** 山形大学高等教育研究企画センターの小田でございます。

最後の話なんですけれども攪乱要因というものが、登場して、それは政治的に常にあったんだろうけれども、何か急に大きくなった印象を受けるんですけれども、この大学教育とか、高等教育に、教育再生会議とか財界とかが、やってそれを文部行政の中に受けるようになったのは急激じゃないかと思うんですけれども、実際にそうなのか、過去にもそうあったのか、実際はどうなんでしょうか。そして実際に閣議決定された骨太の方針の国際化の圧力、9月入試がまさに大学に、山形大学にも、全国の大学に、概算要求として現れてきている。すぐ答えなくちゃいけないようになってきた。それは

つい最近のことなのかそれとも昔から、あったことなのか、教えてください。

**川島** 私に答える資格があるかどうかちょっとわからない部分もあるんですけども、昔からあったし、けれども最近とつても強くなったということがいえるんだろうというふうに思います。それはやっぱりなぜかという、そういう国際競争というものに対する答えを出すという形での政治的なリアクションがないとどこも納得してくれない。これは別に教育に限った話ではないと思うんですけども、だから教育が例外ではなくなったということです。

それからこれはある受験産業の人といってもかなり有力な方で、いろいろな委員会なんかにも時々顔を出している方ですけども、その方が言ってらっしゃった台詞に、何年か前かの台詞でしたか、銀行がああなつた。つまり銀行というのはまったく護送船団方式で、つまり、何年か前に、例えば三井と住友が合併するなんて我々考えてもみなかったわけです。三和銀行、三和っていう名前がなくなる何ということもおそらく信じられないようなことだったわけです。それが現実起こったわけです。銀行がああなつた。「次は大学」だっていうふうにその方は言っていました。

つまり大学っていうのはそういう社会的な激動の中から唯一免れてきた時空間であったということは偽らざるところだというふうに思います。ですから、政治というのは次にどういふところのリソースを引っぺがしてきてそれを組み替えて新しい状況に対応して、カードとして出せるかということを考えるわけですから、大学が手付かずであったということは間違いのないところ。だから最近それが非常に強くなったということはある意味で当然かなというふうに思います。

ですから大学人はそれに対して何か答えなきゃいけないというふうな、そういうふうな状況になっているんだろうというふうに思うわけです。

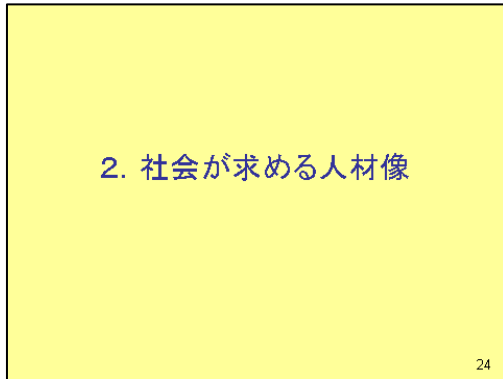
この間、法人化で国立大学はものすごく変わったと思うんです。変わってないと思っていらっしゃる方もいらっしゃるかもしれませんが、かなり変わったという答えを大学が出してもやっぱり文部科学省のほうはよくやっただけ、ご苦労さんでしたという答えじゃなくて、まだこれだけ、まだこれだけというふうに言っている。ただそれはおそらく文部科学省もそういうふうに言いたいからやっているというよりは、やはり官邸サイドだとか、財務省、経産省からの圧力が強いんだろうというふうに思います。

基本的に、文部科学省にとっては、国立大学は非常に重要な存在なんです。やっぱり自分のファミリーであるわけです。それは、彼らの人事からしてそうなわけです。大学の事務の方の人事と文部科学省というよりは文部省です、文部省の人事というのは一体のものだったわけです。だから大学というのは絶対ちゃんと存続してもらわなくちゃ困るし、法人化というのも当初は絶対反対だった。あれは本心だったと思います。

今日「21世紀答申」というものに何度も触れていますけれども、「21世紀答申」というのは実は、私の理解ですけども、法人化されないために作った答申だというふうにも読

めます。何とかして法人化を防ぎたい。だから競争的な環境を導入するんだと、評価もやりますと、社会の期待にこたえますというふうな、まさにメッセージが非常に強い答申だったわけです。

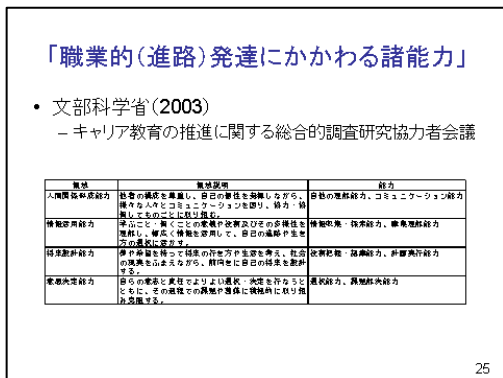
ところがそれをやってもやっぱり法人化からは逃れられないという結末になっていったわけです。これはなかなか厳しいところがあるんだろうというふうに思います。よろしいでしょうか。



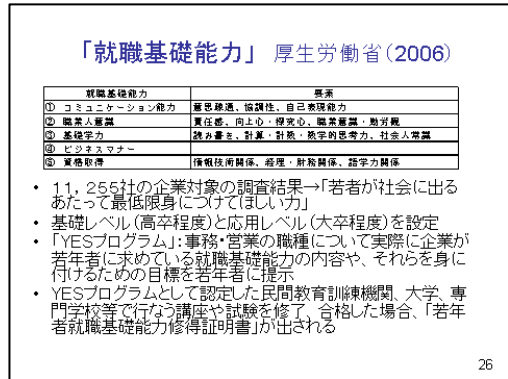
それでは続けます。その人材像をめぐっては、先ほど申し上げましたように2006年に経産省、厚労省と経産省から出てきたわけですが、省庁、産業界からの能力の明示というのは非常に厳しくなってきました。初中段階ではある程度の能力というのがいわれている中で、大学がユニバーサル化されていく中で、一体、大学教育は何をするんだという問いが出てきているということです。

アウトカムズに対する説明責任が今までなかった。それからアウトカムズを評価する必要性が出てきたということで、特に、ラーニング・アウトカムズを測定というかそれを評価する指標としてジェネリック・スキル、汎用的能力というものがあるという考え方が出てきたわけです。

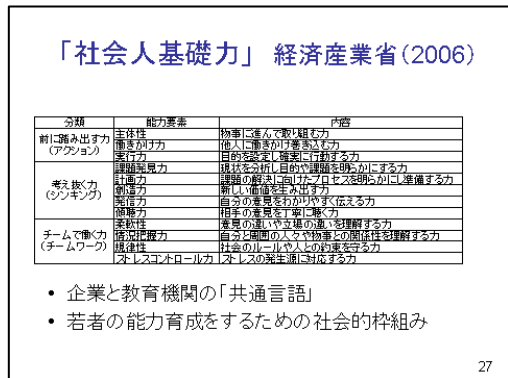
それで、この雑誌が、これドキッとしちゃうんですね、首がない写真がありまして。これは読売新聞社が出した、「息子・娘を成長させる大学」というものなんです。新たな成長指標、社会人基礎力というのは何かというのが巻頭特集になっております。これは結構影響がありましたし、読んでみますと結構よく取材できているんです。私たちがこの雑誌を見て、何とか大学がこんなことをやっているということを知って、そこにヒアリングに行ったりとか、本末転倒なことになっていたりもするわけなんですけれども。文科省も実はこういうものを出しているんですけれども、これはもう飛ばします。



厚生労働省の方の、就職基礎力ですが、これはお手元にハンドアウトがあるので、6スライドのもので読みにくいかと思うんですが、これは、1万社あまりを調査してどんな能力を身につけてほしいかという調査に基づいて作った指標であって、YESプログラムっていうのと連動させたいんです。この辺も省庁が、自分のところの仕事をちゃんと確保しておきたいという意図が見ているといえは見えているんですけども。



コミュニケーション能力、職業人意識、基礎学力、ビジネスマナー、資格取得というふうになっていまして、実はこれは相当実践的なんです。職業人意識とビジネスマナー、資格取得、なんていうのは本当に相当実践色があるというふうに理解していただいていると思います。ただ、コミュニケーション能力というのが筆頭に来るところ、ここは押さえておいていただきたいというふうに思います。



次の社会人基礎力なんですけれども、これが結構よくできているし、経産省は、コンセプトもなかなか明快でうまいです。ソフトスキルと言いますか、人間の、最も根源的な能力のところを整理しようという意図が出てきているわけです。

前に踏み出す力、アクション。考え抜く力、シンキング。チームで働く力。それぞれの能力要素というのが合計12あるということで、まあ何とか読んでいただくと、読み上げていると時間がありませんので、先ほどの就職基礎能力とはずいぶん違うということがわかっていただけというふうに思います。

これは、経産省が、「社会人基礎能力に関する研究会」というのを立ち上げて、そういう有識者なり学者なりの力を得てこういうものを作ったわけなんですけれども、その考え方が、ここに書いていますように、企業と教育機関の共通言語を作ろうと。





けれども、何かその人間の力になっているもの。それから基礎スキルといって、まあ基礎学力を含めたアカデミック・スキルです。ライティングとかリーディングとか、そういう基礎スキル。それから専門的な領域で知識と。それから4つ目としてその統合みたいなものを言う人もいますわけですが、大体そういうふうなものだというふうにイメージしていただければいいと思います。

### これからの大学教育に求められるもの

- 学士号(大学教育を修了すること)の意味
  - 大学教育で何が身についたのか?
  - 何ができるようになったのか?
  - 獲得すべき能力の具体的な明示とその評価
- 大学教育の「成果(outcome)」の明示
  - ex. ジェネリック・スキルの獲得
- 大学教育の役割
  - 各学生がそれぞれの能力を活かし、社会への円滑な移行を遂げるよう支援する

34

大学教育の成果が言われ、例としてジェネリック・スキルをどうやって獲得するのかと。大学教育は各学生がそれぞれの能力を獲得して、社会への円滑な移行を遂げるように支援するのが大学教育の役割であろう、ということ、これは実は経産省の報告書にもあるんですけども、各国で使用されているジェネリック・スキルを表す言葉があるわけです。

### ジェネリックスキルとは何か

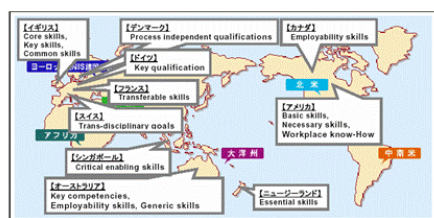
表1. 各国で使用されているジェネリックスキルを示す用語

イギリス	Core skills, key skills, common skills
ニュージーランド	Essential skills
オーストラリア	Key competencies, employability skills, generic skills
カナダ	Employability skills
アメリカ	Basis skills, necessary skills, workplace skills, know-how
シンガポール	Critical enabling skills
フランス	Transferable skills
ドイツ	Key qualifications
スイス	Trans-disciplinary goals
デンマーク	Process independent qualifications

(Australian National Training Authority, 2003)

35

### 各国での社会人基礎力に相当する能力の呼称



資料: Australian National Training Authority(2003) (Defining generic skills)

「社会人基礎力」育修のスキマ(経産省報告)より

36

イギリスは core skills とか key skills とか common skills だとか、ニュージーランドが essential skills。オーストラリアが Key competencies, employability skills, generic skills。カナダが employability skills。イギリスの場合、もう同じような言葉が並んでいますので、後読みません。

1997 年にデアリング報告というのが出まして、ここで、高

等教育におけるアウトカムズの明示とキー・スキルズ、まあジェネリック・スキルと同じですけれども、それを焦点化するというので、例としてコミュニケーション・スキル、それから数的処理能力、それから IT 活用能力ということがいわれています。学習のための学習、学ぶための技術みたいなものなんですけれども、そういうことが言われていると。

### イギリスの動向

- デアリング報告書(1997)
  - 高等教育におけるoutcomesの明示と“Key Skills”への焦点化
    - コミュニケーション
    - 数的能力
    - IT活用能力
    - 学習のための学習
- 『高等教育の将来』(2003)
  - 18歳から30歳までの高等教育への参加率を50%にまで高める

37

それから 2003 年に「高等教育の将来」というものが出されて、こういうものを踏まえた上で高等教育への参加率を、これはパートタイム学生を含めての話ですけれども50パーセントまで高めるというふうな国家戦略が明示されていると。

実は、今日、日本の 2 つの答申というのを言っていますけれども、いわゆる「21 世紀答申」というのは 1998 年でデアリングレポートの翌年、「将来像答申」の方は 2004 年でしたよね。2004 年で高等教育の将来、まさに将来と言う言葉を使っているところが似ているんですけども。だから、イギリスのこの答申に、まねしたわけではないと思いますけれども合致しているということがあります。

### ラーニングアウトカムズに関する各国の例

○ 米国AAC&U- 教養教育のアウトカムズ(Liberal Education Outcomes, 2005)

文化と自然に関する知識 (Knowledge of Human Culture and Natural World)

- 科学 (science)
- 社会科学 (social sciences)
- 数学 (mathematics)
- 人文学 (humanities)
- 芸術 (arts)

知的、実践的スキル (Intellectual and Practical Skills) :

- 文脈と会話によるコミュニケーション (written and oral communication)
- 探求的、批判的、創造的思考 (inquiry, critical and creative thinking)
- 数量的リテラシー (quantitative literacy)
- 情報リテラシー (information literacy)
- チームワーク (teamwork)
- 学習の統合 (integration of learning)

個人的、社会的責任 (Individual and Social Responsibility) :

- 市民としての責任とその遂行 (civic responsibility and engagement)
- 倫理的思考 (ethical reasoning)
- 異文化に関する知識と活動 (intercultural knowledge and actions)
- 生涯教育への志向 (propensity for lifelong learning)

38

それからほかにも、このラーニング・アウトカムズに関する各国の例で、アメリカ AACU, アメリカンアソシエーションオブカレッジアンドユニバーシティーズということで、日本で言えば、大学教育学会というのがありましてそれに近いといえれば近いのかもしれませんが、リベラル教育のアウトカムズの例として、文化と自然に関する知識だとか、それからずっと書いてありますね、それから知的、実践的スキル。それから個人的、社会的責任というふうな形で、いってみればそのリベラルアーツに関するところが一番上で、真ん中が割と基礎スキルに近いところですね。それから一番下がどっちかというとソフト・スキルに近いところなんだろうというふうに思いますけれども。

出張中に面白いものを見つけまして。これは、カリフォルニア州立大学ロングビーチ校というところで一昨日撮った写真です。撮りたてのほやほやです。ご存知の方には、わかりきった説明ですけれども、カリフォルニア州立大学というのはカリフォルニアの中で上位3分の1位の学生が行っていて、例のカリフォルニア大学、UCLAとかUCバークレイです。それが日本でいえば旧帝国大学に相当するとすれば、カリフォルニア州立大学というのはカリフォルニア州内に23でしたっけ、それくらいあって、言ってみれば地方国立大学に当たるというふうな、大雑把に言えばです。

ロングビーチもそれに近いと思うんですけども、そのここはFDセンターです。一番この奥の扉が、ジェネラルエデュケーションのオフィスです。このオフィスがそれぞれ個別になっていて、専門スタッフが、ファカルティではないですけども専門スタッフが個室を持っています。

これもそんなFDセンターの中でこんなふうに、いろいろ面談ができるようになっていて、見ていただきたいのはこの写真ですけれども、さっき言ったジェネラルエデュケーションのオフィスで、ここのところに紙がはってありまして、これが実は今ご紹介したAACUのラーニング・アウトカムズの一覧の紙がはってあったということで、それだけ一応普及しているんだということだけを言いたいがためなんです。

ついですすから、別の写真ですが、なんて書いてあるかというと、グラデュエーション・ビギンズ・トゥデイトって書いてあるんです。ご案内のように、卒業率が非常に低いんですから、60%とか70%とか、そんなものです。何とかしてその卒業させていくということが、その大学にとっては非常に重要な課題になっているわけです。つまり卒業はもう今日から始まっているんだと。毎日毎日努力してがんばんなさいということとここで一生懸命言っているわけです。こういう暖簾みたいなんだとか、字幕みたいなのが大学の中に他にもありました。

それからご参考になるかなと思うのは、これがポートフォリオということで、学生の言ってみれば学習記録ですね。こういう形で各個人が、中身はさすがに撮影できなかったんですけども、こういうバインダーでとじると。さまざまなレポートだとか、それからいろいろな行動記録です。これに大体2人の教員がサインすることになっています。でないとアップロードされない。アップロードされたポートフォリオを、こんなふうに束にして、そういうセクションがあってやっているということです。ポートフォリオについては後でまたお話しすることがあるかもしれません。

**ラーニングアウトカムズに関する各国の例**

○ 英国 National Skills Task Force – ジェネリックスキル (Generic Skills)

<p>基本スキル (Key Skills) :</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ コミュニケーション (communication)</li> <li>・ 数量的能力 (application of numbers)</li> <li>・ 問題解決 (problem solving)</li> <li>・ チームワーク (team working)</li> <li>・ 情報通信活用 (IT)</li> <li>・ 自己の学習と能力の向上 (improving own learning and performance)</li> </ul>
<p>基本スキル以外に雇用者が求めるスキル :</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 合理的思考力 (reasoning skills)</li> <li>・ 業務の運営管理能力 (work process management skills)</li> <li>・ 個人的価値観や態度 (personal values and attitudes)</li> </ul>

39

話を戻しまして、これは AACU です。それからこれは、イギリスの内閣府に相当するところが作ったものでして、こういうものは一応見ていただければ大体同じようなものだというふうに思います。

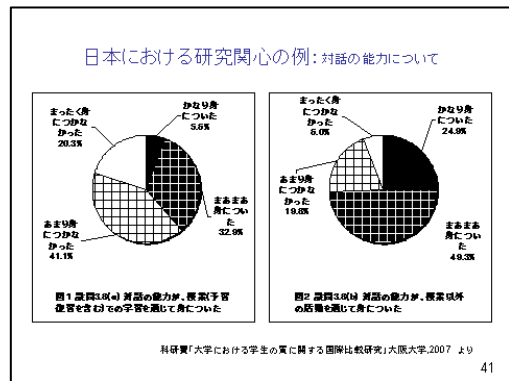
**ラーニングアウトカムズに関する各国の例**

○ 豪州 Graduate Skills Assessment – ACERテストにおける4要素

<p>現在のテスト項目 :</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 文章力 (written communication)</li> <li>・ 批判的思考力 (critical thinking)</li> <li>・ 問題解決能力 (problem solving)</li> <li>・ 相互理解力 (interpersonal understanding)</li> </ul>
<p>追加が考えられる項目 :</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 基本スキル (basic skills)</li> <li>・ 処理スキル (management skills)</li> <li>・ 情報スキル (IT skills)</li> <li>・ 調査スキル (research skills)</li> </ul>

40

それからオーストラリアですけれども、グラデュエイトスキルズ・アセスメントということで、これは共通テストです。ACER っていうのはオーストラリアン・カウンシル・フォア・エデュケーション・リサーチということで、これはどちらかというと私どもの研究所に近い組織だというふうに思うんですけども、テスト項目として文章力とか批判的思考力とか、問題解決能力とか相互理解力とか、それから追加が考えられるものとしてベーシック、処理、情報、調査というものがあると。

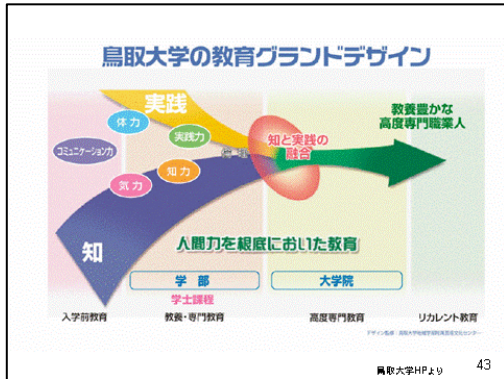


日本でも、実はこういう関心に基づいていくつかの科学研究費による研究が走ってしまっていて、これは大阪大学がやった調査ですけれども、例えば、あなたは対話の能力が一体どういうふうにして身に付いたのか、というアンケート調査です。これは、日本の旧帝大系プラスあと神戸大とかその辺の有力大学の学生を対象にしたものですが、身に付いたというのは、常識の範囲内に止まりますけれども、対話の能力が授業で身に付いたというよりも、あまり身に付かなかったという人が多いんですけども、授業以外のほうでどちらかというと対話の能力が身に付いているということで、だからこれをどう読むかというのは別の問題として出てくるわけですけれども、そういう関心の研究が既にあるということです。



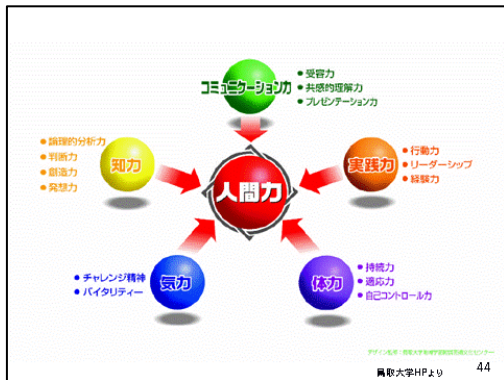
4. ラーニング・アウトカムズをめぐる内外の動向

42



43

それから内外の動向のところ、これは鳥取大学の例ですけれども、鳥取大学は、このように、人間力っていうふうに、まさに彼らのジェネリック・スキルを規定しているわけです。日本でもやっているところがあるんだと。別のヒアリングで鳥取大学に行った時に、偶然に見つけて、ノーマークだったんでびっくりしてしまったんですけれども、その時はまだ策定中だということでも未公開だということに言われてまして、それが昨年度のことでした。今年度の4月1日からオープンになったんです。

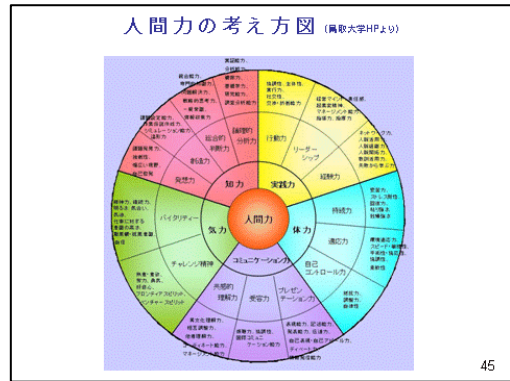


44

こんなふうに、気力・知力・体力・実践力・コミュニケーション力がその5つの要素であって、それがまさに知と実践の融合という鳥取大学の教育理念にそれが結実していきんだと。まさにそれが人間力を根底においた教育ということになります。

だから気力が知力を支え、体力が実践力を支え、コミュニケーション力がそれを、両方をつなぐということで、この5つの要素が人間力としてあって、そのさらにバリエーションとして、例えば気力であればチャレンジ精神とバイタリティーがあるということで、こういう図を作ったんです。これもホーム

ページで公開されていますけれども、これを作るのに、2年かかったというふうにおっしゃっていました。



45

それで、ラーニング・アウトカムズに近いことを、ちゃんとおっしゃっているわけですが、授業で到達する知識の目標を具体的に何ができるようになるかを記載するんだと。ここは読んでおいて下さい。時間がありませんので。

面白いのが、シラバスを記入する時に、人間力の要素の、あのダーツの的みたいになっていましたけれども2番目の円のところの、それぞれどういう能力が身に付くのかということ、2つ、3つ選んでチェックしろと。つまり私のこの授業を受けたら行動力が身に付くと思う人は行動力をチェックすると、いうふうな仕組みを整えているということでもあります。

鳥取大学 シラバス 記入要領より

4. 授業の目的と概要

【目的】

授業で到達する知識の目標を具体的に何ができるようになるか記載する。それに加えて本学の「人間力の考え図」に照らして、その授業の単位を取得した場合は、どのようなことが身に付いているか、できるようになるかをそれに該当するキーワードを使って記入する。その際に、「人間力」に関することを述べていることがわかるようにするとともに、学生自らかどのようなかか感られるような表現方法とする。それぞれの人間力要件を満たす記述をする。但し、「人間力の構成要素である「知力」については、すべての授業で身に付くものであるとして、シラバスには「知力」に関するカテゴリーのキーワード記載しないこととする。

46

シラバスを見てみると、何を勉強しますよ、何を勉強してもらいますということはきちん書いています。でもこれで学生さんが何ができるようになりますかということは何も書いてない。つまり、くどいようですが何を教えるかということが問題なのではなくて何ができるようになるかということが問題なわけです。

鳥取大学 シラバス 記入要領より

授業の目的と概要 (記入例)

「……「人間力」としては、じっくりと物理現象を考えることを通して持続力を、レポートの作成を通してプレゼンテーション力(表現力、記述能力)を身につける養うことができる。」

「人間力の考え図」に照らして、第2階層(行動力、リーダーシップ、経験力、持続力、適応力、自己コントロール力、プレゼンテーション力、受容力、共感的理解力、チャレンジ精神、バイタリティー)から、三つのキーワードを選ぶ。

47

鳥取大学 シラバス 記入要領より

### 6. 達成目標

各学部・学科の「養成人材像」を意識した形で、具体的に何が達成されるか、何が出来るようになるか、記入する。

(記入例)

「分析タブローによる論理分析ができ、それに当該推論の妥当性が判定できるようになる。」

「〇〇(養成人間像の文言)が実現するよう、流体力学に関連するあるタイプの偏微分方程式が解けるようになる。」

「〇〇となるに相応しい資質を磨くため、広い視野から市町村レベルの福祉政策について、資料を用いながらその実現可能性を論じることができるようになる。」

48



教育付加価値日本一の大学を目指す

KITは開学以来、「学生のために何をすることが求められているか、学生のために何をしなければならないか」を常に模索し、具体的な実践により学生や社会の期待に応える努力を続けてきた。これらから「教育付加価値日本一の大学」を目指して継続的な改善活動に乗り、教育の卓越性を追求していきます。

鳥取大学 入学案内2017より

51

鳥取大学 シラバス 記入要領より

### 11. 人間力の要素

「人間力の要素」の第2階層から2〜3を選択し、チェックボックスにチェックを入れる。

実践力	<input type="checkbox"/> 行動力	<input type="checkbox"/> リーダーシップ	<input type="checkbox"/> 経験力
体力	<input type="checkbox"/> 持続力	<input type="checkbox"/> 応応力	<input type="checkbox"/> 自己管理能力
コミュニケーション力	<input type="checkbox"/> 受容力	<input type="checkbox"/> アドレティジャーナル	<input type="checkbox"/> 共感的理解力
気力	<input type="checkbox"/> チームワーク精神	<input type="checkbox"/> ボイジャー	
知力	<input type="checkbox"/> 論理的分析力	<input type="checkbox"/> 総合判定力	<input type="checkbox"/> 創造力
		<input type="checkbox"/> 判断力	<input type="checkbox"/> 発想力

49

### 0001 修学基礎 I

Basic Style for Study I

- 行動履歴を記録し、自学自習の習慣を身につけることによって、自己の目的指向を高め、それに必要な学習計画(カリキュラム外も含む)を立案することができる。
- 大学内外のルールを守ることによって、大学・社会の一員としての自覚をもち、自己責任をもって行動することができる。
- 様々な演習・課題を通して、文章表現・口頭発表の重要性を理解し、他の受講科目においても活用することができる。

行動目標●1週間単位の行動履歴を作成し、本学期における反省点を見極め、次学期での対応を文章で作成することができる。学習・生活スタイルを認識した上で修学計画を立案し、履修計画書を作成することができる。講話の内容を整理し、それに対する自己の見解を文章で作成することができる。グループ討議を通して問題点を見出し、自己の見解を口頭、および文章で説明できる。提出物の締切を守る可以保证。

カリキュラムガイドブック(2025年度版)より

52

それから一番下の集合論にも、集合の基本概念に習熟すること。これは習熟することというふうに書いてくれるわけですから習熟できるようになればそれでラーニング・アウトカムズを言っているように見えますけれど、こういう手合いのものが一番多いです。つまりこれはトートロジーです。集合の基本概念に習熟することというのは集合論入門そのものですから、実は何も言っていない。

上の倫理学にしてもそうです。人間的諸現象を理解する視座を学ぶ。それって倫理学そのものじゃないかということですよ。具体的にどういことがそこでできるようになるのかということが書かれていないということが問題であるわけです。

ちょっと読んでみます。科学技術者倫理という授業です。「科学技術者として直面する可能性のある倫理的な問題の存在と種類について具体的な例を挙げながら説明できる。」

### 金沢工業大学の場合

- 工学設計教育を基幹とする人間形成
- 修学基礎: スタディ・スキル、  
スチューデント・スキル
- 技術者入門: 技術者像の形成  
= キャリア形成、専門教育への導入
- 基礎学力の保証(補償?):  
工学基礎教育センター
- KITポートフォリオシステム
- 獲得目標の明示

50

### 0012 科学技術者倫理

Science and Engineering Ethics

本科目の目的は、科学技術が人間社会、および環境に与える影響の大きさや深さについて理解し、科学技術の目的や役割、社会との関係についての考察を深めることである。また、科学技術者が専門職として担う倫理的・社会的責任を理解する。さらに実務を行う上で直面する倫理的な問題を検討し、それらを解決する問題解決能力の向上を図る。以上の学習をとおして、「科学技術者倫理」が単に規範を遵守することではなく、価値のバランスを取りながら、「自らがなすべき行動を設計する」という創造的な知的営みであることを学ぶ。

行動目標●科学技術者として直面する可能性のある倫理的な問題の存在と種類について具体例を挙げながら説明できる。倫理的な想像力、倫理的問題を認識し分析する能力、責任感を向上させる必要性などを説得力をもって他者に説明できる。学協会の倫理綱領などについて知識を持ち、そこに含まれる安全性などの「価値」群について説明できる。倫理的ジレンマを疑似体験し、そこから得たことを自分の経験や考え方と関連づけながら小論文にまとめることができる。エシカテストなどの倫理的な問題解決の方法について理解し、これらの方法を具体的な事例において適用できる。本科目の目的と、本学の教育目的、目標との関係を自己点検できる。

カリキュラムガイドブック(2025年度版)より

53

書かれているのが金沢工業大学でして、これももう飛ばしますけれども、金沢工業大学っていうのは皆さんご存知の大学です。偏差値は 48、ですから国立大学よりはずっとずっと入りやすい大学です。でも「教育付加価値日本一」ということでよく知られているところです。これはそのシラバスです。シラバスの上半分が概要で下半分が行動目標。これはラーニング・アウトカムズによって書かれています。

「倫理的な創造力、倫理的問題を認識し分析する能力、責任感を向上させる必要性などを説得力を持って他者に説明できる。学協会の倫理綱領などについて知識を持ち、特にジャビーです、はっきり申し上げて。知識を持ちそこに含まれる安全性などの価値群について説明できる。」

「倫理的ジレンマを疑似体験しそこから得たことを自分の経験や考え方を関連づけながら小論文にまとめることができる。」云々ということで、これほど具体的に書くということ。これだけできている大学はほかにおそらく日本ではないのかなと思います。

金沢工業大学についていろいろお話ししたいこともありますが写真もいっぱい用意してきたんですけど、残念ながら割愛いたします。ちょっとこの辺も同じです。問題のソフト・スキルなんですけれども、最後にもう端折らせていただきますけれども、このいろいろなソフト・スキルというのは

大学教育で育成可能なのかという問い、疑問が抜けきれないだろうというふうに思います。それはその通りだというふうに思います。

カリキュラム等、それからカリキュラムを含めた大学教育のさまざまなプログラムの問題のどこでやるのか。キャンパス内、キャンパス外。どちらなのか。それからファカルティのかかわりはどうするのか。それからインターンシップや体験型学習の効果と課題という点からどういうふうに考えていったらいいのかという問題が出てくるだろうというふうに思います。

**5. ソフトスキルの獲得は……**

62

**さらなる課題……**

**ソフト・スキルは大学教育で育成可能か？**

- ・カリキュラムとプログラム
- ・キャンパス内とキャンパス外
- ・ファカルティの関わり
- ・インターンシップや体験型学習の効果と課題

63

そこで、これはかなり私の個人的な見解なんですけれども、そのソフト・スキルの獲得にはやはりその体験的な学習というのはある種の効果を持つところがあるだろうというふうに思います。

**答申文に見るインターンシップの位置づけ**

- ① 産業界や地域社会との連携
  - ・「21世紀の大学像と今後の改革方策について  
一競争的環境の中で個性が輝く大学―」(答申)  
(平成10年10月26日 大学審議会)
- ② 多様な価値観、現実的な職業観
  - ・「グローバル化時代に求められる高等教育の  
在り方について」(答申)  
(平成12年11月22日 大学審議会)
- ③ 教養教育、自己の修養
  - ・「新しい時代における教養教育の在り方について」(答申)  
(平成14年2月21日 中央教育審議会)

64

この辺も答申文の話の分析もあるんですがそれは全部飛ばしまして、社会性を涵養するための方策として、体験的学習プログラムとかインターンシップの推進、お手元でわかりますかね。しかし、問題なのは一般的に体験学習したらいいとか、インターンシップしたらいいという話にやっぱり

ならないだろうと。文脈なき体験に果たして効果はあるのかと。答えはそんなに簡単ではないというのが私の持論であります。

キーワードはストーリー性であったりプロジェクト性であったり、あるいはそこでそのストーリーに関わってどれだけ自己発見できるかということになるんだろうというふうに思います。

**「21世紀の大学像と今後の改革方策について  
一競争的環境の中で個性が輝く大学―」(答申)  
(平成10年10月26日 大学審議会)**

・③ 地域社会や産業界との連携・交流の推進

- ・ 大学は、今後、その知的資源等をもって積極的に社会発展に資する開かれた教育機関となることが一層重要となる。
- ・ 各大学が地域社会や産業界の要請等に積極的に対応し、それらの機関との連携・交流を通じて社会貢献の機能を果たしていくため、リフレクシュ教育の実施、国立試験研究機関や民間等の研究所等との連携大学院方式の実施、共同研究の実施、受託研究や寄附講座の受入れなど産学連携の推進を図っていく必要がある。
- ・ 企業と大学が共同した教育プログラムの開発や、本校以外の教育研究の場の設定などを通じて、社会人が企業と大学を往復して学習するための環境の整備を図っていくことが必要である。その際、テレビ会議システム等により大学の授業を社会人が企業の会議室等で受講できるようにするなど、発展の新しい情報通信技術を活用して積極的に推進する必要がある。
- ・ また、インターンシップ制度の積極的な導入や、学生のボランティア活動等地域社会に貢献する活動の促進に積極的に取り組むことも重要である。

65

**「グローバル化時代に求められる高等教育の在り方について」  
(答申)  
(平成12年11月22日 大学審議会)**

・③ 教育方法、履修指導の充実

- ・ (学習指導・履修指導体制の充実)
- ・ (実体験の重視や職業観の涵養(かんよう))
- ・ 多様な文化や価値観を受容し、その中で自らの考え方を主張し、行動できる心豊かな人材を育てるためにも、知識の修得だけでなく、多様な文化に触れたり、多様な価値観を持つ人々と交流を行ったりするなどの実体験を持つことが必要である。
- ・ そのためにも、各大学において、ボランティア活動等の社会貢献活動を授業に位置付けるなどの取組を進めるとともに、国内外でのフィールドワーク等の機会を充実させる必要がある。理工系学部においては、ものづくり教育の重要性にかんがみ、実験・実習等に力点を置いた実践的な教育を充実させる必要がある。
- ・ また、学生が将来への目的意識を明確に持てるよう、職業観を涵養(かんよう)し、職業に関する知識・技能を身に付けさせ、自己の個性を理解した上で主体的に道路を選択できる能力・態度を育成する教育(キャリア教育)を、大学の教育課程全体の中に位置付けて実施していく必要がある。また、現実的な職業観を涵養(かんよう)するためのインターンシップについては、ある程度長期にわたって実施する取組が必要である。

66

**新しい時代における教養教育の在り方について(答申)  
(平成14年2月21日 中央教育審議会)**

・③ 大学における教養教育

・(1) 大学における教養教育の課題

- ・各大学においては、「大学教育には教養教育の抜本的充実が不可欠であり、質の高い教育を提供できない大学は将来的に淘汰されるを得ない」という覚悟で、教養教育の再構築に取り組む必要がある。
- ・さらに、教養教育は、大学のカリキュラムの中だけで完結するものではない。この世代の青年が、部活動やサークル活動などを通じて協調性や指導力などの資質を磨くこと、各種のメディアや情報を正しく用いて現実を理解する力を身に付けること、国内外でのボランティア活動、インターンシップなどの職業体験、更には、留学や長期旅行などを通じて、自己と社会とのかかわりについて考えを深めることも教養を培う上で重要である。ヨーロッパの多くの国では、大学に入学する前に、社会での活動を行うことが積極的に受け止められており、大学入学者の平均年齢は我が国よりも2、3歳高い。我が国においても、大学を休学して長期のボランティア活動に取り組みたり、職業体験を積んだ後に再度大学に入り直したりといった「寄り道」をすることの意義を社会全体で認識し、評価する必要がある。

67

**「社会性」を涵養するための方策**

- ・ ① 体験的学習プログラムの推進
- ・ ② インターンシップの推進

**but……**

文脈なき「体験」に効果はあるか

キーワード: ストーリー性、プロジェクト性、自己発見

68



それで、6月の終わりに、こちらのエリアキャンパスもがみに、短い間ですけれども参加させていただいたんです。目的、方法、成果の観点から考えますと、ちょっと辛口になりますけれども、目的として例えばこんなフレーズがあります。「さまざまな体験活動を通して豊かな自然や地域の人々とふれあい、どこそこの生活や知恵を学ぶことを目的とする。」これは目的を記述しているんでしょうか。やっている内容はちゃんとかかれていますけれども目的なのかどうか。学習者、学生がどういふなことを感じ、そこでどういふなことを獲得できるんだらうかっていう視点があるのでしょうか。あるいは学習プログラムとしてどれだけ体験性があるのでしょうか。つまり学生は何を得たのかという問題がそこであるんだらうというふうに思うわけですね。

1年生対象ですからそれでひょっとしたらいいのかもしれませんが。皆さんよく楽しんでました。ちょっと写真をご紹介しますと、学生たちはこんなふうにいる、地域の小学生に対してやるイベントの準備をしてきたし、その用意もしていますし、こんなふうに地元の人たちと一緒に実際の作業をして汗をかき、これは子供たちに対してゲームを提供しているわけです。子供たち本当に喜んでいました。地元の人も歓迎してくれていました。最後終わりのところで、この右のおじいちゃんは、何でこんなふうになっているかという、これ記念の稲の苗をくれたんです。これは実は泣いてて顔がこうなっちゃったわけです。その写真をわざわざ私は持ってきたんです。

それだけ非常によかったと思うんですけれども、目的は果たして学ぶことだけなのか。というのはそれよりむしろ問題というか、issue(イシュー)は何なのかというところの問いがそこではあまり見られないような気がしました。それと向き合うために一体何が足りないのか、何を身に付けなければならぬのか。それをさらに敷衍すると、何を課題としてそこで見えてきたのかというところがやはり、さらに、欲を言わせていただければ、必要なのではないのかなというふうに思いました。

報告書を見させていただいても、山形県にとっての最上っていうその地域の問題が非常によく強調され分析されてはいたんですけども、じゃあ学生はどうだったのかという話が、ちょっと影がやや薄いかなという気がしたわけでありまして。ただ、こうは申しまして、これだけのことができて、そういうことができていっている体験学習というのは非常に少ないというか、私も、あまり聞いたことがないです。

ソフト・スキルを獲得するための体験的な活動っていうのは、効き目があるようだけれども、どこもかしこも、これをやって学生が一度むけて、要するに一度むけましたというだけの大雑把な話でしかないわけです。今後、やはりこういう問題についてはもうちょっとその、言葉とロジックを使って、これが大学教育の一環なんだということの説明責任が我々には必要なんじゃないのかなというふうに思うわけですね。

そういう例があるのかなと探してみたら唯一ありました。中央大学が特色GPを取って国際インターンシッププログラムというのをやっていたわけなんですけれども、そこでは、お手元の資料にもこれはあるはずなんですけれども、必要とされる、そ

の問題に向き合う中で一体自分たちにはどういふスキルが欠けていたのか。それを身に付けるためにはどうしたらいいのか。いうふうなやっぱりその分析ですね。振り返りなどを使いながら行なわれていたということです。

中央大学総合政策学部国際インターンシッププログラムの取組み  
Learning in Action, Learning for Action を掲げて

必要とされるスキル・態度・知識の涵養

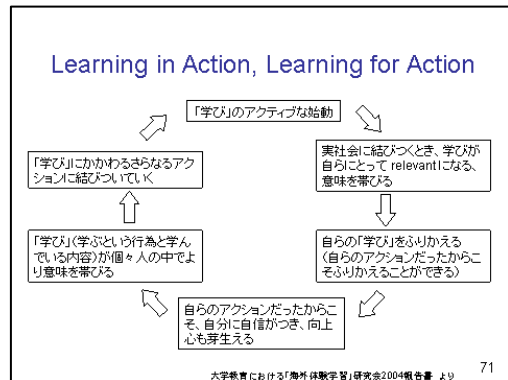
スキル	アカデミックリテラシー(読み書き)、リサーチスキル(インターネット、図書館、資料館、各種セミナー等)、コミュニケーション(プレゼンテーション含む)、社会的スキル(マナー、ネットワーキング、ビジネスレター・お礼状等作成、チームワーク等)、多角的視点
態度	コミットメント、責任感、serveすること、オープンであること、粘り強さ/安易にあきらめない、行動に結びつく(action-oriented)
知識	コーステーマに関連する知識

大学教育における「海外体験学習」研究会2004報告書 より 69

成果

- ◆ 課題の内在化によるコミットメントや engagement の発生
- ◆ 困難を越えて成長していく自分を意識することにより生まれる自信 & セルフ・エスティーム
- ◆ アカデミック・スキルの獲得
- ◆ 学びへの姿勢の変化:「暗記」から「思考・試行」へ
- ◆ つながり(教職員、学内外、友人、家族、「世界のひと」)の中で生きていくことの実感、感謝することの意識化
- ◆ 様々な実務者(特に「さらなるアクション」実施時の、学内各部署、他大学、NGO、企業、政府・国際機関など)との協働を通じた社会的スキルの習得
- ◆ 自分にもできる、何らかのインパクトをもたらせるという実感

大学教育における「海外体験学習」研究会2004報告書 より 70



～学生による経験学習プログラム評価～(中央大学)

学生によるプログラム評価実施経緯(概要)

7月5日(4時間 20人)	E E の理解、項目選出、カテゴリー分け、Vision-Mission 完成
7月12日(1.5時間 20人)	Strategies の選出、評価シート第1回ドラフト完成
8月6日(5時間 10人)	評価シートの改定
8月9日(2時間 9人)	群わけの見直し
8月10日(0時間 7人)	講師とのすり合わせ
8月11日(12時間 6人)	講師評価作成、発表準備
8月13日	デジタルで参加者に配る
8月20日	評価提出
8月28日(0時間 3人)	集計
9月2日	分析

12人/1日 合計所要時間: 44.5時間(8日)

大学教育における「海外体験学習」研究会2004報告書 より 72

～学生による経験学習プログラム評価～(中央大学)  
主な評価項目紹介と評価結果からの分析

項目	高かった評価	低かった評価
アカデミックスキル	英語の必要性についての強い認識	英語の能力への不安
社会的スキル	企画・運営能力がついた、お礼メールなどの社会的マナーが身についた	向上の余地あり
生き方・考え方の変化	自分が社会に働きかけることができるという実感	自らゼロから働きかけるに至っていない
講師	生き方、人柄などから強い影響	学生と関わる時間の余裕が不足

大学教育における「海外経験学習」研究会2004報告書より  
73

特にこの、学生による経験学習プログラム評価というところがありますけれども、学生による自己評価とその相互評価みたいなものを組み合わせる形でその評価が行なわれている。

これを全部、このレジюмеにありますようにトータルで44時間、8日間かけてやったというぐらいですからまあ相当なものなんですけれども、一番上の行にありますEEというのがエンパワーメント・エバリュエーションですね。形成的評価のことなんですけれども、ここですけれども、そういう技法を使ってやってみたというところで、どういう評価、アカデミック・スキルについてはどうだったか、社会的スキルについてはどうだったか。それから、生き方・考え方、これはまさにソフト・スキルのところですね。そういうことをやってみた例がないわけではないけれども、これはきわめて例外的によくできているというか、よくここまでいろいろ考えてみたというふうに思います。ただこの取り組みを中央大学は止めてしまいました。特色GPが終わって。もったいない話だというふうに思いますけれども。

背景としてはこのようなものがあるということ、それから内外の事例について我々はやはりそこから学ぶ必要があるということ、結局最後は自分の大学でどうするのかと。

文脈ということで申し上げますと、山形は例えば「エアアカンパスもがみ」みたいな形で、まさに山形の文脈という中でそれが行なわれているからそれなりの成果、というか高い成果を出しておられるんだろうというふうに思いますけれども、一般論としてあれをやったからこのソフト・スキルという話ではないということはやっぱり出てくるんだろうというふうに思います。

**まとめ**

1. 背景
  - 知識基盤社会
  - 国際的通用性
  - 大学のユニバーサル化
  - 大学教育の質保証
  - アカウントビリティ
2. 内外の事例
3. 自分の大学でどうするか

74

以上、大変雑駁な話で恐縮でございました。どこまで山形大学のお役に立てたのか大変心もとないところがございますけれども、以上で私の話を締めさせていただきますというふうに思います。ご清聴どうもありがとうございました。

**\*おことわり：Attention!**

- ・ 本報告の内容は、報告者自身の個人的見解に属するものであり、文部科学省もしくは国立教育政策研究所の公式見解を示すものではありません。

75

**司会** 先生どうもありがとうございました。それでは引き続きフロアからご発言をいただきたいと思います。ご発言の際には所属とお名前をおっしゃっていただきたいと思います。よろしく願いいたします。それではどうぞ。はい。

**樋口** 事務局企画部の樋口と申します。今日はありがとうございました。3点ほど質問させていただきたいのですが、最初の項目でありました、学部教育という概念が曖昧だというお話がありまして、それでそのほかの研究者の方も指摘されているのをちょっと聞いたことがあるのですが、学校種のところで大学のほかに大学院というのがなくて、あとで52条で大学とあって、また別で大学院を規定しているというそういった曖昧なところがあると思うんですけれども、行政的な質問なんですけれども、その改正の、曖昧な状況を解消するための改正の可能性はあるのかどうかということが1点目と、2点目が中教審の4月6日の資料10で先生が紹介されました、各大学は到達目標、学習成果を明確にすべきという意見に関連してなんですけれども、これもほかの研究者の方が確か、今現状では各先生方がそれぞれの単位の認定権を持っているのですけれども、これを複数の大学、もしくは大学団体等で共通の試験を作ったところで単位を認定した、本当の共通の試験を作ったかどうかという意見があるんですけれども、これについて先生はどう思われるかが2つ目です。

それと3つ目が、スライドの3ページで現在は高等教育の計画から誘導というふうな流れにあるということなんですけれども、現在、教育基本法、新教育基本法を受けて教育振興基本計画というものを策定しているかと思うんですけれども、これまた検討中の中身だと思うんですが、この中で高等教育の計画の中身はどのような状況になっているかというの、もし先生お分かりであれば教えていただきたいというのが3点目です。

4点目が、質の保証ということなんですけれども、ヨーロッパではその各大学で学士の共通化をはかっているというふうにとちょっと聞いたことがあるんですけれども、アメリカはアメリカでその各地区ごとに、質の保証をやっていると思うん

ですが、日本ではそのような動きがあるのかどうかということをお話していただければと思います。



**川島** 1点目の、学部規定とか、学部規定というよりも大学規定ですね。学校教育法上のそのさまざまな学校教育だけじゃないですけども、設置基準も含めていろいろ曖昧な規定についてそれを整理する、整理する可能性があるのかというお話でしたけれども、私は聞いたことがありません。具体的にはないというふうに思います。

それはなぜかという、これは、ある文部官僚の方がおっしゃっていたことですけども、その方は本も書いていてもすごい学究的な人ですけども、やっぱりその大学が発生以来抱えてきた歴史的な団体性っていいですか、ギルドから発生した、この団体性というものを、団体性と今の法体系というものをいろいろすり合わせる中で今のような、ぐちゃぐちゃといますか、こういう形ができてしまったわけで、それを簡単に整理するというを自分たちの代で簡単にやってしまっているのかということ、ちょっとためらってしまうようなことをポロッとおっしゃったことがありますけれども、やっぱりその辺のしがらみみたいなものがやっぱりありますので、初等中等教育のようにスパッと、というふうにはいかないだろうというふうに思うのが私の理解です。

それから2点目の共通試験の話で2つの、複数の団体以上という話がありましたけれども、複数の団体というのは、卒業テストというのは、案としては出ていますし、理科系の、医学とかそういうところでもそういうアイディアはあることはあるだろうというふうに思うんです。

ただそれよりも先に、各大学の中で、鳥取大学のところにもありましたけれども、大学の目標っていうのがあって、大学自体のラーニング・アウトカムズってありますよね。大学が、どういう学生群を作り上げるのかと。それからプログラムなりそのディパートメントっていうのがそのどういう学生群を作り上げるのかっていうことがその大学のミッションに基づいてあるわけでしょうし、そのプログラムのミッションを達成するために各先生方の授業というのがあるという、階層構造になっているはずであるわけですから、各個人が成績判定権を持つということが、最終的にはそうなんだろうけれども判定権というのはあくまでもその各大学なりプログラムの教育目標という、これは教育目標というものに規定されていくというふうに考えるのが自然だろうというふうに思うわけです。そちらの方の、いってみればそのすり合わせみたいなのところの方もやっぱり大事なんじゃないのかなというふうに思います。

それから教育振興基本計画、ずいぶん専門的な質問が

ありましたけれども、いつも必ず、中教審の会合の中では出る話です。高等教育のことではこんなことをやっていますというがありましたですけども、今資料を持っていないということ、具体的に覚えていないということでお答えする具体的な材料がありません。ただ、お役人たちの関心はいつも、そこです。要するに予算をどれだけ取ってきたかという話ですから、この中に教育振興基本計画みたいなもの、アクションプランが出るっていうのは彼らにとっては非常に大きなメリットであるということです。

それから4点目は、おっしゃっていただいたように、ヨーロッパではボローニャ・プロセスというふうに言われて、特に学位の共通性です。ドイツはかつてバチェラーじゃなくてマギステルとディプロームという二つの学位、ドイツ人に言わせるとアングロサクソンのマスターに相当するんだというふうに言ってきたわけなんです。イギリスの方も学位がありますけれども、その学士というのはたった3年しかない、というふうなところでいろいろ合わない問題が出てきていて、それを共通化するということで、聞くところによると大体もうほぼアングロサクソンの傾向にあわせるという形で出てきているということです。

それからアメリカはアメリカで、今日のラーニング・アウトカムズの話がいろいろ出ましたけれども、ラーニング・アウトカムズが一番の圧力要因になっているのはアクレディテーションの問題です。アクレディテーション団体が6つでしたっけ、7つでしたっけ、アメリカにはありますけれども、そのアクレディテーション団体が具体的なそのラーニング・アウトカムズの指標というものをいれるという形で、アクレディテーション団体の連盟団体、チェアっていうのがあるんですけども、そのレポートの中にそれが書かれています。

実は日本でも、大学評価基準には、教育成果のことを書きなさいということが書かれていますし、それから、ジャビーなんかはもっとはっきり書かれています。ジャビーの項目なんかを見ていると、ソフト・スキルにあたるようなものが書かれていると。ご案内した金沢工大の例なんかは、明らかにジャビーを意識しているというふうにご理解いただければよろしいかと思います。

お答えとしては日本でもそういう動きがそれなりに出てきているということだというふうに思います。よろしいでしょうか。

**司会** ありがとうございます。それではほかにはいかがでしょうか。教員の方から何か。はい、どうぞ。

**柳田** 文科省サイドであつたり大学サイドからのお話が大部分出てきたわけなんですけれども、例えば社会的なニーズ、会社側が求めている人材、時間があつたらお話していただけるっていうスライドがたぶんそれに相当するものではないかと思うんですけども、それとその文科省サイドの教育方針というのがどの程度合致しているかとか、そういうことをちょっとお話していただければと思います。

例えばジャビーなんかは我々、私は情報科学科にいますけれども、ジャビープログラム認定プログラムなんで



すけれども、就職活動に行くとジャビーってというのは何だっというのを会社の方から聞かれるのが多いというふうに伺っております。我々はある程度の質を保証しようとしてジャビープログラムを受けているわけなんですけれども、それが社会的にはあまり認知されていないという現状がありますので、その辺の社会、会社側からの要求がある人物像と先ほどの文科省サイドでこういうのがいいんじゃないかという話とどれぐらい一致しているかというか合致しているかというのを教えていただければと思います。



**川島** そのあたりの問題はまさにこれからだというふうに思います。そういうふうに社会側からのニーズとしての能力像・人材像というものと、それから大学、大学側の人材像というのは、その鳥取大学だとかあとは広島大学だとか山口大学とか新潟大学とかありますけれども、そういうのが出始めているわけです。だからある程度出揃っていただかないとすり合わせしようがないというふうなところが実際あるんだろうというふうに思うわけです。

ただ、さっき経産省の肩をもつようなことを言いましたけれども、やっぱり考え、筋道としてちゃんと手順を踏んでいるなって思うのは、社会人基礎力のところで経産省が社会人基礎力だけを身につけてもらったらいいという話しではないんですよということをちゃんと言っているわけなんです。

社会人基礎力というその一種の理念型と、実際の大学のプログラムというものをあわせていただく中で、若者の人材養成というものが可能となるし、それからおっしゃっていただいたようなミスマッチみたいなものの解消も出てくるんだというところで、実験さえも一つの大学だけでやっているだけということですので、これからですというふうな答えしかないんですけれども、すいません。

**司会** ありがとうございます。ほかにいかがでしょうか。私のほうから一つだけ。山形大学でも数年前からシラバスを記述する時に学生の到達目標というんでしょうか、これをやればこれだけできるようになる、そういったようなことを書きなさいというふうに指導されて、一応努力はしているんですけども、それは前から言われていたわけですが、それが今ラーニング・アウトカムズということで特に非常に強調されている。やはり何かこう改革そのものの段階が変わったというんでしょうか、新しい段階に入ってきている。社会全体がそれを要求するようになったとそういうふうに考えていいのでしょうか。

**川島** おっしゃるとおりで、繰り返しになりますけれどもやっ

ぱり大学教育の説明責任だとか、具体的に、どう言えいいんでしょう、冒頭に申し上げましたように、学士課程の結果は何なんですかっていう、それをわかりやすく言ってくださいと。

やっぱり学生の要求も非常に強くなってきました。大学4年間高い学費を払って行って、一体私をどうしてくれるのよっていうことだろうと思うんですけれども、やっぱりそういうステージに入ってきているということ。

それから今日何度か申し上げましたようにその国際的にも経済的にもやっぱりそういう圧力は強まってきているというところですよ。



**司会** 川島先生、長い時間どうもありがとうございました。では、川島先生のために今一度盛大な拍手をお願いいたします。

それではこれで午前の部を閉会させていただきまして、1時からラウンドテーブルになりますので、各ラウンドテーブルでよろしく願いいたします。どうも午前中ありがとうございました。

## 第2部 ラウンドテーブル

### 【ラウンドテーブル1：FDの義務化と個別支援FD】

コーディネーター：杉原 真晃 講師(高等教育研究企画センター)  
パネリスト：元木 幸一 氏(高等教育研究企画センター)  
大島 武 氏(東京工芸大学)



### 【ラウンドテーブル2：外国語教育センターの設置と外国語教育の充実】

コーディネーター：佐々木 正彦 教授(外国語教育センター)  
パネリスト：阿部 宏慈 氏(外国語教育センター)  
池田 光則 氏(外国語教育センター)



### 【ラウンドテーブル3：授業支援システム(LMS)の教育効果】

コーディネーター：中村 三春 教授(高等教育研究企画センター)  
パネリスト：金井 雅之 氏(地域教育文化学部)  
江本 理恵 氏(岩手大学)  
伊藤 壮志 氏(東北芸術工科大学)



## ラウンドテーブル1:FDの義務化と個別支援FD

### 記録

### 山形大学教員研修会 第9回教養教育ワークショップ ラウンドテーブル1：FDの義務化と個別支援FD

日 時：平成19年8月9日（木）13：00～15：00

会 場：山形大学教養教育1号館113講義室

コーディネーター：杉原 真晃 氏（高等教育研究企画センター）

パネリスト：元木 幸一 氏（高等教育研究企画センター・人文学部）

大島 武 氏（東京工芸大学・山形大学高等教育研究企画センター）

参加者数： 14名

記 録：小田 隆治

### 記 録

#### 話題提供

#### 1. FDの義務化と個別支援型FDについて（杉原真晃）（資料参照）

趣旨説明：「21世紀型教養教育」を可能にする「教育力」の向上を目指すFDについての情報交換および議論を行う。具体的には、現在、山形大学の教養教育で進めているFDについての報告と、授業改善の事例報告を行う。

- ・ 教育方法に重点をおいたラウンド・テーブル。
- ・ FDとは個人的な取組ではなく、組織的な取組である。
- ・ 総合大学としての教育環境，人的資源をトータルに活用し，幅広い教養教育の展開を図る。
- ・ 学士課程教育におけるFDの義務化
- ・ 大学設置基準等改正要綱
- ・ 日本のFDの動向
- ・ 山形大学のFD（相互研鑽型FD，地域ネットワークFD“樹氷”）
- ・ 新たなFD：個別支援型FDの試行（問診票，ミニ公開授業と検討会，ミニ授業改善アンケート，受講生とのFD懇談会）
- ・ 個別支援型FDの成果（授業改善アンケート結果の向上等）
- ・ 遠隔FD

#### 2. 遠隔FDを主とした個別支援型FDの実践について（大島武）

- ・ 個別支援型FDと遠隔FD
- ・ 授業改善クリニック・コメントシート
- ・ 先進的なFDの取組：「そこまでやるか山形大学」
- ・ 個別の先生の利益，個別事例に落とし込む
- ・ 授業の下手な先生をどうするか？
- ・ この取組はまだ練れていない部分があるのでこれから改善していく必要があるだろう。



3. 個別支援型FDの体験から（元木幸一）（資料参照）

- ・ 授業者から見た個別支援型FDの成果と効果
- ・ 「クリニックシート」の文字情報が一番心に突き刺さる。
- ・ 具体的改善点（資料参照）
- ・ 毎回検討会，クリニックシートで反省することの難点
- ・ 効果（自分の授業の個性を確認することができた）
- ・ （大島談）授業のテクニックと内容は不可分ではないのか？ 方法だけを切り離すのは難しい。
- ・ （元木談）今回は内容にまで立ち入って改善がなされた。

質問1 学生の学習成果はどうか？

答 実感としてある。

質問2 個々の授業で学習成果を問えるのか？

質問3 次回も毎回ミニ公開授業を行うのか？

答 授業者もスタッフも大変なので行う予定はない。もっと効率よく進める。

質問4 ミニ授業改善アンケートを進めた方が授業改善に有効なのではないか？

答 組織的に行って共有化していかなければならない。

4. 授業改善事例紹介（大島武）（資料参照）

1. プレゼンターの気持ちで

- ・ 10を教えて6しか分からない授業より，8教えて8分かる授業の方がいいだろう。
- ・ 授業のタイムマネジメントが重要（教師が遅れていくと，学生がどんだらけていく）

2. 授業の組み立て

- ・ 「つかみ」が大切
- ・ 先の見えない話は長く感じる。

3. 表現技術の工夫

- ・ 「たとえば」や「ところで」等のつなぎ言葉の上手な活用
- ・ 専門用語や新しい言葉を使う時は気をつける。

ラウンドテーブル1：FDの義務化と個別支援FD  
杉原 真晃（高等教育研究企画センター）

配付資料

教養教育ワークショップ ラウンドテーブル1  
**FDの義務化と個別支援FD**

杉原 真晃  
山形大学高等教育研究企画センター

平成19年度 教養教育ワークショップ 2007/8/9

1

**「21世紀型教養教育」とFD**

21世紀型教養教育とは何か？

→「どのように『教育』するのか」(教育方法)  
(に重点を置いた取組)

→山形大学教養教育のFD

2

**FDとは**

定義

教員が授業内容、方法を改善し、向上させるための組織的な取組みの総称。その意味するところは極めて広範にわたるが、具体的な例としては、教員相互の授業参観の実施、授業方法についての研究会の開催、新任教員のための研修会の開催などを挙げることができる。

(大学審議会答申(1998年)  
「21世紀の大学像と今後の改革方策について」)

↓

× 個人的な授業改善の取組  
○ 個人あるいは機関の教育力を向上させる**組織的な**取組

3

**「21世紀型教養教育」とFD**

◆山形大学が模索する「21世紀型教養教育」の概観

- (1) 総合大学としての教育環境、人的資源をトータルに活用し、幅広い教養教育の展開を図る
- (2) 21世紀の諸課題に対応するため、**新しい視点からの研究成果を活かした授業科目**を開設する
- (3) **学生主体の問題解決型の授業**を増やす
- (4) 社会性・国際性をもたせるために**体験型授業**・研修の積極的導入を図る
- (5) **高校生の志向や社会のニーズ**に機動的に応えることのできる教育体制を確立する
- (6) 分散キャンパス間のネットワーク化を進め、**新しいカリキュラムの創設、教育資源・コンテンツの共有化**を図る

4

**学士課程教育におけるFDの義務化**

中央教育審議会答申(平成19年7月9日)  
「大学設置基準等の改正～人材育成目的の公表、成績評価基準やFD等の規定整備～」

学部等における教育力の向上のための必要な措置を講じるとともに、その教育の質を保證する上で備えるべき基準をより明確にするもの

平成20年4月1日に施行予定

5

**大学設置基準等改正要綱**

教育研究上の目的の公表等	成績評価基準等の明示等
一の授業科目について二以上の方法により行う場合の単位の計算基準	二以上の校地において教育研究を行う場合の専任教員並びに施設及び設備
科目等履修生等を受け入れる場合の専任教員の増加等	目的を達成するために必要な授業科目の開設
教育内容等の改善のための組織的な研修等	施設の専用及び他の学校等との共用

6

### 教育内容等の改善のための組織的な研修等

大学は、当該大学の授業の内容及び方法の改善を図るための組織的な研修及び研究を実施するものとする。

7

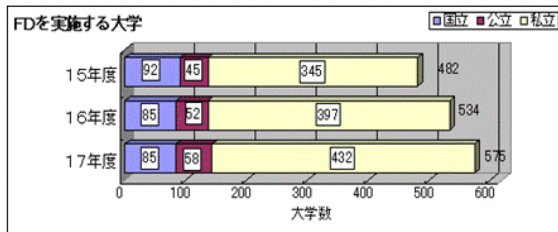
### 成績評価基準等の明示等

大学は、学生に対して、授業の方法及び内容並びに一年間の授業の計画をあらかじめ明示することとする。また、学修の成果に係る評価及び卒業の認定に当たっては、客観性及び厳格性を確保するため、学生に対してその基準をあらかじめ明示するとともに、これにしたがって適切に行うものとする。

8

### FDの実施状況

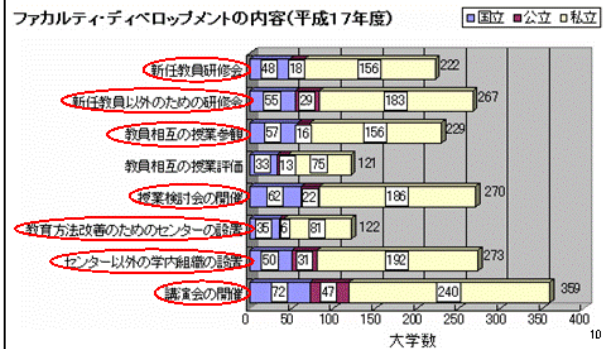
全体で575大学(約81%)



9

### FDの実施内容

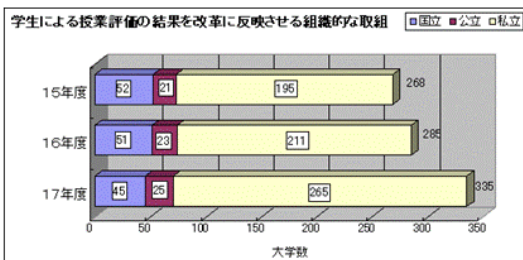
ファカルティ・ディベロップメントの内容(平成17年度)



10

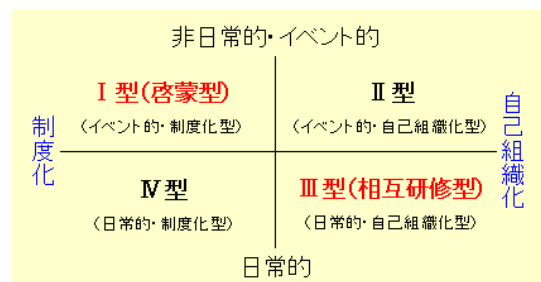
### 学生による授業評価の結果を改革に反映するための組織的取り組み

国立45大学(約52%)、公立25大学(34%)、私立265大学(約48%)、国公立全体で335大学(約47%)。



11

### FDの類型



(田中每実「FDの義務化とFD地域拠点の形成」山形大学高等教育研究年報, 2007年.)

12



### FDに必要な要素とは

・それぞれの類型に序列があるわけではない。

Point → FDの効果 → 大学間連携FD

13

### これまで行ってきた相互研鑽型FD

14

### 地域ネットワークFD “樹氷”

15

### 新たなFD:個別支援型FDの展開

16

### 個別支援型FDプログラム

- 1) 授業診断  
問診票記入, 面談, 授業参観, 「学生による授業改善アンケート」のデータの活用
- 2) 「個別授業改善プログラム」の策定  
A~Fの方法を組み合わせて策定  
A. 科目設計の見直し  
B. 「ミニ公開授業と検討会」の実施(授業の撮影とその分析を含む)  
C. 「ミニ授業改善アンケート」の実施  
D. 個別に作成した「ティーチング・チップス」の提示と参考図書を紹介  
E. ベスト・ティーチャー級の授業の参観  
F. 受講生とのFD懇談会
- 3) 「個別授業改善プログラム」の実施  
2)で策定したプログラムの実施
- 4) 評価点検  
「学生による授業改善アンケート」の実施
- 5) 見直し  
プロジェクトチームと授業者によるカンファレンス

17

### 問診票 (授業改善チェックシート)

- ◆これまでの教育歴、学問領域、授業で改善したい課題などを書き込んでもらう。
- ◆授業担当者の事情・ニーズに合わせた支援。

授業改善チェックシート

18

### 個別支援型FDプログラム（場面1）



ミニ公開授業と検討会(検討会の一場面)

19

### 遠隔FD

- ◆公開授業と検討会を撮影したビデオを遠隔地にいるプロジェクトチームスタッフに送付。
- ◆ビデオを通じた授業検討。
- ◆コメントシートによる検討会参加。

コメントシート

20

### 個別支援型FDプログラム（場面2）



ミニ授業改善アンケートの実施

21

### ミニ授業改善アンケート

- ◆授業担当者が知りたい内容に関する情報収集
- ◆授業担当者が知りたい時期、頻度
- ◆細やかな分析とフィードバック

ミニ授業改善アンケート

22

### 個別支援型FDプログラム（場面3）



受講生とのFD懇談会の実施

23

『読売新聞』平成十九年七月十日



24

## 個別支援型FDの実践の成果

### ◆授業担当者にとっての成果

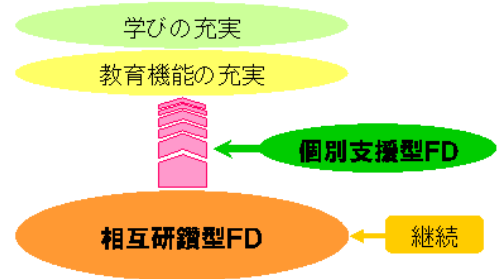
- ・授業改善アンケート結果の向上
- ・学生からのよい反応
- ・授業担当者の知りたい情報の収集→授業改善

### ◆スタッフ側にとっての成果

- ・チームとしての支援の有効性の実感
- ・遠隔FDの特徴の把握
- ・細やかなミニ授業改善アンケートの分析

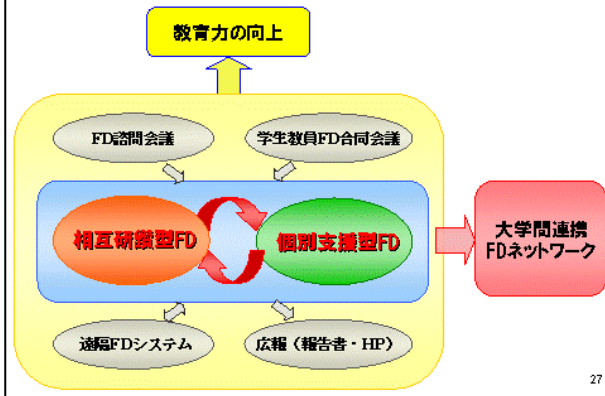
25

## 授業改善により有効なFD



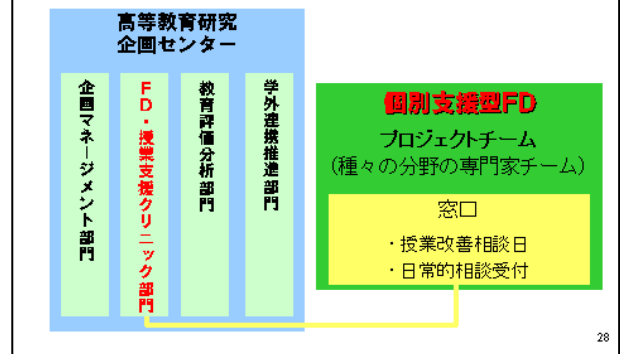
26

## 実践的FDシステム



27

## 今後の予定



28



ラウンドテーブル1：FDの義務化と個別支援FD  
元木 幸一（人文学部）

配付資料

## 「聖母・魔女・お姫様（芸術）」における授業クリニック

### の成果：授業者から見た

人文学部 元木幸一

#### （具体的改善点）

：授業後の検討会や大島先生の診断票で指摘されたことは、以下の数倍にのぼるが、その中から、自分で可能なものを取捨選択しながら実行に移した。結果が以下である。

：毎回今日はこの点を改善しようと考えながら、授業をした。いってみれば「一日一改善」を目標にした。この程度が適切かもしれない。改善点が多すぎると、授業内容が混乱する可能性が高いことを実感した。

1. 授業の構造化への配慮＝授業の開始時、終了時に全体の構成を提示。
2. 配布資料の余白＝右辺を6センチに。（この資料の形式）
3. 配布資料置き場所の変更＝前から後ろに。
4. 講義中の休憩＝3～5分。
5. 講義中の1分間話し合い＝話し合った後で、内容を聞いて回る。
6. ビデオの使用＝第13回目講義に映画『ジャンヌ・ダルク』、第14回目にロッシーニ作オペラ『シンデレラ』を上映。
7. ハリー・ポッターを授業に組み入れる＝魔女の回（第13回講義）の最後に魔術ファンタジーとして現代における魔術人気を論じた。

#### （毎回検討会、クリニックシートで反省することの難点）

1. 授業後毎回1時間から1時間半の時間を取ることで、当日の他の授業の準備がおろそかになった。
2. 回数を重ねるごとに、授業中に指摘された改善箇所が気になり、あまり講義自体に入り込めなくなることがあった。12, 13回目の講義は、「醒めた講義」になった。

#### （効果）

1. 毎回見学者がいるため手抜き講義ができないので、授業内容を深化、洗練させ、不必要な部分を除外することで精選した。＝授業内容の充実  
：やはり同僚の目と耳はかなりのプレッシャーになり、恥ずかしい授業はできないという気になる。そこで、普段以上に準備をした。おかげで、昨年度始めた授業を、かなり洗練させることができた。
2. 講義自体は、本来个性的であるはずで、検討会のあり方は、その個性を引き出す方向で行われた。→自分の授業の個性を確認することができた。

ラウンドテーブル1：FDの義務化と個別支援FD  
大島 武（東京工芸大学・  
高等教育研究企画センター）

配付資料

## 私の授業改善実践例

山形大学客員准教授  
東京工芸大学准教授  
大島 武

### 1. プレゼンターの気持ちで

- ・聞き手が神様
- ・目的と場面を重視
- ・タイムマネジメント

### 2. 授業の組み立て

- ・導入ー本論ー結び
- ・「つかみ」が大切
- ・授業のネタバラシ
- ・話しの構造化
- ・抽象論と具体論
- ・すっきりした終わり方

### 3. 表現技術の工夫

(言語表現)

- ・例示の多用
- ・つなぎ言葉の上手な活用
- ・用語の選択／紹介のしかた

(非言語表現)

- ・話すはやさと声の大きさ
- ・表情
- ・アイコンタクト
- ・話し手と聞き手との距離

#### 4. ビジュアルの工夫

- ・「見せる」－提示資料
- ・「配る」－配付資料
- ・「写させる」－板書

#### 5. 双方向性の確保

- ・発問のメリット／デメリット
- ・授業内ミニテスト
- ・フィードバック
- ・グループワーク

#### 6. まとめ ー望ましい教師のパフォーマンスー

- ・好意の返報性
- ・ポリシーの継続

以上



## ラウンドテーブル2:外国語教育センターの設置と外国語教育の充実 記録

### 山形大学教員研修会 第9回教養教育ワークショップ ラウンドテーブル2：外国語教育センターの設置と外国語教育の充実

日 時：平成19年8月9日（木）13：00～15：00

会 場：山形大学教養教育1号館113講義室

コーディネーター：佐々木正彦 氏（外国語教育センター・地域教育文化学部）

パネリスト：阿部 宏慈 氏（外国語教育センター・人文学部）

池田 光則 氏（外国語教育センター・人文学部）

参加者数：15名

記 録：浅野 明

#### 記 録

はじめに、コーディネーター及びパネリストから、配付資料にそって報告が行われた。これらの報告について、以下でその概要を示す。詳細については、それぞれの配付資料を参照されたい。

#### 報告1. 佐々木正彦「外国語教育センターの概要及び英語教育（現状・課題・今後の取組）」

##### 1. 外国語教育センター（以下、センター）の設置目的

山形大学における英語及び初修外国語教育の充実を図るために設置された。

##### 2. センターの組織

##### 3. センターの現状と課題及び今後の取組

- (1) 現状はバーチャル・センターであり、脱バーチャル化が課題となる。独自の予算も獲得したい。
- (2) CALLシステムの利用は、現状では教室内での利用に限られている。9月からは学内の端末から利用できるようになるが、さらに学外からでも利用できるようにしていきたい。
- (3) 外国語教育のための教室が不足している。これを解消するために、外国語開講枠についても再検討する必要がある。
- (4) 増大する事務量に対処するためにも、専任教員の採用を促進したい。
- (5) 学生の間でセンターの認知度がまだ低い。学生が活用できるセンターに脱皮したい。
- (6) センター内、部門内での情報の共有化、FDの充実。

##### 4. 教養教育英語の新たな取り組み

##### (1) 習熟度別クラス分け

##### (2) 少人数クラス編成

従来は、会話・リスニング・ライティング中心の英語（C）及び講読中心の英語（R）とも50人超だったが、今回、（C）で35人未満、（R）で40人を上限の目処とした。また、従来の選択制をやめて、指定クラスとした。

##### (3) 英語のセンター特別非常勤講師

平成19年度は3名。週12コマ（オフィスアワー2コマを含む）。授業のみでなく、英語学習についての相談に応じ、アドバイスも行う。

#### (4) 外部試験の実施

英語を受講するすべての1年生に、TOEIC-I Pを受験させた(7月。次回は1月)。スコアを20点に換算して成績の評価に反映させている。また、学生の負担を軽減するため、大学と校友会からの援助を受けた。その結果、学生の受験料負担は、本来1回3000円となるべきところ、1400円におさえることができた。にもかかわらず、大学のこの努力が学生にほとんど知られていないのは、まことに遺憾である。なお、再履修生についてはTOEIC-I Pは課さず、クラス選択制を維持するとともに、よりきめ細かな指導を行っている。

#### 5. TOEIC-I Pに関するアンケートから

- ・1743名が受験し、未受験者は25名のみであった。
- ・推薦入学者が受験者の約20%を占めており、これらの学生に対する配慮が必要かもしれない。
- ・1日あたりの平均学習時間を見ると、「まったくしない」と「30分未満」が65%以上を占めている。
- ・「CALL LABを知っているが使っていない」という学生が多数を占めている
- ・しかし、CALL LABについて、「効果あり」と「大いに効果あり」とする学生が、それぞれ45%、7%となっており、期待感はあるといえる。
- ・習熟度別クラス分けについての評価は、学生の間でも定まっていない。
- ・クラスサイズについて、70%が「ちょうど良い」と答えているが、学生が従来のサイズを知らないことを考慮すると、これについても引き続き検討していく必要がある。

#### 6. 英語教育の今後の取り組み

- ・学生がもっとオフィスアワーを利用するような仕掛けが必要
- ・ライティングの活動の確保
- ・さらなる少人数化
- ・外部テストに対する評価
- ・教科書のあり方について検討する必要性
- ・留学生向けのプログラム
- ・2年生—4年生への対応(方策)

いずれにせよ、新しい試みは始まったばかりであり、その評価にあたっては今後の成果をみていく必要がある。すべてはこれからである。

### 報告2. 阿部宏慈「外国語教育センターとこれからの初修外国語教育」

#### 1. 山大における初修外国語教育の現状

- ・開講数：1年次週2コマ
- ・履修者総数：のべ2738名
- ・現状：多くの学生が初修外国語を受講している。学生にとって、英語以外の言語を学ぶということは、やはり魅力的であることがわかる。
- ・+αの可能性：発展コースの設置 履修者1名。この原因としては、広報不足(情報がまったくない学部もあった)、専門科目との時間割りの重複、卒業単位に含まれないことが多いという単位の扱い、予算不足、実績不足などが考えられる。

英語偏重/実用偏重に抗しつつ、「使える」外国語をめざす。たとえば、各国語検定などへの対応。

#### 2. 初修外国語教育と外国語教育センター

- ・初修外国語の位置づけについて
- ・初修外国語のメニューが多いという意見もあったが、やはりメニューの多彩さが大切である。その点で、韓国語については一定の成果が上がっている。
- ・発展コースの充実について

### 3. 今後の課題

私的なアイデアであるが、外国語教育センターを、言語と文化を学ぶ生きた情報のセンターとした。たとえば、センター専用の教室を整備して高校生や市民にも開放するとともに、自習用の教材・機材、文化紹介の視聴覚教材等を備えるなどして、国際交流活動とのタイアップもはかりたい。

## 報告3. 池田光則「京都大学高等教育研究開発推進センター第76回公開研究会 報告」

資料に基づき、標記の研究会（2007年6月23日開催）における水光雅則教授の報告の紹介をとおして、外国語教育の充実に向けた話題提供が行われた。池田氏の報告は次の3点について行われた。詳細については、配付資料を参照されたい。

1. 時空間の制約からの解放
2. 英語教育を担当する人材について
3. 合意形成、意思決定の仕組み

3本の報告のあと、質疑応答が行われた。質問の多くは、京都大学の実践例と山形大学の試みを比較し、山形の試みをどのように発展させていくべきかという観点から行われた。詳細は以下のとおり。なお、以下ではコーディネーターとパネリスト及びセンター長の発言についてのみ氏名を記した（文中敬称略）。

### 質疑応答

—— 京大でCD-ROMを配っている対象は？

池田 2年生である。

—— 東大の英語Iと同じ発想だろう。このような動向に半数の教員がそっぽを向いているというのはいかにも京大らしいという感じがするが、その京大でこのようなことを行っているということは重要だと思われる。

—— 教員の負担は軽減されたのか。

池田 負担の軽減というよりも、クラスの規模が小さくなったということだろう。30名ぐらいのクラスもある。ノルマ4コマのうち、1つがCALLで、1人で200名を担当する。CALLの導入により、対面式クラスの負担が軽くなったということだろう。

—— 学生は単位が取れるのか。

池田 ずっと単位を落とし続けている学生もいるらしい。このクラスを選択すれば、必修となる。

—— 試験はどうなっているのか。

池田 やり方についてはよくわからない。

—— CALLで数回授業をやったら、そこで試験を行うということではないか。

—— 学生の反応はどうか。

池田 学習時間に比例した成績になっているようだ。

—— 資料の3ページに書かれている「アカデミック」とは何を意味するのか。

池田 特定の学問分野に偏ったものではないと思う。学術研究という意味だろう。このクラスでは、TOEICのことを考えてはいないようだ。



- CD-ROMの値段はどのくらいか。
- 1枚2800円程度で、2種類のシリーズがある。
- (山形大学の) 医学部では医学英語のCD-ROMを使っている。しかし、とにかく使いさえすれば、学習したことになるという問題がある。
- そのとおりで、問題はある。時間だけ費やすことで済ますことはできる。
- しかし、試験との相関関係があるということだから、まじめにやっているのだろう。今日の話題であるラーニング・アウトカムズとの関連ではどうか。

池田 報告は教員の立場からのものであるから、学生の立場からの評価は不明である。しかし、できない学生は時間をかけねばならないから、まじめに取り組んでいかなければならない。

柴田洋雄(センター長) 自立学習型CALLの導入は、対面クラスとの関連で教員の負担を少なくするためだろう。しかし、山大的ような分散キャンパスのところでは、上級学年の英語教育に対しても有効ではないか。問題点も含めて検討にあたいすると思う。

- 語学の授業で、対面式と機械を使う方法の二つがあり、教員の負担を減らすために後者をとっているというだけのことだろう。どちらがいいかといえば、対面式のほうがいいに決まっている。また、山大的これまでの英語教育は1年次対象だった。2年次以上への英語教育についていえば、必要ではあるが、いまのマンパワーではそこまではやれない。もし必要であるというのなら、大学として方策を考える必要がある。現状ではできない。

柴田 どうしたらできるのかという方向性が見えたら、方策はある。方向性を示してほしい。

- 資料の3ページにある英語教育についての合意形成・意思形成は、京大ではどうなっているのか。

池田 それについては不明である。

阿部 京大の場合には明確な目標の設定があるが、山大的場合、これでは無理だと思う。具体的な成果が必要だろう。

- (山形大学の) 人文学部長が以下のことをPRしてほしいということなので、そのままお伝えする。「人文学部では、他学部在先駆けて2年生以上の学年向けに実践英語を開講している。アルクから出前講師を呼んで、英語教員のFDを実施した」。以上が学部長からの依頼によるPRである。このときの講師の話は大変に興味深かった。かれによれば、「自分はTOEICを教える。英語を教えるのではない。各自が持っているポテンシャルで、最高の点をとらせるのが目的であり、そのために得点アップしやすいところを集中的にやる。時間がかかるところはやらない。英語力アップには時間がかかる。時間もかかるし、学生の受けもよくないが、英語の力をアップする授業は必要である。(得点のアップと英語力アップの) どちらの教育も必要だが、大学の教育は時間がかかるものをやるべきではないか」とのことだった。

佐々木 TOEICは、どのくらい力がついたのかをみるものであろう。手段が目的化してはいけないと思う。人文学部では、TOEICの点を上げるための授業をおこなっているということだが、それはそれでいいと思う。

- 1年生から4年生まで一貫したプログラムとしてレベルを維持し、さらにそれをアップするにはどうしたらいいのか。この課題に、センターはどう対応してくれるのか。

佐々木 それはこれからの課題である。授業の内容についていえば、機械に頼りすぎないことが大切だ。

- 大学全体のコンセプトはあるのか。

柴田 センターは、いままでの流れのなかにある。新しい教育方法の導入と関連した目標は、これから作っていくことになる。

- 全学的に話し合われたことはないのか。

佐々木 2年から4年まで進んでいくときに、4技能（読む、聞く、話す、書く）をバランスよくアップさせていくことが大切であるが、そのための具体的な戦略はまだみえていない。

—— 今年度から、シラバスはかなり具体的に書かれている。人文学部についていえば、スキルとしての英語力アップに舵を切ったといえる。教養教育にあつては、学術的なテーマとは関係なく、基本文法、基本の聞き取りなどをやっている。ビジネスとアカデミックに分化する以前の段階といえる。

阿部 TOEICが目標ではないが、シラバスをみればわかるように、TOEIC対応の態勢になっている。英語については、人文学部はTOEIC対応に舵を切った。

—— どの学問分野でも英語力は必要であり、そのための対応はこれまでもやっていたはずである。

—— 基本がしっかりしていれば、専門課程でも大丈夫である。池田氏の資料3ページの「一般目的」とは何のことか。

池田 「特定目的」とされたもの以外は、すべて「一般目的」ということになるだろう。

—— 山形大学では、1年次から2年次以降への連結部分はどうなっているのか。

佐々木 それこそがこれからの課題である。1年目の成果をいかに生かすかは、各学部で任されているというのが現状だ。

—— 池田氏の資料3ページからみる限り、京大の英語教育も、基本的には山大と同じではないか。大きな違いはないように思われる。

佐々木 質疑応答から明らかになった課題をまとめたい。1. 1年次の学習成果を2年次以降にどうつなげていくのか、ということが大きなテーマとなろう。現在のような英語教育は大学でしかできないことであり、それを1年で終わらせてはいけない。教員の側も条件を整えたいと思っている。大学としての合意形成が必要だろう。2. 人と機械とどちらが重要かと問われれば、人も機械も活用するという事になるだろう。3. 英語教育のめざすものを、全学的な課題としてもう少し考えていきたい。

ラウンドテーブル2：外国語教育センターの設置と外国語教育の充実  
佐々木 正彦（外国語教育センター・地域教育文化学部）

配付資料

平成19年度 山形大学教員研修会「第9回 教養教育ワークショップ」

【第2部】21世紀型教養教育を問う：ラウンドテーブル2／外国語教育センターの設置と外国語教育の充実

「外国語教育センターの概要及び英語教育（現状・課題・今後の取組）」

コーディネータ：佐々木正彦（山形大学地域教育文化学部／英語担当）

1. 外国語教育センターの設置目的

山形大学における英語教育及び初修外国語教育の充実を図ることを目的として同センターが設置された。

（業務として）

- 1) 英語教育に関すること。
- 2) 初修外国語教育に関すること。
- 3) その他外国語教育について必要な業務

（山形大学外国語教育センター規則 第2条及び第3条より）

2. 外国語教育センターの組織（運営委員会資料から）

以下の職員で組織されている。

センター長 1名（現在理事が兼務）

部門長 2名

専任教員（学部と兼任）

その他職員（外国人教員，センター特別非常勤講師）

センター内に2つの部門の設置：

英語教育部門：23名（センター特別非常勤講師3名を含む）

初修外国語教育部門：15名（センター特別非常勤講師1名を含む）

（山形大学外国語教育センター規則 第4条及び第5条より）

3. 外国語教育センターの現状と課題及び今後の取組

- ・バーチャル・センターが現状（脱バーチャル化）
- ・CALL 関係環境（教室内（現状）→学内（近々実現）→学外（今後の取組））
- ・韓国語の初修外国語枠での開講に関連した教室の不足（外国語開講枠の再検討）
- ・専任教員の採用の促進（事務量純増（現状），事務量の軽減化（課題）  
CALL, e-learning の組織的導入及び活用（今後の取組））
- ・学生のセンターの認知と利用（今後の取組）
- ・センター内，部門内での情報の共有が不十分（現状）→情報の共有化・FDの充実の必要性

4. 教養教育英語の新たな取り組み（導入してまだ半期，成果はこれから，修正もこれから）

・習熟度別クラス分け

センター試験の結果等を利用して，3レベルにプレイスメント。

初級から，中級，上級と，それぞれ，英語Ⅰ，英語Ⅱ，英語Ⅲ。

レベルごとに，目標・到達度の明示。

・ 少人数クラス編成

従来の英語のクラス規模は、会話・リスニング・ライティング中心の英語（C）及び購読中心の英語（R）とも50人超。

今回、英語（C）：35人未満、購読中心の英語（R）：40人を上限の目途。

従来の選択制をやめ、指定クラス。

・ 英語のセンター特別非常勤講師（平成19年度3人）

週12コマ（2コマのオフィスアワーを含む）：英語学習についての相談・アドバイス。

・ 外部試験の実施：TOEIC-IP

TOEIC-IP：大学が賛助会員としての団体特別受験制度。

英語を受講するすべての1年生を対象。

半期に一度ずつ実施（7月及び1月）

スコアを20点に換算し授業の評価に算入。

学生の計画的な英語学習や英語学習の動機付けにとって有効。

TOEIC-IP 受験料の軽減化（大学・校友会からの補助）。

・ 再履修生クラスの新設

TOEIC-IP テストは課さず。

クラス選択制の保持。

よりきめ細かな丁寧な指導。英語の苦手意識などを解消させるための指導。

5. 教養教育英語の現状と課題

1) クラス分けの問題点

推薦入学，社会人選抜，留学生への対応（英語Ⅱへの配置）の問題点。

これらへの大学独自のプレイスメントの実施が必要。今年度中に検討（次年度から実施予定）

2) クラス分け作業の負担の問題点

英語（C）と（R）の人数の統一とともにさらなる少人数化について検討が必要

3) センターの脱バーチャル化（施設，事務，予算）

4) センター専任教員の採用の促進

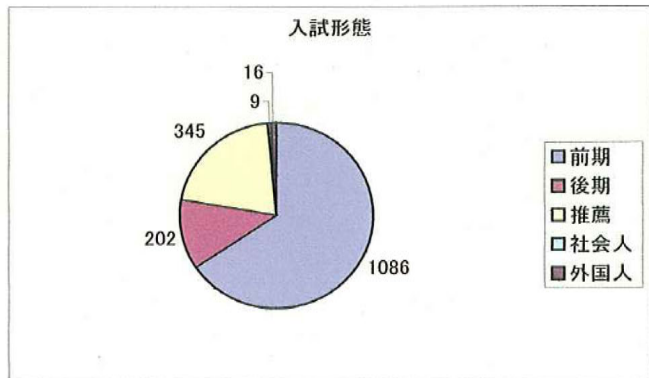


6. 英語 TOEIC-IP テスト実施の際の「属性アンケート」結果から

(小白川キャンパス試験場用)

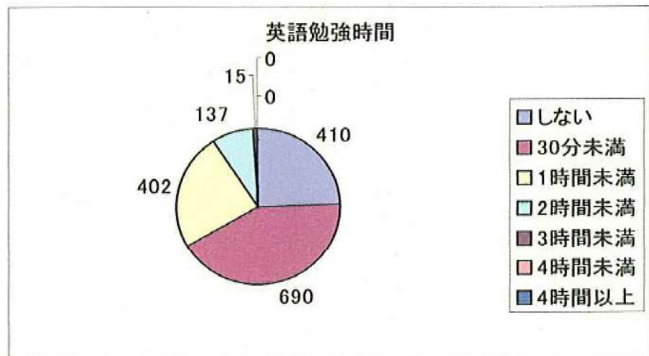
I. 本学入学時の入試形態を選択してください

0. 前期日程
1. 後期日程
2. 推薦入学
3. 社会人選抜
4. 外国人留学生選抜



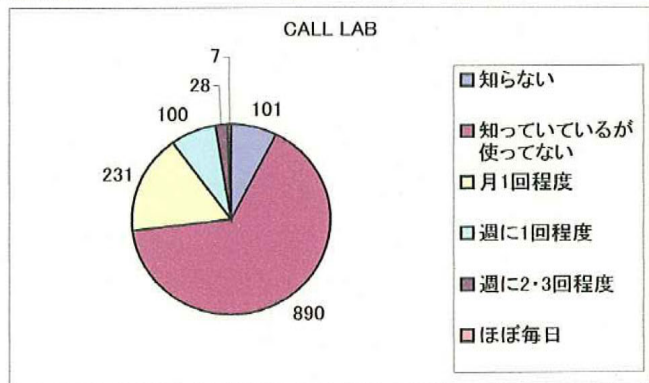
II. 授業の他に英語の1日当りの平均学習時間を選択してください(授業の予習・復習の時間も含まれます)

0. しない
1. 30分未満
2. 30分以上1時間未満
3. 1時間以上2時間未満
4. 2時間以上3時間未満
5. 3時間以上4時間未満
6. 4時間以上



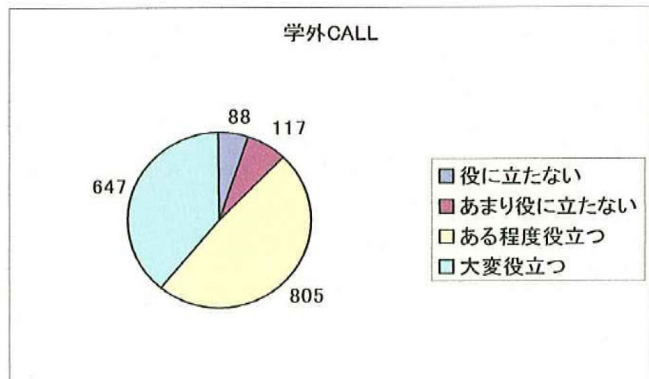
III. 教養教育1号館1階にあるCALL LAB室で放課後コンピュータを使って英語の勉強ができることを知っていますか。その利用頻度はどうですか(人文学部学生を除く。)

0. 知らない
1. 知っているが、使っていない
2. 知っている。月に1回程度使用している
3. 知っている。週に1回程度使用している
4. 知っている。週に2・3回程度使用している
5. 知っている。ほぼ毎日使用している



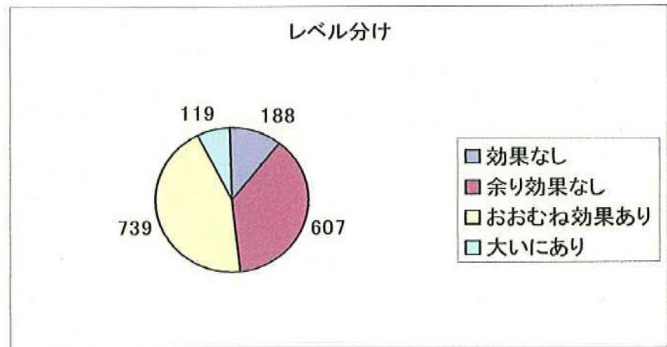
IV. CALL LAB室の英語学習プログラムが自宅やアパート・寮などのパソコンから利用できれば、英語学習に役に立つと思いますか

0. まったく役に立たない
1. あまり役に立たない
2. ある程度役に立つ
3. 大変役に立つ



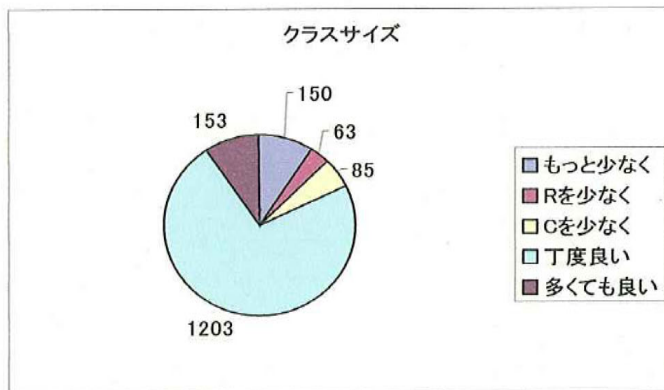
V. 教養教育の英語において今年度から習熟度別クラスが導入されましたが、クラスのレベル分けはあなたの英語の力を伸ばすのに効果がありそうですか

0. まったく効果がなさそう
1. あまり効果はないだろう
2. おおむね効果がありそう
3. 大いに効果がありそう



VI. 教養教育の英語のクラスサイズ基準は、英語 (C)が35人、英語 (R)が40人ですが、望ましいクラスサイズについて答えて下さい

0. 英語 (C)も英語 (R)ももっと少ない人数のほうがいい
1. 英語 (C)はいいが、英語 (R)の人数はもっと少ないほうがいい
2. 英語 (C)の人数はもっと少ないほうがいい。英語 (R)はいまのままでいい
3. 英語 (C)も英語 (R)の人数もちょうどいい人数だ
4. 英語 (C)も英語 (R)の人数ももう少し多くてもいい



### 5. 英語教育の今後の取り組み

- ・ 自学・自主的英語学習のための環境作りをさらに進める。
- ・ オフィスアワーの活用をさらにすすめる、きめ細かな個々に対応した学習支援につとめる。
- ・ 英語の授業の区分についての検討をすすめる (特にライティングの活動の確保。従来の英語 (C)、英語 (R)の区分でいいのか)
- ・ 事務量の縮減をはかる。
- ・ クラスサイズのさらなる少人数化を図る。ただし人数だけで授業の内容は改善されない。
- ・ 外部テストの成績への比率について、その意味合いとともに、検証を重ね検討をすすめる。
- ・ 評価方法について学生・教員へのアンケート調査などを通してさらに検討をすすめる、よりよい評価方法をさぐる。
- ・ 教科書のあり方について議論を重ねよりよい方向をさぐる。

ラウンドテーブル2：外国語教育センターの設置と外国語教育の充実  
阿部 宏慈（外国語教育センター・人文学部）

配付資料

平成19年度 山形大学教員研修会「第9回 教養教育ワークショップ」

【第2部】21世紀型教養教育を問う：ラウンドテーブル2／外国語教育センターの設置と外国語教育の充実

## 「外国語教育センターとこれからの初修外国語教育」

パネリスト：阿部宏慈（山形大学人文学部／フランス語担当）

### 1 山形大学における初修外国語教育の現状

#### ■ ベイシック・ミニマム+ $\alpha$ をめざして

一年次週2コマ、学部ごとの枠による開講

ドイツ語30×2コマ

フランス語12×2コマ

ロシア語8×2コマ

中国語24×2コマ

韓国語4コマ

#### ■ 平成17年度履修者総数2738名

（1年次生総定員は1730人、うち、人文学部、地域教育文化学部、理学部、医学部はそれぞれ前後期履修すると2人となるが、医学部看護学科および工学部および農学部後期においては初修外国語非履修者の分が除かれるのでこのような数字になる）

ドイツ語の履修者数が多く、韓国語は単位の扱いが卒業要件に入るようになったこともあり増加傾向

#### ■ 学生たちが初めて触れる「英語以外」の外国語として

実にまったくベイシック・ミニマムな現状（開講コマ数など）

##### 1) 人文学部；地域教育文化学部；理学部

独、仏、露、中、韓のうちからいずれか1科目4単位（前後期各2コマ履修）必修

##### 2) 医学部（医学科）：ドイツ語もしくはフランス語から4単位必修

看護学科においても、初修外国語は開講されているが、卒業要件単位には含まれない。

##### 3) 農学部：独、仏、露、中のうちからいずれか1科目2単位必修

→それ以上履修した2単位は選択科目もしくは自由科目の扱い（学科によって扱いが異なる）

##### 4) 工学部：必修単位なし（それでも平成17年度には前期459人の履修があった；後期は減少）

#### ■ + $\alpha$ な可能性

発展コース：人文学部で開講されている2年次以上用の科目を全学に開放

平成19年度からの措置であり、実質的に教養教育案内や各学部の便覧に記載がある（理学部）のは

19年度入学生から→まだ実質的には稼働しきれていないところもある。

初修外国語 III [2年次前期から履修可] ドイツ [フランス、ロシア] 語演習、中国語会話

初修外国語 IV [2年次後期から履修可] ドイツ [フランス、ロシア] 語会話・作文 (上級)、中国語作文  
韓国語 III、IV については「当面開講しません」という扱い

いずれにしても平成19年度の履修者は：0

親の心、子知らずと嘆いていても仕方がない

原因は？

- 1) 広報不足 (該当する学生たちが1年次にはこのような制度はなかった)
- 2) 専門科目との重複
- 3) 科目の単位上の扱い
- 4) 予算不足 (せめて独自に科目を立てられる手当があったら?)
- 5) しかし、必要なのは実績だろう (実績不足)

ちなみに>各学部における発展コースの扱いは？

人文学部以外における基本的な扱いは同一

学部の案内やシラバスに全く同じ文言が差し挟まれている。

その上で：

1) 地域教育文化学部にあつては、いずれの学科も自由単位20単位を設定しており、卒業要件単位数を超えて履修した一般教養科目及び外国語科目は自由単位とするという規定があり、この規定によって卒業要件単位数に算入されることも可能であると考えられる。

2) 理学部にあつては、地球環境学科を除く4学科(数理科学、物理学科、物質生命化学科、生物学科)においては単位数は異なるが、卒業要件単位数を超えて履修した一般教養科目及び外国語科目は自由単位とするという規定があり、この規定によって卒業要件単位数に算入されるものと考えられる。

3) 医学部においてはそもそも自由単位は存在しない……。

4) 農学部にあつては、1年次後期の初修外国語 II は想定されているが、発展コースについては履修しても卒業単位には算入されない。

5) 工学部にあつても、農学部とほぼ同様である。

\*医学部、農学部、工学部は、さらに、分散キャンパスであるため、小白川キャンパスのみでの発展コース開講措置の恩恵には浴しえない面もある。語学(それも発展的会話などの)の遠隔履修という駅前留学的アクロバットでもしない限りは。

## ■英語偏重/実用偏重の潮流に抗しつつ、しかも「使える」外国語をめざす

文化的な側面の強調 (AV教材の利活用、ネイティブによる授業 [仏露は発展コースにおいて])

基本的に学生諸君の履修や選択の動機も実用よりは文化面を重視

本当の国際人は国際理科系人であろうと国際工科系人であろうとみんな同時に国際文化人である。文化



的無知無理解は国際摩擦の火種を作る。

各国語検定などへの対応（人文学部 CALL 演習室への教材の導入）

達成感をもたせることの必要性（背に腹は代えられない）「できた！」「通じた！」という喜び。

## 2 初修外国語教育と外国語教育センター

### ■ 外国語教育センターの設置まで

教養教育（初修外国語）改善のためのワークショップと初修外国語の問題

開講コマ数の維持と担当教員数の減少

教養か実用かという硬直した二者択一的発想の愚→文化を理解せずに言語を理解することはできない。国際語のクレオール的現状は、言語の単純な道具化を意味しない。

経費削減の要求（特に「外国人教師」枠に対する）

専任なみの非常勤講師という雇用方式（島根大学などで実施済み）

総枠抑制という課題

### ■ 初修外国語の全学的な位置づけと語学教育センターの担うべき機能および組織のあり方

パーセプション調査における評価などから

初修外国語のメニュー：「多い」という評価と「少ない」という評価

→現状で十分であるかどうかは別としてメニューの多彩さが基本的な評価基準である。

韓国語の選択科目としての整備は一定部分完了

→ただし、専任教員の不在が問題

1年次のみの開講への不満

→発展コースの充実の必要性

ただし、専門科目との重複のため履修が困難であるとの指摘

到達度確認の必要：「何も残っていない」とする評価

→検定などの制度の利用

### 語学教育センターの機能

① 初修外国語教育プログラムの開発と立案、実施

② 全学の初修外国語教育に関する統括と連絡調整

③ 初修外国語の教育

\*現状では特に韓国語の担当者が必要

組織：全学外国語教育センター運営委員会として独立性を確保

センター長は教育担当理事でよいが、センター会議を設定

### 3 今後の課題とセンターの可能な未来像

#### ■ 発展コースの充実整備（重要課題）

専門教育課程と教養教育を結ぶ連続性あるカリキュラムの策定

発展コースの必要性和重要性に関する全学的な合意の形成

独自のパンフレットあるいは時間割／ポスターの作成など広報の充実

時間割の統一化（困難？）

2年次からの教養教育のカリキュラム策定を検討

くさび型カリキュラムの実現

#### ■ 初修外国語履修の動機づけ

##### 1) 国際センターとの連携による授業

授業への留学生のゲストスピーカー出演依頼など

たとえネイティブの教員であっても、教員は教員→学生同士は印象が異なる

##### 2) 学期（ゼメスター）ごとの履修単位数の上限設定や、履修取消制度、さらには GPA 制度などの見直し

しばしば、長期にわたる忍耐強い、恒常的な努力を要する外国語学習について、厳格に過ぎる枠組の適用が、却って優秀な学生の勉学意欲をそいでいる。

同様に GPA を学生の学部の特設教育コースなどの所属決定に際し、参考に用いるのではないかという学生側の危惧を払拭する必要がある。（GPA 値の目的外使用の厳格な排除）

#### ■ 言葉と文化を学ぶ、生きた情報のセンターとして（夢物語のような未来像）

私的なアイデア

##### 外国語・外国文化センター的機能

最低限小白川三学部に開かれていることが認知されやすい立地条件

たとえば人文学部二号館二階の北側に語学教育センター専用の教室を整備

（面積分を全学に供出するかわり、三号館の共用部分を人文学部所属面積に算入）

トワイライトの時間帯に開講される実践的な発展コース

（高校生、市民にも開放する [有料? ]）

語学自習用の教材と機材

文化紹介の視聴覚教材

ポスター展示

国際交流などとのタイアップ

ラウンドテーブル2：外国語教育センターの設置と外国語教育の充実  
池田 光則（外国語教育センター・人文学部）

配付資料

平成19年度 山形大学教員研修会「第9回 教養教育ワークショップ」

【第2部】21世紀型教養教育を問う：ラウンドテーブル2／外国語教育センターの設置と外国語教育の充実

「京都大学高等教育研究開発推進センター第76回公開研究会報告」

パネリスト：池田光則（山形大学人文学部／英語担当）

【目的】山形大学における外国語教育充実の議論に資するため、外国語教育改善の成功例として学生から高評価を得ている京都大学の英語教育改革事例を報告する。

【報告する研究会の概要】 京都大学高等教育研究開発推進センター 第76回公開研究会

大学英語教育の『システム』が抱える問題と解消の仕方

－教育ガラパゴスの不思議な進化－

講師：水光雅則（京都大学高等教育研究開発推進センター・教授）

日時：2007年6月23日（土）午後3時～5時 場所：京大会館102会議室

概要（当日の案内文より抜粋）：大学英語教育について、外国語教育としての授業の成立条件から、カリキュラムの開発と実施、英語担当者の資格、英語のプロの人材養成、責任の所在と意思決定などに至るまでの諸問題を「教育システム」の問題として捉え、京大でこの12年間どのように問題解消をしてきたかを見る。

◆京大における英語教育改革の柱

- (i) 自律学習型CALLの導入
- (ii) 英語担当専任教員の資格を見直し、英語教育の専門家を入れる
- (iii) 英語教育に必要な人材を、大学院で養成
- (iv) 責任体制の改革

1. 時空間の制約からの解放

(1) 専任が少ない中、非常勤を減らさずにクラスサイズを小さくできるのか。なぜクラスサイズという問題が生じるのか。

京都大学 平成4年教養部廃止、総合人間学部に再編  
英語専任教員数：31名→21名に減  
英語非常勤講師数：ピーク時73名（全コマ数の75%を担当）  
クラスサイズ：平均80名（120名超のクラスもあり）

↓

時空間（時間割と教室）の制約に拘束されることのない教育

(2) どんなCALLをするのか。設備、技術、予算だけ食って成果のないCALLでよいのか。

自律学習型CALLの導入

・全国プロジェクト（文部省メディア教育開発センター）として作成したCD-ROM教材を学生

に購入させる。

- ・ 2回生専用のアカデミック・リスニングのクラス（前後期各 200名）と、単位未修得者専用クラス（前後期各 200名）が対象。1回生は対面式授業で行なわれるアカデミック・リーディング（1クラス 50名）とアカデミック・ライティング（1クラス 35名）
- ・ 履修学生：前後期合計 1,600名、担当教員（専任教員）：8名、TA：16名  
→対面指導クラスのサイズを小さくできた。
- ・ 成績は、試験（学期中3回）の得点とFDに記録された学習時間に基づいて判定
- ・ 教室、セキュリティ、保守の問題クリア

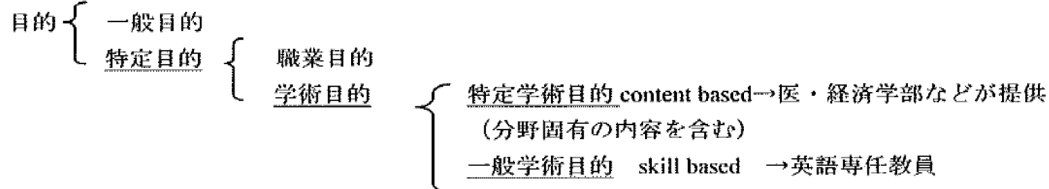
(3) 大学の英語カリキュラムは何を目指すのか。駅前と同じはだめなのか。

(4) 各学部で専門に直結する専門英語（特定学術目的の英語）を開講することはできないか。

カリキュラム：習得した技能を何のために使うのか、その基本方針を示すもの

- ・ その大学で英語を何に使うかを、関係者で同意していないことが問題
- ・ カリキュラムの目指すもの→大学の設立趣旨・教育理念を実現するために、それに照らして考える必要がある。

[京大の場合] 学術研究に資する



(5) 英語のシラバスでは何を書けばよいのか。

- ・ 次に問われるのは、個々の授業
- ・ カリキュラムがどの程度成功しているのか→シラバスがカリキュラムを反映しているか  
(47%が合っていた)
- ・ 担当者には「要項」を配付している（無視する教員の存在→項目を入力しないと終了しないプログラムの導入等）

## 2. 英語教育を担当する人材について

(1) 英語担当の非常勤講師は英語さえできれば誰でもいいのか。

- ・ 何をめざすカリキュラムかが決まれば自動的に決まる
  - ・ ネイティブである必然性は見出せない
- 「素人」の根拠のない言説に惑わされてはいけない  
(素人は個人の経験に基づいているだけである)

(2) シェイクスピアやチョムスキーを研究しているだけで英語教育ができるのか。

- ・ 自分の長年の研究で積み重ねたものを英語教育に反映させることに価値がある。
- ただし、「組織として取り組むべき問題 (ex. 立案, 評価, 委員会……)」に取り組む人材が必要



- (3) 英語を担当する専任教員から成る英語部会の専門別の構成はこれまでどおりでよいのか。
- (4) 英語担当者の教員採用人事の条件は昔のままよいのか。大学は、したい教育にふさわしい人材の条件を考えて採用人事をしているのか。
- (5) 英語教育学者が居心地よく思える場所があるか。

・全国の大学の現状

英文学者 大多数  
英語学者 わずか  
英語教育学者 ごく少数（最近増加傾向） 居心地がよくなる必要がある

- ・「英語」だけが、英語教育の専門家ではなかった。  
ずれているのがわかっていて、なぜ修正しなかったのか。

- (6) 英語教育学と指定した公募で、優れた人材を採ることができるのか。
  - ・現状では非常に困難←レベルの低い世界←「英語教育」をバカにしてきたから  
(英文学・英語学をやっていたら、教育ができるという誤った前提による)

- (7) 大学は、教育に必要な人材を養成しているのか。  
[京大の例] 大学院外国語教育論講座博士課程を創設した。

### 3. 合意形成、意思決定の仕組み

- (1) カリキュラムの開発と指揮の責任者は誰なのか。
- (2) 意思決定の仕組みはどうなっているのか。

[京大の例]

企画・開発の指揮と実施の権限を分離  
上位の意思決定組織には、下位組織の人が入ることが必要  
(上位の組織は、素人が寄ってたかって好きなことを言う)

- (3) 大学には、その教育に必要な人員数の教員を適切な部署に配置されているかを調べ、調整する仕組みがあるのか。

[京大の例] 教育担当の副学長

【参考文献】

竹蓋幸夫, 水光雅則 (2005) 『これからの大学英語教育』, 岩波書店

【参考資料等URL】

<http://www.z.k.kyoto-u.ac.jp/pdf/link/link0051.pdf>

京都大学高等教育研究開発推進機構『平成15年度「特色ある大学教育支援プログラム」外国語教育の再構造化－自律学習型CALLと国際的人材養成－平成15年度実施報告書』

<http://www.z.k.kyoto-u.ac.jp/pdf/link/link0238.pdf>

京都大学高等教育研究開発推進機構京都大学大学院人間・環境学研究科英語部会 (2006) 『学術研究に資する英語教育 京都大学における英語新カリキュラム』

<http://www.momiji.h.kyoto-u.ac.jp/MMpage/MM/MM7/MM7suiko.pdf>

水光 雅則, 田地野 彰, ロバート・ファウザー, 中森 啓之, 浅田健太郎 (2004) 「京都大学における自律学習型CALL (平成15年度) の実施報告」, 『MM NEWS』, No. 7

<http://www.momiji.h.kyoto-u.ac.jp/MMpage/MM/MM5/5suiko.pdf>

水光雅則 (2002) 「CALL教材 Listen to Me! を使った「授業」と「自習」と「教師の役割」」, 『MM NEWS』, No. 7

<http://www.z.k.kyoto-u.ac.jp/>

京都大学高等教育研究開発推進機構

<http://www.z.k.kyoto-u.ac.jp/pdf/link/link0198.pdf>

外国語の履修について (京都大学『履修の手引き』 [平成19年度版])

ラウンドテーブル3:授業支援システム (LMS) の教育効果  
記録

山形大学教員研修会 第9回教養教育ワークショップ  
ラウンドテーブル3 : 授業支援システム (LMS) の教育効果

日 時 : 平成19年8月9日 (木) 13:00~15:00  
会 場 : 山形大学教養教育1号館112講義室  
コーディネーター : 中村 三春 氏 (高等教育研究企画センター・人文学部)  
パネリスト : 金井 雅之 氏 (地域教育文化学部)  
伊藤 壮志 氏 (東北芸術工科大学)  
江本 理恵 氏 (岩手大学)  
参加者数 : 15名 (コーディネーター、パネリストを除く)  
記 録 : 中西 達也

記 録 (敬称略)

発表1 中村 (13:00~13:21)

ラウンドテーブル3の内容 パネリストの紹介

まず、ポータルシステム、LMS・CMS、学務情報システムという用語と、それらの簡単な説明があった。

授業支援システム (LMS) の教育効果について。

山形大学は Blackboard 元年である。多言語対応だが、日本語及び英語を導入している。

LMS とは Learning Management System。授業における教員・学生間のコミュニケーション・ツールを、一つに統合した Web システム。

Blackboard とは国内外で広く使われている LMS の一つ。

LMS の教育効果は

統合授業支援システムとしてのメリット → 一目で授業の情報や内容を把握できる。  
著作権に問題のないコンテンツはダウンロードできたりする。  
授業コンテンツの効率よい提供→補修コンテンツまでも供給。  
双方向性の確保・向上→学生間コミュニティまでも構築。

LMS の利便性は

w e b 化によりレポートの出題・回収、連絡・質問・解答の省力化が可能。  
授業予告にとどまらず授業記録までも出来るので、大きな拡張可能性。  
Blackboard 先進大学として、信州大学、岐阜大学、玉川大学の紹介があった。各大学ともヘルプ機能が非常に充実している。

LMS のよりいっそうの普及 (現在、山形大学では 28 の授業科目、2,088 名の受講者) を目指して、LMS 利用方法の改善・拡充。具体的には、LMS 利用授業アンケートの分析・反映 LMS 利用方法の具体的な啓発活動

### 学生向けLMSアンケートから

#### よいところ

あとから繰り返し見ることができる点です。  
遠隔地でも同様の講義を受けることができる。  
授業を欠席してしまっても録画で授業内容を知ることができること。

#### わるいところ

授業を休みやすくなる。  
家で聞いているとどうしても集中力が続かないことが多くなる点。

### 教員向けLMS利用アンケートから

受講学生や配布資料が多い講義については、資料配布が円滑に行え、効率的である。

LMSは、教養教育の授業のように、学生数が多かったり、複数の学部や大学から学生が受講して、学生の顔や名前の特定制が難しく、日常的に会って連絡することのできない授業では、抜群の教育効果を発揮する。

複数の授業で、フルにLMSを活用するとなると、労力の点でかなりむずかしいとも言える。専門教育の対面授業や、演習科目などの場合は、掲示板と課題程度の使い方でもよいように思われる。

### 総合意見

学習意欲が沸くし、何より楽しかった。パソコンをいじるのが好きなので、パソコンは毎日開くから、そのついでとして見ていた。掲示板は初めは抵抗があったが、慣れてくると楽しいし、返事が来るのが待ち遠しかった。

連絡がいつでも確認できて便利。

教員とコミュニケーションをとりやすいというところでは満点である。

パソコンを使い慣れてなかったので手を焼く部分が多くて困った。

学生側からのLMS利用の必要性がわからない。自宅にインターネット接続環境を持たない学生は、LMSを利用したレポート提出は不便である。

### 発表2 金井（13：22～13：48）

#### BLACKBOARDを有効に活用するための授業方法や環境条件

2つの授業「情報処理」「情報と社会生活」を検証することにより、BLACKBOARDを有効に活用するための提言を行った。

#### 「情報処理」1人1台ネット接続PCあり

授業形態は、コンピュータの個人実習及び個人での課題作成・提出。

知識やスキルの伝達が目標。特に授業時間外の反復演習が重要。

いつでもどこでもアクセスできることに対する肯定的評価（LMSアンケート自由回答）。

オンラインですべてが完結する効率的な教育方法。



特に教員の負担は大幅に軽減。

出席確認へのオンラインでのコメント記入(手書きのシャトルカードに比べて 2/3 程度の時間)。

オンラインでの課題の採点, フィードバック(電子メールの頃はフィードバックは断念)。

授業時間中に教員も学生も Blackboard にアクセスできたことが重要。

出席確認コメントは授業時間中でないと無意味。

自宅でインターネットに PC で接続できる環境が整っていない学生にとっては不便。

連絡事項の周知方法等に改善の余地あり (LMS アンケート自由回答)。

「情報と社会生活」学生は電源やネット接続の環境なし

授業形態は, グループ学習及びグループでの課題作成・提出。

探究・発見・コミュニケーション(コラボレーション)が教育目標。

授業時間中や時間外での対面型コミュニケーションを重視。

頻繁に対面できる環境下では, あえて Blackboard を利用するインセンティブがない。

掲示板への書き込みがほとんどなかったことも, 島井(2005)の指摘通り。

授業時間中に Blackboard にアクセスできなかったことも難点。

実際に Blackboard を使わざるを得ない機会が全員には存在しなかった(4人がアクセスなし)。

操作イメージが得られないので, 興味もわかない。

調べ学習を併用するグループ学習において, コラボレーション作業中にインターネットに接続できない環境制約は大きな障害。

### BLACKBOARD を有効に活用するための提言

授業目標のどの部分を達成するために Blackboard を利用するのかを明確に。

教員の負担, 学生の教育効果。

学生がより多く Blackboard にアクセスしたくなるような工夫。

全体(連絡事項)や個人(成績評価やコメント)への教員からの情報提供をこまめに。

教室の情報環境の整備。

教員がネットに接続できるようにするのは当然。

学生も自分のノートパソコンを持参すればネット接続できるのが望ましい(個人認証つき無線 LAN, 机に電源コンセント)。

携帯からの Blackboard へのアクセス。

大学生の日常的なネットアクセス手段は PC ではなく携帯。

この後, 中村先生が, 山大の実際のコンテンツを用いて Blackboard の簡単な説明を行った。

### 発表3 伊藤(13:49~14:23)

#### 東北芸術工科大学のポータル教学システム「NETBUS+」

東北芸術工科大学は平成18年4月にポータル型の教学システム「NETBUS+」を導入することによって, 近年は著しく多くなっている学内の情報や様々な機能を効率よく学生, 教職員や学外の方に提供することを実現しました。

### 第1世代 オフコン

平成4年の開学当初から ICATS というオフコン型のシステムを利用していましたが、予め用意されたプログラムと帳票しか利用できず、新たに作る場合は有償のカスタマイズが必要でした。

### 第2世代 PC

本学でも学内 LAN の整備が完了しましたので、次のステップとして「キャンパス・モバイル・システム」の導入が決定され、平成11年の新入生から学生全員がノートパソコンを購入することになりました。学生の情報リテラシーを高め就職力を向上させるとともに、全学生が常に最新のコンピュータやソフトウェアを利用できる環境を整備することが目的でした。

### 第3世代 WEB

平成16年から第三世代の教学システムについて検討を開始しました。次世代システムは、利用者のパソコンに特別なソフトウェアを入れる必要があった PC 型から、ごく普通のインターネット・ブラウザで簡単に利用できる WEB 型へと急速に進歩していました。

もう一つの背景として、SOLICIA や NETBUS の導入でインターネットによる情報のやりとりが容易になった反面、膨大な情報やリンクを常に更新したり表示したりすることが職員の日課となり、多くの時間を費やすようになりました。さらに、利用する側の学生にとって、膨大な量の情報から自分にとって必要なものを探し出すことが難しくなっていました。

これらの問題を解決するために、ポータル機能のシステムを導入することになりました。前システムを継続しながら、機能の強化を表すため「NETBUS+」と命名しました。

実際の NETBUS+ の画面で、機能の詳しい説明があった。

### 今後の課題と展望

NETBUS+ を導入してからまもなく1年が経ちますが、今後は各種機能のいっそうの有効活用を目指していきたいと考えています。

近い将来には権限設定の機能を強化して、きめ細かく設定できるようにします。これで学科長やゼミの指導教員による履修指導や、就職支援スタッフによる指導、あるいは校医やカウンセラーの指導が可能となります。

「授業支援」として知られる e ラーニングの機能は、システム導入のもう一つの理由でした。小テスト、課題やアンケートのやりとり、あるいは授業毎のネット掲示板の利用を積極的に推進することによって、大規模な e ラーニング・システムの導入に向けて大きな意味を持ちます。

この他に、授業評価の電子化を始め、人事や財務といった、他の学内の情報システムとの連携強化による情報管理の統合と効率化の向上、将来的には国内外の協定大学との連携を図る手段として、引き続き NETBUS+ の改善と多様な機能の追加を進めていきたいと思っております。

発表4 江本（14：24～）

岩手大学の概要，大学教育総合センターの概要の説明があった。

（記録ここまで。以下，配付資料より作成した部分）

岩手大学のアイアシスタントとは

岩手大学では，全学的にすでに導入・公開のコンセンサスがとれている Web シラバスをベースとしたアイアシスタントを導入することで，全学的に LMS を導入し，授業改善に結びつけることを目指しています。

アイアシスタントの特徴

アイアシスタントには，授業の進行に応じた情報提供を行う基本機能①，教員と学生間の双方向性の実現や教室外学習の支援を行う拡張機能②，使い勝手を追求したポータル機能③が用意されています。

①基本機能

基本機能として，シラバスと授業記録が用意されています。ここから②の拡張機能の i カードや課題・レポート等の出題をすることもできます。

②拡張機能(LMS)

拡張機能として，いわゆる LMS(授業支援システム)に該当する機能を用意しました。学習支援，コミュニケーション，グループ作業などの機能があります。

③ポータル機能

「使い勝手」を良くするために，今回，徹底的にこだわったのが「情報が集約されているトップページ(ポータル)」です。ログインして最初に表示されるポータル画面は，必要な情報が一目でわかり，かつ，ワンクリックで必要なページへアクセスできるように設計されています。

教員側では，学生から何らかの反応があった(課題が提出された，など)場合には，教員の時間割上にアイコンが表示されます。

学生側では，教員から何らかの指示があった場合には，学生の時間割上にアイコンが表示されます。自分の履修している授業の休講情報や就職関係のセミナー情報なども表示され，また履修申告もできるので，学生にとっても非常に利便性の高いシステムであると考えられます。

アイアシスタントの運用

「使い勝手」の良いシステムを目指してこだわった点は，本学の学務情報システムや認証システム，図書館，大学情報データベース等との連携を行うことです。これらの学内他システムとの連携を行うことができたので，例えば，アイアシスタントを使う教員は，自分の担当している授業を登録する，履修者を登録する，時間割を登録する，自分の名前や所属学部を入力する，などの作業をしなくても，ログインすれば，前述したような既知の情報が自動的に表示されます。

これにより，「自分が担当している科目が表示されない」「自分が担当していない科

目が表示されている」など、学務情報を個別の教員が確認できるので、学務情報上のミスは早い時点で発見できるようになりました。

これは学生も同じです。履修申告をした授業科目が時間割に表示されますので、学期の早い時点で履修申告ミスを発見することができるようになりました。

#### 今後の展望

岩手大学では、平成19年度のシラバス作成を通して、ほぼ全教員に「アイアシスタント」にアクセスしてもらうことができました。次の勝負は、単に「シラバス」として使われる「Webシラバスシステム」から、今後、どれだけ「授業記録」、「学習支援」の機能まで使われる「総合的なシステム」とできるか、だと考えています。大学においては、単に良いシステムを用意しただけでは使われないことを痛感しています。総合的なシステムとして、多くの教員に使ってもらうための地道な活動に取り組みたいと思います。

学務情報システムと並ぶ大学教育の基盤システムとして導入した「アイアシスタント」をベースに、FDに活用できるシステムの構築を計画しています。



ラウンドテーブル3：授業支援システム（LMS）の教育効果  
中村 三春（高等教育研究企画センター）

配付資料

【ラウンドテーブル3】

## 授業支援システム (LMS)の教育効果

第9回  
山形大学教養教育ワークショップ

## LMS利用授業とは何か —山形大学Blackboard元年—

山形大学高等教育研究企画センター  
eラーニング推進室長  
中村 三春

山形大学 Yamagata University

Q:LMSとは何ですか？

**A:** ◆ Learning Management System

- 授業支援システム
  - 授業における教員・学生間のコミュニケーション・ツールを、一つに統合したWebシステム
- ◆ Blackboard
  - 国内外で広く使われているLMSの一つ
  - 各国語対応(日本語/英語)
  - 幅広いカスタマイズ可能性
  - 各種OS、ファイル形式との適合性
- ◆ eラーニング授業に限らない有効性

山形大学 Yamagata University

Q:LMSで何ができますか？

**A:** ◆ 教員 ⇄ 学生

- 連絡事項(休講、補講、試験予告等)
- プロフィール、シラバス、ホームページURL等
- コース文書(授業コンテンツの公開)

◆ 教員 ← 学生

- 課題(レポート、テスト、質問)
- フィードバック
- アンケート

◆ 学生(教員) ⇄ 学生(教員)

- 掲示板、コミュニティ

山形大学 Yamagata University

Q:LMSはどう使うのですか？

**A:** ◆ 学生(大学・自宅等のPC)

- ログイン(ID、パスワード)
- コース(授業)選択

↓

- 閲覧、ダウンロード、コンテンツ視聴
- 課題の解答・送信
- 掲示板への記入

↓

- ログアウト

山形大学 Yamagata University

Q:LMSの教育効果は何ですか？

**A:** ◆ 1) 統合授業支援システムとしてのメリット


- その授業のすべての情報を集積
  - 一目で授業の情報や内容を把握できる

◆ 2) 授業コンテンツの効率よい提供

- 資料(テキスト、スライド)ダウンロード
  - 補講コンテンツの提供


◆ 3) 双方向性の確保・向上

- 課題・掲示板等による緊密なコミュニケーション
  - 学生間コミュニティの構築

 **Q:LMSは利便性がありますか？**


**A:**

- ◆1)レポート出題・回収のWeb化
  - 紙媒体不要(ダウンロード・印刷可)
  - 事務作業の大幅低減
- ◆2)連絡・質問・解答の省力化
  - すべてを研究室・自宅で処理可能
  - 対面授業・オフィスアワーとの併用も
- ◆3)授業のプランニングを実質化
  - 授業予告(シラバス)だけでなく、授業記録も
  - 操作は簡単、容易に美化化できる
  - 大きな拡張可能性

 **Q:LMS利用は普及しましたか？**

**A:**

- ◆平成19年度前期
  - 28の授業科目、2088名の受講者
  - 教養教育17科目
  - 専門教育11科目
  - 教養教育を中心として募集
  - 登録学生数に余裕があり、専門教育でも
- ◆遠隔キャンパス・県内他大学向け利用
- ◆海外向け利用
  - Japan Studies Program

 **Q:今後どう進めるのですか？**

**A:**

- ◆LMS学習支援
  - 教養教育の全授業をコース登録済み
  - 教員にアクセスして見ていただく
  - 希望教員分の授業に履修学生を登録・利用可
  - 専門教育も同時に募集
- ◆LMS利用方法の改善・拡充
  - LMS利用授業アンケートの分析・反映
  - LMS利用方法の具体的な啓発活動
  - 情報セキュリティ管理の強化

ICT活用教育INFORMATION > コントロールパネル > 成績表 > 項目オプション > アセスメントの統計: LMS利用授業アンケート(教員向け)

## 📖 アセスメントの統計: LMS利用授業アンケート(教員向け)

統計は採点オプション(最終作業、最初の作業、最終得点の作業、平均得点)で使用した試行回数のみに基づいて算出されます。[平均得点]が採点オプションの場合、すべての試行回数が統計に含まれます。

名前 LMS利用授業アンケート(教員向け)

試行回数 6 (このアセスメントの8試行の合計回数)

手順

下記のアンケート項目に記入の上、「送信」をクリックしてお答えください。

### 問題1 多肢選択

LMS(Blackboard)の利用について

Blackboardには頻繁にアクセスしましたか? あてはまるものを選んでください。

解答	パーセント解答
ほぼ毎日アクセスした	50%
週に二、三度はアクセスした	16.667%
週に一度はアクセスした	33.333%
月に一度はアクセスした	0%
ほとんどアクセスしなかった	0%
未解答	0%

### 問題2 多肢選択

LMSの利便性について

Blackboardは、使いやすかったですか? あてはまるものを選んでください。

解答	パーセント解答
使いやすかった	33.333%
使いにくかった	16.667%
特に感じなかった	50%
未解答	0%

### 問題3 複数解答

LMSの使いやすさ

Blackboardの使いやすかったところは何ですか? あてはまるものをいくつでも選んでください。

解答	パーセント解答
ログイン	66.667%
コースの選択	50%
連絡事項	50%
教員プロフィール	16.667%
シラバス	33.333%
コース文書	50%
掲示板	0%
課題	33.333%
アンケート	33.333%
その他	0%

### 問題4 エッセイ

LMSの使いやすさ(具体的に)

上の項目で「その他」と答えた人は、その内容を具体的に書いてください。



未解答応答

6

指定解答

**問題5 複数解答**

LMSの使いにくさ

Blackboardの使いにくかったところは何ですか？ あてはまるものをいくつでも選んでください。

解答	パーセント解答
ログイン	0%
コースの選択	0%
連絡事項	16.667%
教員プロフィール	0%
シラバス	0%
授業コンテンツ	33.333%
掲示板	50%
課題	16.667%
アンケート	16.667%
その他	16.667%

**問題6 エッセイ**

LMSの使いにくさ(具体的に)

上の項目で「その他」と答えた人は、その内容を具体的に書いてください。

未解答応答

5

指定解答

大学プロクシを使っていると、コンテンツのアップロードができないところ。

**問題7 選択問題**

VOD録画の提供

1つ以上の授業において、Blackboard上で、ビデオ・オン・デマンド方式の授業録画を提供していましたか？

解答	パーセント解答
はい	16.667%
いいえ	83.333%
未解答	0%

**問題8 多肢選択**

VOD録画の利便性

上の項目で「はい」を選んだ方に聞きます。  
その授業におけるVOD録画の提供の方法は、利用しやすかったとお考えですか？

解答	パーセント解答
利用しやすかった	16.667%
利用しにくかった	0%
特に感じなかった	0%
利用しなかった	16.667%
未解答	66.667%

**問題9 エッセイ**

VOD録画の利便性(具体的に)

VOD録画の良いところ、悪いところを、具体的に書いてください。

未解答応答

5

指定解答

- BlackboardとConnect Enterprise Serverとのリンクは、非常にスムーズであり、支障を感じなかった。

問題10 選択問題

ファイルダウンロード

この授業では、Blackboard上で、資料・スライドなどのダウンロードファイルを提供していましたか？

解答	パーセント解答
はい	100%
いいえ	0%
未解答	0%

問題11 多肢選択

ファイルダウンロードの利用

上の項目で「はい」と答えた方に聞きます。

提供されているファイルダウンロードを、学生はよく利用したとお考えですか？ あてはまるものを選んでください。

解答	パーセント解答
頻繁に利用した	50%
たまに利用した	33.333%
あまり利用しなかった	16.667%
利用しなかった	0%
分からない	0%
未解答	0%

問題12 エッセイ

LMSと授業内容との関連づけ

LMSを利用するにあたって、LMSと授業内容とを関連づけるために、どのような工夫をなさいましたか？ 自由にお書きください。

未解答応答

2

指定解答

1)利用してもらうため、及び安全上、初期パスワードを変更してもらうため、各科目で「ログイン・テスト」1問を提供して「正解者は3点与える」ことにした。「掲示板」も設定したが、管理者(教員)には匿名でないためかほとんど利用されなかった。2)教養セミナーでは毎回の報告者にレジュメを提出させ、pdf化したファイルを「講義資料」にアップロードし、事前に閲覧できるようにしたが、報告者、司会者以外は最初の2、3回以外はダウンロードしていない(当日印刷物を配布しているためだろうが、事前に目を通すという勉強意欲を高められなかった)。「アンケート」を用いて毎週の報告要旨、報告、司会の3点を評価してもらうようにしたが、最初からあまり利用されなかった(去年は質問票に筆記させて回収したが、LMSにはアクセスや回答に関し強制力が働かない点が難点か)。3)講義科目では2回の小テストの素点、得点、期末テストの素点、最終単位認定を成績表に転送し、my成績表で確認できるようにした。また、小テスト、総合成績の優秀者氏名を連絡事項で掲示した。4)専門演習は元々少人数で連絡が密であるため前期は利用する必要性を感じず、実際利用しなかった。後期はレジュメ配布や宿題(調べ毎)の回答に利用したい。

200人をこえる授業だったので、配布資料の準備は物理的に不可能に近い状態だったが、LMSのおかげで、最小限の労力で資料の配布ができた。

1. 授業の感想レポートを、これまでは時間内や宿題にして書かせていたが、すべてLMSから出題し、提出や解答の作業を省力化することができた。
2. 対面授業では質問の時間も取ったが、LMSの掲示板を利用することができ、日常的に質問を受けつけることができた。



演習問題と解答例は講義後に公開して、学生の復習に使ってもらいました。

### 問題13 エッセイ

#### 総合意見

LMS利用授業として授業を実施した体験に即し、LMSやLMS利用授業に対して、総合的なご意見を自由に記入してください。

ご協力ありがとうございます！！

#### 未解答応答

0

#### 指定解答

- LMSを真に活用するためには、学生が授業中にリアルタイムでアクセスできることが必要だろう。たとえば、ミニッツカードの代わりに各回の授業の感想を記入させるとしたら、授業終了後にマルチメディア室等に行って書き込ませるのはかなり難しいだろう。今学期は、コンピュータ実習室でおこなう教養教育の「情報処理」と、ふつうの教室でおこなう専門科目の2つでLMSを利用したが、前者が教材のダウンロードや課題の提出などでLMSをフル活用できたのに対し、後者は実際にはあまり利用されなかった。
- 学生が授業時間中にLMSにアクセスできるようにするために、すべての教室で学生が自分のノートパソコンをインターネットに接続できる環境(無線LAN+電源コンセント)を整備することが望ましいと思われる。

受講学生や配布資料が多い講義については、資料配布が円滑に行え、効率的である。なお、学生の中にはLMSの利用方法がなかなか理解できない者も見受けられたので、学生用の利用マニュアルの一層の整備が必要であろう。

数学の授業なので、直接LMSを使って講義するのはちょっと無理がありますが、講義の補助としてLMSを使うと、演習問題とその解答等で学生の勉強に大分役に立ったと思います。ほとんどの学生も無難に使っています。1人、2人ぐらいが心理的に抵抗していたようですが、それは、受講している教養科目の中にこの科目だけがLMSを使ったようです。LMSを一般の教養科目で広く使ってもらえると、解消できると思います。

履修登録の都合というのはわかるが、使用開始時期が遅すぎる。4月の初回の講義までに、1年生全員にアカウントを配付するなど、思い切った方がよい。新入生の感度はゴールデンウィークまでは高いので、初めの1～2回の講義までに、授業のやり方を確立できた方がよい。

- LMSは、教養教育の授業のように、学生数が多かったり、複数の学部や大学から学生が受講して、学生の顔や名前の特定が難しく、日常的に会って連絡することのできない授業では、抜群の教育効果を発揮する。LMSを利用した双方向的コミュニケーションの効果は高いと思われる。
- ただし、複数の授業で、フルにLMSを活用するとなると、労力の点でかなりむずかしいとも言える。専門教育の対面授業や、演習科目などの場合は、掲示板と課題程度の使い方でよいと思われる。
- 学生によるLMSの評価も概して良かったように思う。もっとLMS利用授業が普及すれば、いろいろな改善点も見えてきて、全体としての利便性も向上するものと思われる。

1)成績表のダウンロード、アップロードに関しマニュアルと実際の手順が異なり、かなり手こずった。現状では氏名とID番号が同一欄になっており、ID番号を抽出し、手持ちのExcelシートと照合するには特殊な関数を用いるなど、かなり専門的な知識を要するので改善して欲しい。2)小テスト(1回20点×2回)をオンライン上の実施することも考えた(そうすればオンライン上で集計するので上記アップロードの必要性もない)が、「なりすまし」を防げないので実行に移せなかった。それほど厳密な公平性を要さず配点も小さい確認テストなら後期から利用できるかなと思っている。3)学生の利用がそれほど進まないのはメリットが少ない(講義資料は著作権上アップできない、ゼミのレジュメは当日印刷物が配布される)こともあるが、学生によっては自宅・マンションにネット環境が整っていないからのようでもある。「連絡事項」「掲示板」「my成績表」は携帯のi-modeから閲覧できるようにすれば、利用が進むと思われる。4)こうした書込み欄は改行するためにhtmlモードにして<BR>を記入する必要があるなど使い勝手が悪い。改善して欲しい。

OK

ICT活用教育INFORMATION > コントロールパネル > 成績表 > 項目オプション > アセスメントの統計: LMS利用授業アンケート(教員向け)

## 📖 アセスメントの統計: LMS利用授業アンケート(教員向け)

統計は採点オプション(最終作業、最初の作業、最終得点の作業、平均得点)で使用した試行回数のみに基づいて算出されます。[平均得点]が採点オプションの場合、すべての試行回数が統計に含まれます。

名前 LMS利用授業アンケート(教員向け)

試行回数 6 (このアセスメントの8試行の合計回数)

手順

下記のアンケート項目に記入の上、「送信」をクリックしてお答えください。

### 問題1 多肢選択

LMS(Blackboard)の利用について

Blackboardには頻繁にアクセスしましたか？ あてはまるものを選んでください。

解答	パーセント解答
ほぼ毎日アクセスした	50%
週に二、三度はアクセスした	16.667%
週に一度はアクセスした	33.333%
月に一度はアクセスした	0%
ほとんどアクセスしなかった	0%
未解答	0%

### 問題2 多肢選択

LMSの利便性について

Blackboardは、使いやすかったですか？ あてはまるものを選んでください。

解答	パーセント解答
使いやすかった	33.333%
使いにくかった	16.667%
特に感じなかった	50%
未解答	0%

### 問題3 複数解答

LMSの使いやすさ

Blackboardの使いやすかったところは何ですか？ あてはまるものをいくつでも選んでください。

解答	パーセント解答
ログイン	66.667%
コースの選択	50%
連絡事項	50%
教員プロフィール	16.667%
シラバス	33.333%
コース文書	50%
掲示板	0%
課題	33.333%
アンケート	33.333%
その他	0%

### 問題4 エッセイ

LMSの使いやすさ(具体的に)

上の項目で「その他」と答えた人は、その内容を具体的に書いてください。

未解答応答

6

指定解答

**問題5 複数解答**

LMSの使いにくさ

Blackboardの使いにくかったところは何ですか？ あてはまるものをいくつでも選んでください。

解答

パーセント解答

ログイン

0%

コースの選択

0%

連絡事項

16.667%

教員プロフィール

0%

シラバス

0%

授業コンテンツ

33.333%

掲示板

50%

課題

16.667%

アンケート

16.667%

その他

16.667%

**問題6 エッセイ**

LMSの使いにくさ(具体的に)

上の項目で「その他」と答えた人は、その内容を具体的に書いてください。

未解答応答

5

指定解答

大学プロクシを使っていると、コンテンツのアップロードができないところ。

**問題7 選択問題**

VOD録画の提供

1つ以上の授業において、Blackboard上で、ビデオ・オン・デマンド方式の授業録画を提供していましたか？

解答

パーセント解答

はい

16.667%

いいえ

83.333%

未解答

0%

**問題8 多肢選択**

VOD録画の利便性

上の項目で「はい」を選んだ方に聞きます。

その授業におけるVOD録画の提供の方法は、利用しやすかったとお考えですか？

解答

パーセント解答

利用しやすかった

16.667%

利用しにくかった

0%

特に感じなかった

0%

利用しなかった

16.667%

未解答

66.667%

**問題9 エッセイ**

VOD録画の利便性(具体的に)

VOD録画の良いところ、悪いところを、具体的に書いてください。

未解答応答

5

指定解答

- BlackboardとConnect Enterprise Serverとのリンクは、非常にスムーズであり、支障を感じなかった。

問題10 選択問題

ファイルダウンロード

この授業では、Blackboard上で、資料・スライドなどのダウンロードファイルを提供していましたか？

解答	パーセント解答
はい	100%
いいえ	0%
未解答	0%

問題11 多肢選択

ファイルダウンロードの利用

上の項目で「はい」と答えた方に聞きます。

提供されているファイルダウンロードを、学生はよく利用したとお考えですか？ あてはまるものを選んでください。

解答	パーセント解答
頻繁に利用した	50%
たまに利用した	33.333%
あまり利用しなかった	16.667%
利用しなかった	0%
分からない	0%
未解答	0%

問題12 エッセイ

LMSと授業内容との関連づけ

LMSを利用するにあたって、LMSと授業内容とを関連づけるために、どのような工夫をなさいましたか？ 自由にお書きください。

未解答応答

2

指定解答

1)利用してもらうため、及び安全上、初期パスワードを変更してもらうため、各科目で「ログイン・テスト」1問を提供して「正解者は3点与える」ことにした。「掲示板」も設定したが、管理者(教員)には匿名でないためほとんど利用されなかった。2)教養セミナーでは毎回の報告者にレジュメを提出させ、pdf化したファイルを「講義資料」にアップロードし、事前に閲覧できるようにしたが、報告者、司会者以外は最初の2、3回以外はダウンロードしていない(当日印刷物を配布しているためだろうが、事前に目を通すという勉強意欲を高められなかった)。「アンケート」を用いて毎週の報告要旨、報告、司会の3点を評価してもらうようにしたが、最初からあまり利用されなかった(昨年は質問票に筆記させて回収したが、LMSにはアクセスや回答に関し強制力が働かない点が難点か)。3)講義科目では2回の小テストの素点、得点、期末テストの素点、最終単位認定を成績表に転送し、my成績表で確認できるようにした。また、小テスト、総合成績の優秀者氏名を連絡事項で掲示した。4)専門演習は元々少人数で連絡が密であるため前期は利用する必要を感じず、実際利用しなかった。後期はレジュメ配布や宿題(調べ毎)の回答に利用したい。

200人をこえる授業だったので、配布資料の準備は物理的に不可能に近い状態だったが、LMSのおかげで、最小限の労力で資料の配布ができた。

1. 授業の感想レポートを、これまでは時間内や宿題にして書かせていたが、すべてLMSから出題し、提出や解答の作業を省力化することができた。
2. 対面授業では質問の時間も取ったが、LMSの掲示板を利用することができ、日常的に質問を受けつけることができた。

演習問題と解答例は講義後に公開して、学生の復習に使ってもらいました。

### 問題13 エッセイ

#### 総合意見

LMS利用授業として授業を実施した体験に即し、LMSやLMS利用授業に対して、総合的なご意見を自由に記入してください。

ご協力ありがとうございます！！

未解答応答

0

指定解答

- LMSを真に活用するためには、学生が授業中にリアルタイムでアクセスできることが必要だろう。たとえば、ミニッツカードの代わりに各回の授業の感想を記入させるとしたら、授業終了後にマルチメディア室等に行って書き込ませるのはかなり難しいだろう。今学期は、コンピュータ実習室でおこなう教養教育の「情報処理」と、ふつうの教室でおこなう専門科目の2つでLMSを利用したが、前者が教材のダウンロードや課題の提出などでLMSをフル活用できたのに対し、後者は実際にはあまり利用されなかった。
- 学生が授業時間中にLMSにアクセスできるようにするために、すべての教室で学生が自分のノートパソコンをインターネットに接続できる環境(無線LAN+電源コンセント)を整備することが望ましいと思われる。

受講生や配布資料が多い講義については、資料配布が円滑に行え、効率的である。なお、学生の中にはLMSの利用方法がなかなか理解できない者も見受けられたので、学生用の利用マニュアルの一層の整備が必要であろう。

数学の授業なので、直接LMSを使って講義するのはちょっと無理がありますが、講義の補助としてLMSを使うと、演習問題とその解答等で学生の勉強に大役に立ったと思います。ほとんどの学生も無難に使っています。1人、2人ぐらいが心理的に抵抗していたようですが、それは、受講している教養科目の中にこの科目だけがLMSを使ったようです。LMSを一般の教養科目で広く使ってもらいと、解消できると思います。

履修登録の都合というのはわかるが、使用開始時期が遅すぎる。4月の初回の講義までに、1年生全員にアカウントを配付するなど、思い切った方がよい。新生生の感度はゴールデンウィークまでは高いので、初めの1~2回の講義までに、授業のやり方を確立できた方がよい。

- LMSは、教養教育の授業のように、学生数が多かったり、複数の学部や大学から学生が受講して、学生の顔や名前前の特定が難しく、日常的に会って連絡することのできない授業では、抜群の教育効果を発揮する。LMSを利用した双方向的コミュニケーションの効果は高いと思われる。
- ただし、複数の授業で、フルにLMSを活用すると、労力の点でかなりむずかしいとも言える。専門教育の対面授業や、演習科目などの場合は、掲示板と課題程度の使い方でよいと思われる。
- 学生によるLMSの評価も概して良かったように思う。もっとLMS利用授業が普及すれば、いろいろな改善点も見えてきて、全体としての利便性も向上するものと思われる。

1)成績表のダウンロード、アップロードに関しマニュアルと実際の手順が異なり、かなり手こずった。現状では氏名とID番号が同一欄になっており、ID番号を抽出し、手持ちのExcelシートと照合するには特殊な関数を用いるなど、かなり専門的な知識を要するので改善して欲しい。2)小テスト(1回20点×2回)をオンライン上の実施することも考えた(そうすればオンライン上で集計するので上記アップロードの必要性もない)が、「なりすまし」を防げないので実行に移せなかった。それほど厳密な公平性を要さず配点も小さい確認テストなら後期から利用できるかなと思っている。3)学生の利用がそれほど進まないのはメリットが少ない(講義資料は著作権上アップできない、ゼミのレジュメは当日印刷物が配布される)こともあるが、学生によっては自宅・マンションにネット環境が整っていないからのようでもある。「連絡事項」「掲示板」「my成績表」は携帯のi-modeから閲覧できるようにすれば、利用が進むと思われる。4)こうした書込み欄は改行するためにhtmlモードにして<BR>を記入する必要があるなど使い勝手が悪い。改善して欲しい。

OK



ラウンドテーブル3：授業支援システム（LMS）の教育効果  
金井 雅之（地域教育文化学部）

配付資料

## BLACKBOARDを有効 に活用するための 授業方法や環境条件

地域教育文化学部 金井雅之

第9回山形大学教養教育ワークショップ  
ラウンドテーブル3「授業支援システム（LMS）の教育効果」  
2007年8月9日

## 高等教育におけるEラーニング

- ◎ 米国では2000年頃から盛んに
  - 有職の社会人が、遠隔教育によって資格やスキルの取得を目指すための、営利目的の大学
- ◎ 日本の大学でeラーニングを導入する目的
  - 減少している18歳人口だけでなく、社会人を対象とする教育を可能にする(向後 2004)
    - ⇒ 経営の安定、社会貢献
  - 学生の自主的な学習を促進するために、自宅ないし授業時間外の学習を促し、サポートする(島井 2005)

## Eラーニングにおける教育内容の 変化（岡本・小松・香山 2004）

客観主義

知識やスキルの伝達

↓

構成主義

探究・発見型教育

↓

社会構成主義

コミュニケーションによって自らを成長させる学習

## BLACKBOARDの効果（島井 2005）

- ◎ 知識やスキルの伝達
  - 少人数教育でコストに見合うかどうかは今後の課題だが、ある程度の成果は期待できる
- ◎ 探究・発見型教育
  - 少人数で対面の教育が十分な時間をとっておこなれていれば、あえてeラーニングという形で情報交換をおこなうニーズはない
- ◎ コミュニケーションによって自らを成長させる学習
  - 教員の協力や学生のリテラシー、公開の場面での議論を避ける日本文化の特質などが大きな障碍となる

## 今学期のBLACKBOARD利用授業

	「情報処理」	「情報と社会生活」
科目の位置づけ	教養教育、必修	専門科目、学科共通、選択
対象者	生活総合学科1年	生活総合学科2年
開講曜限	月曜3・4校時	木曜3・4校時
履修登録者数	40名	42名
教室設備	1人1台ネット接続PCあり	学生は電源やネット接続環境なし
授業の特徴	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆エクセルやプログラミングの実習</li> <li>◆毎回課題出題(2週間後提出)</li> <li>◆出席確認を兼ねて毎回感想記入(Blackboardで)</li> <li>◆TA,実習補助員各1名</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆3～5名のグループ学習</li> <li>◆授業時間中の作業(KJ法)</li> <li>◆それを踏まえたレポート提出(毎回、2週間後)</li> <li>◆PowerPointによる発表(学期中2回)</li> <li>◆毎回感想-コメントやり取り(チャットカードで)</li> </ul>

## 「情報処理」での主な利用場面

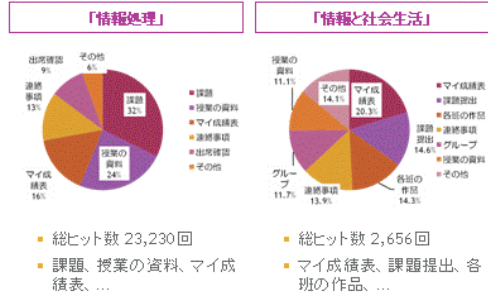
- ① その日の授業資料の閲覧・ダウンロード  
授業中の作業手順説明、作業で使うデータファイル
- ② 出席確認コメント  
授業終了30分前～15分後の間のみ記入可
- ③ 課題の出題・提出  
オンラインで出題、ファイル応答で解答提出。  
2週間後の授業開始時刻が提出期限なので、事実上授業中1回は提出できない。
- ④ マイ成績表による点数・コメントのフィードバック  
出席確認でも課題にもすべて個別にコメントをフィードバック
- ⑤ 掲示板(⇒書込1件)

### 「情報と社会生活」での主な利用場面

- ① グループ学習レポートの提出  
各班の代表者担当、2週間後の授業開始時刻が期限
- ② マイ成績表によるレポートや発表の点数・コメントのフィードバック  
コメントはレポートについて代表者のみに記入
- ③ 各班のレポートや発表スライドの公開
- ④ 各班ごとに専用のグループページ
  - グループ掲示板(⇒ 書込1グループの2件のみ)
  - ファイル交換(⇒ 利用1グループの4ファイルのみ)
  - コラボレーション(⇒ 利用なし)
  - Eメールの送信(⇒ 利用なし)
- ⑤ 全体掲示板(⇒書込0件)
- ⑥ 授業の参考資料  
論文のコピー等

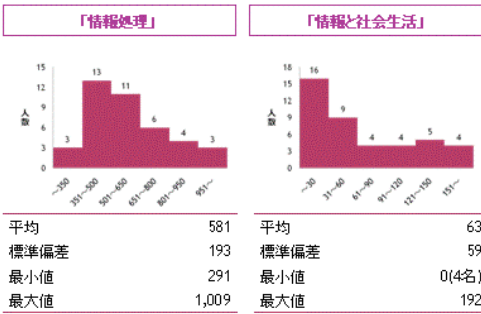
7

### 項目別アクセス状況



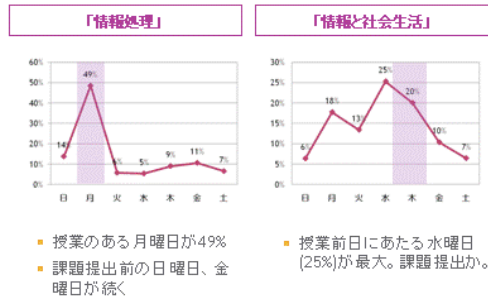
8

### 個人別アクセス回数



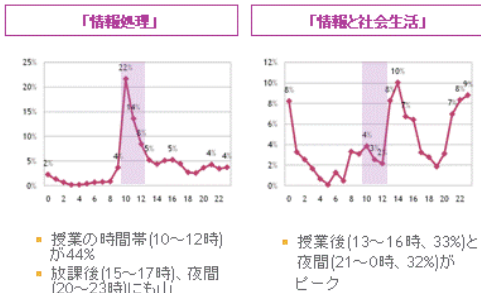
9

### 曜日別アクセス状況



10

### 時刻別アクセス状況



11

### 2つの授業の比較

	「情報処理」	「情報と社会生活」
授業形態	◆コンピュータの個人実習 ◆個人での課題作成・提出	◆グループ学習 ◆グループでの課題作成・提出
授業目的	◆知識やスキルの伝達	◆探求・発見型教育 ◆コミュニケーションによって自らを成長させる学習
教室環境	Blackboard アクセス可	Blackboard アクセス不可
アクセス数	23,230 回	2,656 回
おもな利用コンテンツ	課題、授業資料、成績表	成績表、課題、グループ作品
アクセス日時	授業中、放課後、夜間	授業後、夜間

12

### 「情報処理」の検証 (1)

- ◎ 知識やスキルの伝達が目標。特に授業時間外の反復演習が重要
  - いつでもどこでもアクセスできることに対する肯定的評価(LMSアンケート自由回答)
  - オンラインですべてが完結する効率的な教育方法
- ◎ 特に教員の負担は大幅に軽減
  - 出席確認へのオンラインでのコメント記入(手書きのシヤトルカードに比べて2/3程度の時間)
  - オンラインでの課題の採点、フィードバック(電子メールの頃はフィードバックは断念)

13

### 「情報処理」の検証 (2)

- ◎ 授業時間中に教員も学生もBlackboardにアクセスできたことが重要
  - 出席確認コメントは授業時間中でないと無意味
- ◎ 自宅でインターネットにPCで接続できる環境が整っていない学生にとっては不便
  - 連絡事項の周知方法等に改善の余地あり(LMSアンケート自由回答)

14

### 「情報と社会生活」の検証 (1)

- ◎ 探究・発見・コミュニケーション(コラボレーション)が教育目標
  - 授業時間中や時間外での対面型コミュニケーションを重視
  - 頻繁に対面できる環境下では、あえてBlackboardを利用するインセンティブがない
  - 掲示板への書き込みがほとんどなかったことも、島井(2005)の指摘通り

15

### 「情報と社会生活」の検証 (2)

- ◎ 授業時間中にBlackboardにアクセスできなかったことも難点
  - 実際にBlackboardを使わざるを得ない機会が全員には存在しなかった(4人がアクセスなし)
  - 操作イメージが得られないので、興味もわかない
  - 調べ学習を併用するグループ学習において、コラボレーション作業中にインターネットに接続できない環境制約は大きな障害

16

### BLACKBOARDを有効に活用するための提言

- ◎ 授業目標のどの部分を達成するためにBlackboardを利用するのかを明確に
  - 教員の負担、学生の教育効果
- ◎ 学生がより多くBlackboardにアクセスしたくなるような工夫
  - 全体(連絡事項)や個人(成績評価やコメント)への教員からの情報提供をこまめに
- ◎ 教室の情報環境の整備
  - 教員がネットに接続できるようにするのは当然
  - 学生も自分のノートパソコンを持参すればネット接続できるのが望ましい(個人認証つき無線LAN、机に電源コンセント)
- ◎ 携帯からのBlackboardへのアクセス
  - 大学生の日常的なネットアクセス手段はPCではなく携帯

17

### 文献

- 向後千春, 2004, 「大学におけるeラーニング課程のコスト分析——早稲田大学人間科学部におけるケーススタディ」『日本教育工学会研究報告集』JSET04-4: 35-40.
- 島井哲志, 2005, 「大学教育におけるeラーニングの可能性と問題点」『論集』(神戸女学院大学) 52(1): 71-82.
- 岡本敏雄, 小松秀圀, 香山瑞恵編著, 2004, 『eラーニングの理論と実際——システム技術から、教え・学び、ビジネスとの統合まで』丸善.

18

## 情報処理 Information Processing

担当教員：金井 雅之(KANAI Masayuki)

担当教員の所属：地域教育文化学部生活総合学科生活情報システムコース

開講学年：1年,2年,3年,4年 開講学期：前期 単位数：2 開講形態：演習

### 【授業概要】

#### ・テーマ

情報リテラシの習得とExcelによる情報処理入門

#### ・ねらい

現在社会においては、情報を扱う能力は読み書き能力に匹敵するほどの必要不可欠な能力となりつつあります。ここでいう情報を扱う能力とは、単にパソコンやインターネットが操作できるだけでなく、それを使って知的な生産活動（情報の収集・分析・発信）ができることを意味します。この授業では、新学習指導要領の施行により、履修者はパソコンの基本操作や情報倫理等については高等学校である程度習得してきているという前提に立ったうえで、コンピュータを使ってどのような学術的な分析が可能であるかを、表計算ソフトウェアExcelの操作を通じて学んでいきます。

#### ・目標

☆ 山形大学情報処理教育専門委員会で定められた情報リテラシを確実に身につけること。

☆ Excelの操作を通じ、コンピュータによる学術的分析能力を身につけること。

#### ・キーワード

情報リテラシ、学術的分析能力

### 【授業計画】

#### ・授業の方法

テキストに依拠しつつ、実習を中心に授業を進めていきます。毎回課題を出題します。

#### ・日程

つぎに挙げるテーマを順にとりあげていきます。

- 1 山形大学の情報処理環境、パソコンの基本操作
- 2 電子メール、インターネットによる情報検索
- 3 Wordによる文書の作成
- 4 Excelの基本操作（2回分）
- 5 計量分析の基本（3回分）
- 6 データベースの作成と利用
- 7 システム最適化
- 8 マクロとVBA（2回分）
- 9 モンテカルロシミュレーション（2回分）

### 【学習の方法】

#### ・受講のあり方

実習科目なので、出席を重視します。

パソコンの操作に不安のある人は、基本的操作法を確実に習得することを目指してください。ある回の授業で説明したことが後の回の授業での前提となることが多いので、必要に応じて授業時間外に自習するなどして次回までに完全に理解しておいてください。

#### ・予習のあり方

テキストの該当部分に必ず目を通してきてください。

#### ・復習のあり方

授業で取り上げたことを確実に習得するために、テキスト等を見なくても一連の操作ができるようになるまで、繰り返し操作をしてみてください。授業時間以外でも、マルチメディア室を自習用に利用することができます。

### 【成績評価の方法】

#### ・成績評価基準

授業の二つの目標を達成していること。

#### ・方法

毎回出題する課題（提出期限は2週間後の授業時）によって評価します。

なお、毎回授業終了後にコメントカードを提出してもらうことにより出席をとります。出席時数が10回に満たない場合は、課題の点数に関わらず成績評価を「F」とします。

### 【テキスト】

☆ 情報処理教育専門委員会編、2007、『情報処理テキスト—2007—』情報処理教育専門委員会。

☆ 浅利一郎他、2004、『はじめよう 経済学のための情報処理（改訂版）—Excelによるデータ処理とシミュレーション—』日本評論社。

### 【その他】

#### ・履修に当たっての留意点

テキストは2冊とも必ず購入してください。

#### ・オフィス・アワー

木曜日 12:00～13:00

#### ・担当教員の専門分野

数理社会学、意思決定理論



# 「情報処理」LMS アンケート

## 自由回答より

### BLACKBOARD の使いやすかったところ

- 家で連絡事項が見られてとても便利でした。
- 自宅でもアクセスできる。
- 課題提出の前に「保存」があるので、どのように表示されるのか確認できるところ。
- 家のノートパソコンはメールを送れなかったが、ブラックボードだと送れたから。

### BLACKBOARD の使いにくかったところ

- 最初私はインターネットにつないでいなかったなので、学校でしかアクセスできなかった。インターネットの設備が整っていない人にとっては不便だと思う。
- 家で、頻繁にアクセスできるような環境ではないので、連絡事項が出されていたりすると困る。
- インターネットで検索しても出てこないところ。
- はじめどのように課題を提出すれば良いかわからなかった。

### 総合意見

- ネットワークを通じて家でも授業内容を見ることができてよかった。
- オンラインでの授業が初めてだったので、家でも簡単に開くことができてとても便利だと感じた。
- 課題が家からでも提出できるのがとても便利でした。
- パソコンがあればどこでも見られて便利です
- 課題や成績表など見たいときに見られて便利だった。



- 最初の慣れないうちは戸惑ったけれど、慣れればとても便利でわかりやすかったです。
- 高校では課題をパソコンで提出することなんてなかったので、利用するのがとてもおもしろかったです。
- 情報の授業として、こういったオンライン形式でのものを使用する、というのはいいことだと思う。皆が同じ画面を一度に見ていられるし、さまざまな手間も省けると感じた。
- 授業をインターネット上で進める事を目的としているならば、LMSをもっと活用していくべきだと思う。
- 家にネット環境がないと厳しいと思いました、携帯でもアクセスできるような環境ができればよりよくなると思います。
- パソコンを頻繁に使える環境にある人にとっては大変に便利なものであったが、そうでない人にとっては重要な連絡事項も突然出されるので、大学の掲示板との併用を土台に考えた情報提供が必要だと思う。
- 連絡事項のページが日にちごじょごじょでならべられていたりしたので、もっとみやすくしてほしい。
- 因みに授業とは直接関係ないが、課題提出の際に、時間のずれや環境などで、送信先との差があって正常に行われないことがあったという場面があった。その面については、改良等の余地があると思う。

## ラウンドテーブル3：授業支援システム（LMS）の教育効果

伊藤 壮志（東北芸術工科大学）

配付資料

### 授業支援システムの現状と可能性 「NETBUS+」の例

2007/08/06 教務課 伊藤壮志

#### ■ 導入の経緯

- オフコン ICATS
- サーバ/クライアント SOLICIA
- SOLICIA WEB
  - ◇ 履修登録・成績登録・成績照会
  - ◇ 2000年導入(全国初)

#### ■ システムの構成

- ポータル
  - ◇ WEBメール・お知らせ・スケジュール・アンケート
- 入試（募集から入学手続きまで）
- 学籍
  - ◇ 学生情報や学籍異動管理の他、学生自身による学生住所変更
- 教務
  - ◇ カリキュラム、時間割設定
  - ◇ 学生の履修申請と時間割確認、教員の名簿作成や授業担当確認
  - ◇ 教員の成績登録と学生の成績照会、単位認定など
- 学生カルテ
  - ◇ 基本情報・保証人・学歴・職歴
  - ◇ 履修科目・単位修得状況・成績
  - ◇ 資格・就職状況・奨学金・保健・サークル活動
  - ◇ コメント(閲覧権限の範囲は設定可能)
  - ◇ 権限の仕組み：職員(メニュー)、教員(メニューと学生範囲)
- 授業支援
  - ◇ 履修者確認とお知らせ
  - ◇ 課題提示/提出、小テスト作成/回答、アンケート作成/回答、意見交換
  - ◇ 意見交換
- 教室・施設管理(教室、会議室、機材、何でも) 管理者・予約者権限設定可能
- 就職支援
- 奨学金
- 保健
- 校友会

#### ■ 今後の展開

- ユーザーインタフェースをより分かりやすく(次世代システムに向けて)
- 授業支援のEラーニング機能をもっと活用していただく(ファイル提出の修正)
- 事務局の場合、グループ予定や施設・備品管理の利活用
- 事務局内の各種データベースとの統合(Accessで)

## 第3部 全体会

「21世紀型教養教育を問う」  
(各ラウンドテーブルの報告)

司会(元木) それでは時間になりましたので第3部全体会「21世紀型教養教育を問う」を始めたいと思います。第3部の司会は高等教育研究企画センターの元木でございます。



それではラウンドテーブル 1,2,3 の議論の報告をいただきまして、それに対する質疑応答という形で、最後にまとめ、それで果たして21世紀型教養教育の回答が出てくるかどうかかわかりませんが、問うですからいいのだと思います。そのような形で進めたいというふうに思います。それではラウンドテーブル 1, FD の義務化と個別支援 FD について杉原先生からお願いします



杉原 杉原です。よろしくお願ひします。私どもはラウンドテーブル 1 ということでFDの義務化と個別支援FDについての議論を行ないました。お手元に資料があると思いますのでそちらを参考に説明したいと思います。

まず話題提供の方で私のほうからFDの義務化の背景といますか、時代的な背景と今後の流れについて説明をいたしまして、21世紀型教養教育というのが本ワークショップのテーマでありますので、それを可能にする教育力の向

上を目指すFDについて、現在私ども山形大学で行なわれているFDの紹介をその後いたしました。それと授業改善の、事例報告を後ほど行ないました。

資料に基づいて説明いたしますと、まず、現在本学で行なわれているFDのお取り組みの中では、いろいろな話をいたしました。まず教育方法、FD というのは広い概念ですので、今回は教育方法に重点を置いてFDというのを定義させていただきました。そしてFDというの個人的な取り組みではなくて組織的な取り組みであるという話もさせていただきました。

そしてここは次の総合大学としての教育環境、人的資源の活用だとか、幅広い教養教育の展開といったものは、本ワークショップのテーマであります。21世紀型の教養教育というところに通じていくものと位置づけて、ここらあたりを、実現化させていくFDのあり方ということで考えていったわけです。

そこで本学では相互研鑽型のFDということで行なっておりまして、このワークショップ、そして昨日まで行っていました合宿セミナー、そして授業改善アンケート。そして公開授業と検討会、後は報告書や冊子、ホームページでの掲載等を含めましてトータルにFDを進めてまいったんですけれども、それを発展させまして地域ネットワークFDということで樹氷という取り組みを16年度より行なっております。この紹介をしましてその後今年度、平成19年度より始めました個別支援型FDについての説明をいたしました。

個別支援型FDはざっと申し上げますと、問診表、ミニ公開授業と検討会、ミニ授業改善アンケート、受講生とのFD懇談会等、いくつものプログラムがありまして、それをうまく組み合わせながら、個別の丁寧な、重点を置いたケアを、その教員のご事情とか、ニーズに合わせてやっていく。そういうFDを行なっていますという報告をいたしました。

そして実際今求められている、今日の午前中の講演会にもありましたアウトカムズ、成果といったものをどのように捉えていくのかという話も少しいたしました。現状では、まず授業者の実感です。学びの、学生の学びや態度だとかモチベーションが少し変わったというような実感だとか、あと授業改善アンケートの結果、ミニ授業改善アンケートというのを実施しているんですけれども、その中でデータが向上している例とか、学生と教員が話し合う場を設けているんですけれども、そういった場でも学生の方からこういうふうな、例えば授業改善の例で言いますとマイクを授業中にこう回して、学生に意見を聞くといったことが非常に、自分の意見も言えるしほかの学生の意見も聞けるし非常にいいという反応が返ってくる。そういったこう反応とかで成果があがったことが実感できています。そういったことが話題になりました。

次に2番目ですけれども、遠隔FDを主とした個別支援型FDの実践についてということで、大島武先生の、パネリストの方からご報告がありました。今回はこの個別支援型FDは授業クリニックという名前も持っているんですけれども、東京の先生でありますので、毎週来ていただくのは大変ということでこちらからビデオを撮って送りまして、それを元に、ビデオを見て授業に対するコメントをするという、こういう遠

隔のFDの可能性についても半年研究してきましたので、その成果を報告いただいたということになります。

ここで、この上からで言いますと4つ目の点になりますが、個別の先生、それぞれ先生方の利益を個別の事例に落とし込むということです。あとは課題としましては、この取り組みはまだ慣れていない部分、練れていない部分があるので、改善していく必要というのが当然あります。というふうなご指摘がありました。

そして次の話題提供3としまして、実際今、司会を担当されております元木先生が、この春半年間、授業担当者として個別支援のFDを受けていただいた方ですが、体験された当事者の方からの経験の報告をしていただきました。クリニックシートということで、先ほど遠隔のFDの話でしたが、遠隔の場合ですと対面でこの授業こうだったねとか、ここはこうした方がいいんじゃないかなっていうのではなくて、こう書面で、文書で来るわけです。そうすると文字ってなかなかこうインパクトが強いので、そこはなかなかつかつたみたいなお話もありまして、このあたりをどうしていくかといったことも今後の課題になるなと感じました。

そして、どのぐらいの、毎回検討会、クリニックシートで反省することの難点とこうありますが、上から4つ目の点ですけども、この半年間実験期間でこの個別のケアのFDをやってきましたが、その頻度です。毎回するこちら側の労力の問題もありますし、実際にいただいている先生方の負担感の問題もありますし、そして効果ですね、実際じゃあどれぐらい成果が上がったのかっていう成果。この3つのバランスをしっかりとこう捉えた上でやっていく必要があるなと、改めてこう感じたということが、この報告会で明らかになったかと思えます。

あと、ここで質問等、質疑応答がありまして、先ほども申しましたが学習成果のこととかも書いてありますのでまたご覧いただければと思います。

そして最後に4番目です。休憩を挟みまして実際の授業改善事例です。大島武先生がプレゼンテーションに関しましての研究者であられますので、その紹介をしていただきまして、またディスカッションを行ないました。1つ目、プレゼンターの気持ちでという要素の要点だとか、2つ目、授業の組み立て、構造化ってことポイント。そして3つ目、表現技術の工夫。そういった大きな枠組みの中でプレゼンテーションというその技術を授業にどう生かしていくのかっていう話をさせていただきました。以上です。

**司会** ありがとうございます。各テーブルごとに質疑応答をしたほうが臨場感があっていいのでしょうかけれども、実を言うとひょっとしたら報告が長くなってしまいう可能性もありますので、まずとにかく3人のラウンドテーブルの代表の方に全体の報告をしていただいてから、このラウンドテーブルいくつへの質問ですがという形で会場とのやり取りをしたいと思います。

それではラウンドテーブル2ですが、外国語教育センターの設置と外国語教育の充実ということで、佐々木教授お願いいたします。



**佐々木** 山形大学地域教育文化学部の英語を担当しています佐々木と申します。学会出張が8月2から5日まででありまして、そのあとに、FDで蔵王に登りまして、雷の中大変いい勉強をしてきて、そのあとこれということで、特に8月の5日以降は、ずっとFDをやっているなという感じがします。

それもこれも突然小田先生が研究室に駆け込んできて、外国語教育センターも発足したし、ぜひ外国語教育のあり方についてのテーブルを何とか立ち上げてやってもらいたいという要請がありました。

確かに、山形大学としましては、外国語教育センターができたこと自体非常に大きな変化でありますし、さらに英語教育、そして初修外国語に関しても、新たなスタートをしているということもありますので、そのPRもする必要があります。またはそしてまだ始まって半期しかたっていないわけです。そういう意味でこれからの、いろいろな全体のデザインを、修正しつつより良いものにしていくためにいろいろなご意見を賜りたいということも私自身ありましたので、引き受けさせていただいてまいります。

コーディネーターは私ですが、私から外国語教育センター、山形大学の外国語教育センターの概要とそれから英語教育に関して現状、課題、今後の取り組みということについてまずお話をいたしました。そのあとにパネリストの人文文学部のフランス語担当の阿部宏慈先生から、外国語教育センターとこれからの初修外国語教育ということで、初修外国語教育に関する取り組み、または現状とその課題とこれからの取り組みということでお話をいただきました。そのあとで人文文学部の英語担当の池田光則先生から、京都大学の高等教育研究開発推進センター、毎年のように、英語教育に関しましてFDの発信をしている公開研究会がございまして、それに、今年池田先生に参加していただきました。その推進センターの、研究会の話の内容を、報告していただきまして、山形大学における、または参加していただきました大学機関におけます外国語教育、そして英語教育の今後を考える上で、プラスになるようなお話しということでお話をさせていただきました。

それぞれについて簡単に話の内容をご説明いたします。まず、私の方から外国語教育センターの設置目的、それからセンターの組織、センターの現状と課題と今後の取り組みということで、特に外国語センターの、現状と課題と今後の取り組みのことについてお話を申し上げました。

外国語教育センターの建物も実際ないわけで、また独自



の予算化もまだできていない。また事務のサポートもほかの、業務にプラスした形でこちらからお願いするというような形になっている。いわばバーチャルセンターが現状であるというご報告をさせていただきました。今後、いかに脱バーチャル化をはかっていくかということがきわめてやはり重要であると。最後の前ですけれども、学生が、センターという存在を知っていないということはやはり問題だと思います。それでセンターということを知って、スタッフが相談日にいられるような体制が組めて、いろいろな教材とかなどが置いてあって気軽に出入りできるというような、英語だけじゃなくて、初修外国語に関してもそのような交流が学生とともにできることがやはり今後の取り組みとして必要なのではないかとということをお話させていただきました。



それから2番目のCALL関係の環境としましては、現在は教室内に限ってアクセスできる。つまり教室内のシステムを教室内のPCからアクセスしてそれで動かして使っているということ。これは大学の方で既に動いていただいていたことで、そのシステムの一元化をはかるということで、9月中には、学内LANで結ばれている端末からはすべて同じ、バージョンアップしたシステムで、CALLの演習ができるようになります。

そして今後の取り組みとしては、是非アパートからでも、アクセスできて、いつでも自分の、空いた時間に、アクセスでき、一日30分以上くらの、勉強がコンスタントにできるような形にしていければというふうに、学外からのアクセスというのを許すCALL環境というのが必要ではないかとということで、今後の取り組みとして書かせていただいております。

それから韓国語に関しましては初修外国語枠での開講ということに関連しまして、教室自体が、皆さんもうお気づきだと思いますけれども、教養教育の教室がどんどんどんどん、少なくなってきたという経緯があるわけです。英語も少人数化になりましたし、教室が必要だという逆な方向での動きがあります。それで韓国語も、初修外国語の枠で開講するというまた動きがあるということで、教室が、不足しているという現状がございます。これに対してやはり何らかの検討が必要であるということです。

それから専任教員の採用の推進ということで、我々も、または事務当局も、事務が純増しているということで、是非、定員を確保するというようになっておりますので、それを、もっと前倒して、採用していただきまして事務量の軽減化、さらにCALLとe-learningを、その組織的な導入の活用ということで取り組んでいく必要があるのではないかと。ここだ

け詳しく今説明しているところです。

あとは、4番目からは、現在の英語の新たな取り組みということでここに掲げているような習熟度別クラス、少人数クラス、それから次のページにいけますが、センターの特別非常勤講師の導入、外部試験の実施、再履修生クラスというのを、特別のクラスとして選択制の保持をしながら新設したということについて、新たな取り組みとして紹介させていただきました。

現状と問題点として、クラス分けの問題点が存在するんだと。クラス分けを、センター試験のテストの結果等に基づいて行なったわけですが、推薦入試入学の1年生が、345人もいます。その345人を、プレイメントなしで一番多くクラスを確保していたクラス分けの中級レベルの英語Ⅱというところに今回は自動的に配置させていただきました。しかし、そのやり方は、実際はレベルが違うだろうということが一つあります。潜在的に。それからⅡのクラスが非常に膨れてしまったと。非常にというほど膨れてないですけれども、数名、こちらの計画した規模から少し多くなってしまったということがありまして、やはり何らかの独自のプレイメントはこれらの人たちに必要だろうというのが課題として生じています。

それから、TOEIC-IPを実施したわけです。実施率が99.9パーセント。受験率は、99.9パーセントです。こちらの小白川キャンパスと米沢キャンパスの、Bコースの1年生、対象は全1年生です。1年生ですけれどもすべてあわせて1743名が受験しまして、欠席は25名で、受験率が99.9パーセントというふうになりました。

2番目に関しましてはこのような形で、2,3,4,5,6というふうに、TOEIC-IPテストをする時にアンケートをこちらで自由に、作ることができまして、それをマークシートで、1743名に対して答えさせて、TOEIC-IPの本部の方が集計してくれる。これは非常に便利です。利用しないとダメだということで利用させてもらったわけです。小白川キャンパスとそれから米沢のBコースでは若干調べる内容が違いますので異なっていますけれども、このような、全体的なところはここに載せさせてもらっています。

2番目は勉強時間です。やっぱり勉強時間1日とっていないということがわかるということをお知らせさせていただきました。3番目に関しましては、CALLラボが実際にあまり、知っているけれども使っていないという状況。それから4番目に関しましては大学の外からアクセスするとやはりいいなという、是非その方向に進めてもらいたいということもありまして、この項目に選ばせてもらいました。5番目は、習熟度別クラスの対する反応を是非見たいと、これに対して不満であるかどうかということ、ここから探りたいということで、クラスのレベル分けはあなたの英語力を伸ばすのに効果がありますかというようなアプローチで今回聞かせてもらいました。それに対してこのような形で、607というのが、これはあまり効果はないだろうと。これはですから37%ぐらいの人があまり効果はないだろうと。それから739というのがおおむね効果があるだろうと。これが大体45%ぐらいということで、大体これが半々、まだ、評価が定まっていないといえますか、半々であ



ることが、習熟度クラスに関してはわかりました。それから6番のことにしましては、クラスサイズを小さくしたということが一つの今回の目玉になっているんですけども、それに関しては概ね、ちょうどよいというふう考えているというのが大体70%超えていると。1203というのが大体換算していくと70%超えているということの結果が得られました。

今後の取り組みに関してこのような形で、いくつか提案させていただいたということになります。これは個人的な提案というよりも英語の、教育部門の会議がありまして、そのワーキングの中でいつも話している内容を、ここにまとめさせてもらったということになります。自学自主的英語学習の環境をさらにもっと整えていく必要があるということ。

それからオフィスアワーは今度導入しました特別非常勤講師の先生は10時間普通の授業をやってもらいまして、週に2時間はオフィスアワーで学生のために活用してくださいと、相談のために。というふうに言っていますけれども、我々専任教員が、どれほどオフィスアワーを活用しているかと。やはりそこに、反省に立って、その活用の仕方について、意識を高めていく必要があるのではないかと、そこでもFDなどを通して、英語教育の中でのFDなどを通して、周知していきたいと。または意識を高めていきたい、いく必要があるのではないかと今後の取り組みです。

それから、主要なところだけいきますが、外部テストの成績の比率について。これは20%という、全体の評価の20%なんです。本当にそれでいいのかということも、検証を引き続きしていく必要があるだろうというふうなことをまとめさせていただきます。そのようなお話をいたしました。

次に阿部宏慈先生のほうから初修外国語教育についてということで、まず基本的なところが、これは英語についてもかなり同じ様なことが言えるわけですけども、ベーシックミニマムということで、初修外国語としてきちっと最低限身に付けるべきことを身に付けさせるという考え方を、さらにプラスアルファということでその付加価値をつけていくといえますか、さらにその発展的なところの力を身につけさせるという考えが必要であるということが話されました。

それからそのプラスアルファな可能性としましては、発展コースというものを、提案しまして、人文学部で開講しているものが他学部の学生さんでそれを履修した場合には、教養の発展的なコースとしての単位の認定を行なうということで、まだ残念ながら人数、履修者はこれは0名と書いていますが、2ページ目のところに、実際はいずれにしても平成19年度の履修者は1名いらっしゃったそうで、阿部先生から0と1名は違うということで、この取り組みをよしとして参加した学生、実習生はいるということで1名の参加で、さらに今後の、広報活動や、専門科目との重複との問題のクリアとか、等々の、予算の問題とか、学部における発展コースの単位の扱い方なども、検討していただく必要があるのではないかとのお話がありました。

それから初修外国語に関しまして、学生さんから、非常に好評だという話が、印象的だと思いますか、なるほどというふうに思われるお話がありました。非常に好評で、それも、実用よりは文化面というモチベーションが高いということ。初

修外国語としましては文化面も含めて、使える外国語というコンセプトも捨てずに、両方を求めていく必要があるのだろうというお話がありました。

さらに英語だけでなく外部の検定への対応を具体的に目標を提示するという意味だと思われませんが、導入をして、CALLの中に、初修外国語のシステムを導入していくという必要性についてお話がありました。

それから初修外国語と外国語センターについての設置までの経緯についてはここでは省略させていただきたいと思います。それからあとは、初修外国語に関しましてというより、外国語センター全体のあり方としまして、スペースをきちっと持って、そこに機材もあって人もいて、語学自習用の教材とか機材とかがあつて、視聴覚教材もそろっていて、ポスター展示などもあつて、国際交流などのタイアップなどもこうできるような、活動ができるスペースが必要ではないかというご提案がありました。



次に、パネリストは池田光則先生に移りまして、京都大学でのFDの模様の紹介がありました。1つは、自立学習型CALLの導入ということで、対面式ではなくて、コンピュータで学習できるようなシステムを構築したということがございます。CD-ROMの教材を、配布し、それについて小テストをしたり、さらに、その記録、ログを見て、学習時間に基づいて判定を加えるということで、これで逆に対面指導のクラスのサイズが小さくすることができたというお話がありました。

それから京都大学での英語教育の、目的に関しても、特定学術目的というのと一般学術目的というふうな二つに分けて、取り組んでいるというお話がありました。

それから英語教育を担当する人材に、英文学出身の人が全国的に多いけども、または英語学、僕は英語学なんですけれども、わずかで、そしてもっと英語教育学者はもっと少ないということで、もっと、英語教育学者を多くする必要があるのではないかとというようなことが話されたということが報告されました。それから合意形成のあり方についてもお話がありました。

全体としましては、一つは2年生以上の英語教育のあり方ということ、1年生のプログラムは今回TOICEの導入や云々でかなりしっかりできたといえますが、2年生以上の、これは英語だけではありませんで、初修外国語を含めて2年生以上の外国語を、どのように身につけさせていくかということのデザインを、検討していく必要があるだろうという話いろいろな参加者の中から、出てまいりました。

それから対面授業だけじゃなくて CALL のようなもの、組み合わせうまくバランスのいい、全体の仕掛けをしていく必要があるだろうということが話し合われました。それから特に英語の、教育目標というものをもち、具体化するための検討をもう少し進めるべきではないかというご指摘もございました。以上です。

**司会** ありがとうございます。質問なされたい方たくさんおありでしょうけれども、もうしばらくお待ちいただきまして、ラウンドテーブル3、事業支援システムLMSの教育効果で中村教授、報告をお願いいたします。



**中村** ラウンドテーブル3は授業支援システムLMSの教育効果というテーマで3人のパネリストをお迎えして検討を行ないました。最初に基調報告といたしまして私、コーディネーター中村の方から、LMS利用授業とは何か、山形大学Blackboard元年というテーマで簡単な報告を行ないました。

LMS、ラーニング・マネジメント・システムというのは、授業支援システムとか学習管理システム等と呼ばれます。授業における教員学生間のコミュニケーションツールを一つの統合したWebシステムです。多様な種類が提供されていますが、山形大学ではBlackboardを導入し、今年度前期からすべての教養教育で利用可能な状態になって、普及を促進しているところでございます。

LMSは教員と学生間におけるコミュニケーションツールでありまして、連絡、休講、補講、試験予告、プロフィール提供、シラバス、ホームページURLの公開、コース文書、授業コンテンツの公開、それから課題、レポート、テスト、質問、フィードバック、アンケート、掲示板、コミュニティ機能など、多彩な機能によって教育効果を高めるためのウェブシステムでございます。

このLMS以外にも現在、例えばポータルシステム、これは教育支援の窓口サイトで、スケジュール、時間割、連絡、リンク等を提供するものであり、それからまた学務情報システム、学務に関する情報を管理するシステム。履修管理、成績管理、シラバス管理等のウェブ教育支援サイトが多数提供されております。これらを統合していく傾向に現在はあります。

今回は山形大学Blackboardに関する非常にオリジナル

な利用をされている地域教育文化学部の金井先生のほか、ポータルサイトとしてのNETBUS+を運用されている東北芸術工科大学教務課の伊藤さん、独自のポータルサイト、シラバスシステムから発展したLMS機能も備えたアイアシスタントを開発導入されている岩手大学の江本先生、この3人の方にパネリストになっていただきお話を伺ったわけでございます。

私からの、コーディネーターの基調報告といたしましては、このようなLMSの基本的な事項・利用方法のほか、Blackboardの先進事例として信州大学、岐阜大学、玉川大学等のサイトの、入り口だけですけれども、これをご紹介いたしました。

それからLMSの教育効果として、授業のすべての情報を集積する統合授業支援システムとしてのメリット。授業コンテンツの効率よい提供。さらには双方向性の確保・向上ということで、対面授業でも一般には、大人数の授業では教室でも成立しない学生との間の双方向性の確保向上を掲示板や課題等の機能を用いて緊密に行なっていくことができるというふうな利便性についてお話をしました。

それからまた、もっと作業上の利便性として、レポート出題や回収のWeb化。連絡、質問、回答の省力化。授業のプランニングを実質化するというふうな効率があります。この授業のプランニング、シラバス、予告だけではなくて授業記録も公開していけるということに着目されて、独自のLMSを作られているのが岩手大学でございます。

山形大学では平成19年度前期、28の授業科目、2088名の受講者を出しましたが、この受講者というのは延べではなく実数でございます。複数のコースに登録している学生もでございます。教養教育科目二百数十科目すべてで利用可能になっていますが、教養教育科目では17科目に止まりました。この担当教員にさらに専門教育に関しても募集いたしまして、全体では28ということになりました。教養教育で普及するというこういう目標で出発しているわけですが、普及率は著しく低いということが出来ます。

このBlackboardだけでなく、WebシーティーやあるいはオープンソースLMSといわれるヌードル等の、さまざまなLMSが提供されており、おそらく今後5年以内に中規模程度の大学ではほとんどすべての大学でLMSが普及し一般化することと思われれます。山形大学にも既にシステムは導入されておりまして、今後はとにかく普及を促進し、改善をしていくということが最大の課題になるというふうになると思います。山形大学ではこれを対面授業におけるブレンディッドラーニングの手法として導入するほか、遠隔キャンパスや県内他大学向けの単位互換等の授業、eラーニングにおいても利用し、あるいは海外向けのジャバスタディープログラムでもBlackboardを利用していくというふうな方向性になっております。

このようなことを私から最初にお話しして、続きまして地域教育文化学部の金井雅之先生から、Blackboardを有効に活用するための授業方法や環境条件というテーマでのお話をいただきました。

これは、今年度前期におきまして教養教育の情報処理

及び専門教育の情報と社会生活、この二つの科目で Blackboard を利用されたその結果のご報告でございます。アクセス状況、アクセス回数、曜日別アクセス状況、時刻別等の非常に詳しい解析の結果に基づいて2つの授業の実態を比較され、その結果として最終的には Blackboard をより有効に活用するための提言として、授業目標のどの部分を達成するために Blackboard を利用するのかを明確にするべきであると。あるいは学生がより多く Blackboard にアクセスしたくなるような工夫をするべきである。さらには教室の環境、情報環境の整備を進めるべきであると。金井先生のご意見では、授業中にも Blackboard にアクセスできる環境が、最善であるということでございます。



東北芸術工科大学のようにすべての学生にノート PC を買わせるということを基本にしている大学も増えてきているようすけれども、山形大学はまだそこまでいっておりません。また教室で自由に学内 LAN が使えるという条件にもなっておりません。そういったことを今後改善する必要があるであろうというふうな提言でございます。

さらには携帯からの Blackboard へのアクセスという、これも現在 Blackboard では提供されていないんですけれども、大学生は PC よりも携帯のほうに親近性があるので、携帯でも利用できるような LMS が必要であろうと、こういうふうなご提言でございました。これが金井先生のご報告でございます。

それから、報告の2といたしまして、授業支援システムの現状と可能性というタイトルで、NETBUS+という現在東北芸術工科大学で運用されているポータルサイトの例についてのご報告を東北芸術工科大学教務課の伊藤壮志さんからお願いしました。これは、1999年よりキャンパスモバイルネットワークというプロジェクトで一人1台のノートPCを必ず買わせ、学内では無線LANの環境を整え、常時接続が可能であるような条件を整える。学生数が2200人ということですが、その元でNETBUS+というのは私も非常勤講師として芸工大で使わせていただいていますけれども、全容を知ったのは今日が初めてで、恐るべきシステムですね。ポータルシステムとしてウェブメール、お知らせ、スケジュール、アンケートのほか、入試管理、学籍管理、教務管理、学生カルテ、これは山大でいうとYUサポーターシステムにあたるものです。それから授業支援、ここがLMSにあたるものですが、けれども、教室施設管理、就職支援、奨学金、保健、校友会。要するに情報化されている大学のすべてのデータ

はこのNETBUS+からアクセスできると。これは、おそらく最小の事務スタッフで最大限の効率を上げるというのが、今日は伊藤さんからそういうお話はありませんでしたけれども、たぶん最大のメリットなのではないかと思えます。要するにここにアクセスすれば重要なデータにはすべて手が届くというわけで、もちろんセキュリティ管理等についても厳重になさっているようすけれども。

この中で授業支援に関しては履修者確認、お知らせ、課題提示・提出、小テスト作成・回答、アンケートの作成・回答、意見交換。もちろん得点を与えることもできます。それから意見交換というのは掲示板の機能でございまして、このようなNETBUS+の現状について実演を交えながらお話をうかがったものでございます。

それから最後に報告3といたしましては、岩手大学、大学教育総合センター講師の江本理恵先生から、アイアシスタントの導入と授業改善というテーマでお話をうかがいました。アイアシスタントというのは、大学教育センターにおける組織的授業改善と教室外学習支援システムの構築プロジェクトという概算要求3年間のプロジェクトで推進されているもので、要するに、ポータルサイトを構築することによって全学的な、日常的なFDを進めるというのが趣旨であるということでございます。

多々ご説明がありましたけれども、こういう講演会とかシンポジウム、あるいはセミナー、合宿のようなピンポイント的なイベント的なFDというのは、これは参加者も少なく普及率が少ない。ところがアンケートのようなものは全員参加である。さらには授業ということになれば全教員は当然担当するわけですから、授業に密着したFDを進めるということが必要であろうと。ということでこのアイアシスタントの基盤になっているのはシラバス。というのは、これは公開しておしまいですが、実際にどのようにその授業を行なったのか、シラバスに授業記録を付け加えるという基本機能の上に、それから授業及び教室外学習支援という、いわゆるLMSの拡張機能も与えていく、というふうなモットーで作られているということでございます。

アイアシスタントにも非常に豊富な機能が提供されていて、見かけ上は一つのシステムですが、背景には学務情報システムはその他のさまざまなシステムが統合されているということでございます。山形大学の教職員の方ご存知のように山形大学はシステムが全部ばらばらでございまして、学務情報システム、LMS、それからその他のいろいろなシステム、例えば学情センターのアカウントと、それから教室、こちらの方の学部アカウント、全部別であると。LMSに入るのは別であると。それから予算管理のシステムに入るのは別であると。それから図書館のマイライブラリー別です。数えたことありませんけれどもたぶん10近くの入り口があるんじゃないかと思えます。これを統合するというふうな構想もないわけではないようなんですけれども。NETBUS+は既にそうすし、それからこのアイアシスタントはポータルサイトが見かけ上一つの統合認証システムのような形になっているということです。完全ではないようすけれども。

これは、内容は学務情報を一元管理する個人ポータル。



それから各種の評価に対応できるシラバス。それからシラバスの、大変ユニークなのはポータル、その入り口のところを開きますと時間割が出てきます。学生が授業を登録すると自分では入力しなくてもそこを開くだけで一週間の時間割がぼんと出てくる。それから、一ヶ月のスケジュール表が出てくる。連絡事項が出てくる。教員側はその授業科目をクリックすると授業記録のページへと入っていく。そこで授業記録を入力すると、学生側にフィードバックされるというふうなシステムであります。非常に、動的な、あるいはシームレスな、境界線のないような形でサイトを運営していくことができるという、非常に優れたシステムだろうというふうに思います。

今日は時間もなく、詳しくお話はされませんでしたけれども、シラバス授業記録のほか、コミュニケーションツール、掲示板とか、あるいはグループ作業、あるいはアイカード、課題、レポート、ドリル、アンケートのような双方向的なやり取りのツールも多数提供されているということでございました。今後は全学の基盤として整備し、その上に何を作るのか、FD活動とどう連携させるのかというふうなことが課題である。さらにこれを年間を通して活用するというので、単なるシラバスシステム、つまり年度当初に公開しておしまいであるような従来のシラバスシステムからPDCAサイクルを実施するような形の非常に動的なシラバス、授業記録のシステムへと展開していくというふうなことが課題であるというふうなお話でございました。

以上のようなパネリストの発表のあと、短時間でしたけれどもやり取りが行なわれまして、このようなシステムのよいところはよくわかったけれども、よくないところはどこかというふうなことで、作業量が多くなる、負担感が増えるということであったり、そういうふうな回答が寄せられました。

このLMSを中心とする教育支援のウェブサイトというのは今後も日進月歩で目が離せない領域だろうと思います。何はともあれ現在導入されているシラバスを作ってそれを改善していくということから始めなければ地に足が着いた教育改革になっていかないと思いますので、山形大学の先生方には是非この場を借りてお願いしたいんですけれども、後期の教養教育でもすべての授業科目は既にコース登録されております。申請していただけますと学生登録をいたしましてコースが使えるようになります。ぜひBlackboardを利用して新しい授業の方法を試していただきたいというふうに思います。以上でございます。

**司会** ありがとうございます。ラウンドテーブル1, 2, 3のご報告をいただきました。この5枚ものの報告がいつていると思います。各ラウンドごと非常に個性的な記述で、それ自体が何か大学を表しているようで非常に面白いんですけれども、どのラウンドテーブルにでも結構ですから、ご質問ご意見等あれば挙手と所属・お名前をおっしゃってから質問等をお願いいたします。いらっしゃいませんか。



**白杉** 東北芸術工科大学の白杉と申します。ラウンド2の外国語教育センターについてお話を伺いたしたいと思います。まず、この外国語教育センターの設立の趣旨についてお伺いしたいんですけれども。

**佐々木** 外国語教育センターの設置の趣旨ということですが、山形大学の外国語教育がどうあるべきかということを検討し、そしてそれを、実施する部局がなかったということで、その中心的な部局としてセンターが設置されたということ。一言で言えばそういうことだと思います。

**白杉** 無かったというのは在るべきだということですよね。なぜあるべきだということが聞きたいんですけれども。

**佐々木** 具体的に申しますと、教養教育の、英語に関して申し上げますと、教養教育のその1年に関して統一的な、やり方をする必要があつて、もっと申し上げますと、なかなか、成果が上がらなかったという歴史が一つございます。

また卒業生のアンケートを在るところでとってもらったところ、全体的な印象として、大学時に受けた英語の教育に関してあまり満足のものではなかったというような結果が得られたという一つの報告がございまして、外向けにもそうですけれども内向けに対しましても、新たな戦略を講じて、教官一人ひとりの意識もさらに高めて、成果が見えるような形で取り組む必要があると。そしてそれに取り組むための部局が必要だということになると思います。

**白杉** 今日のラーニング・アウトカムズの話ともリンクしていて、本学でも週2回の授業で、大体3年間ぐらい受ける子は受けるんです。その結果が例えばその大学院進学とか、あるいは就職試験とかで、身につけていないということが最近指摘されてきて、今年度からカリキュラムを改革してやっているんですけれども、その辺のところ、もうちょっと具体的な、例えば本当にセンターを作って具体的にどういうふうにしていくんだという戦略をうかがいたいんですけれども。

**佐々木** 一番わかりやすいのは、TOEICを前期に、7月の頭の土曜日に受けさせて、半期授業を受けた時点での英語の力を外部テストによって測って、さらに1月の末の後期の授業をさらに受けて、受けた結果が英語の力がどのぐらいであるかということを外務試験である、やはり同じTOEICの試験を受けることによってそれを見ると。前期のその試験を受けた結果ということに対して、自分がどのぐらいの力を

持っているか、そして自分は後期に向けてどのぐらいそれを伸ばすかというような、自分でその目標を設定するように仕掛けるのが非常に重要なことだと思っています。

それぞれ先生方に取り組んでもらっているわけですが、わたしなどは、一人ひとり最後の時間に呼びまして、あなたは250点しかとっていないと。250点だったら70点は上がるよと。70点上げるためにはあなたは何を勉強しますかと、というようなことを指導して、かなり彼らとしては、全体的な印象ですが、まず僕はやっぱりそれがノルマであるということが非常に大事だと思います。必ず受けなくちゃいけない。ノルマであってそして目標が具体化しているということです。それがモチベーションにつながるんじゃないかと。このような取り組みは今まではまったく無かったわけです。

それで全体で何点伸びるかということも大事かもしれませんが、我々としてはやっぱり個人個人英語のレベルの力が違いますので、授業でやっていることをしっかり取り組んでやれば、それはこれぐらい伸びたんだと、伸びるんだということで個人個人のその伸び率というか、伸びる点数を非常に大事にしたいというふうに考えます。200点の人が350点になったら150点上がったんじゃないかと。それで700点の人が710点しか上がらなかつたら、あなた10点しか上がっていないぞと。もう少しがんばれるんじゃないかというようなことも含めてですね、990点が最高点なんですけれども、それで上位の人でもそれなりの伸びというものを目標に設定すべきではないかと。

目標が設定しやすいと、モチベーションを持たせやすいということが大きな今回の取り組み、具体的な、ほかにもいろいろ、少人数クラスをはかったりなんかしたということも、プレイメントもして、3つのレベルに分けたという多々ありますけれども、全体としては学生の意識も変わりつつあるし、我々の意識も変わりつつあるという点で、いい方向に向かっているのではないかと思います。まだ半年しかたっていない、一回しかTOEICはやっていないので、これからです。

**白杉** ちょっと辛口になりますけれども、本学も今年からTOEIC対応のクラスを導入しまして、中級と上級の8割のクラスはTOEIC対応クラスにしました。7月と年末、年度末に受けさせます。それは一人の教員がデザインして、専任系2人と非常勤でやっています。それからプレイメントテストは、かなり以前から導入してまして、少人数教育も導入しています。

それでもなおかつ、英語の力が定着しないというのがあって、その先のことが、今、東北芸術工科大学ではどうしようかっていう。そこで授業時間以外のどれだけ勉強させられるかっていう、その辺でCALLの導入の検討が始まっているんですけれども。何かセンターというものを作るのならば何か先のことがあったのかなっていうふうに思ってお聞きしたわけです。

**佐々木** よろしいでしょうか。まさにCALLも、我々の方のいろいろな要望でCALL自体、活用を高めるために、学生一人の力をつけるためにCALL自体がシステムを今変えようと

しています。それも、このセンターができたからではないかというふうに思っていますので、全体の戦略についても検討、企画に関してもここでやらせてもらえればというふうに考えているところです。

そういう面でも、芸工大さんからのプレイメント、それからTOEICの先行的な取り組みに関してのデータとかなんかもありましたら頂戴したいと思います。それなども参考にしながら、まだ我々半期しかやっていませんので、今はまだ夢を語っているようなところがありまして、これでいけるんじゃないかという実感はあるところはあるんですけども、取り組んでみたいと。朝令暮改はいけませんのでまずやると言ったんだから3年くらいのスパンで検討してみたいというふうに思っております。あとはTOEICがいいのかTOEFLがいいのかと言うことの議論もありますので、その辺の議論も含めながらいろいろマイナーチェンジをしながらやっていきたいというふうに皆で考えているところです。

**白杉** ありがとうございます。

**司会** それではほかのご質問等ございましたらお願いいたします。



**小田** 山形大学の小田です。引き続いてランドテーブル2のこのことについて聞きたいんですけども、TOEICを採用されて、先ほどの報告でもありましたけれども20パーセントだと。これがいいかどうかという形を問いただしているとおっしゃられて、お話を聞いているとTOEICをとにかく上げたいというならば、100パーセントでもいいんじゃないかと。このパーセントを決めるのはどのような形、英語の、英語教育をどのように捉えられているのかなという形のことをお聞かせください。

**佐々木** TOEICは、あくまでも普段の授業、いろいろな形の授業、いろいろな教材でやっているわけです。統一教材、やっていない。それからTOEICのためのTOEICの授業をやっていない。基本的には、それはやっている先生もいますけれども、TOEICの例えば問題集を全部やってくださいというふうなお願いは一切していません。それで、普段の授業をやって、その英語の力がどのくらい伸びたかということ、TOEICというテストによってそれをチェックするという、あくまでもテストであって、TOEICを目的化してはいけないというふうに思っています。聞くところによるとやっぱりTOEIC



を伸ばすためのテクニックというのはたくさんあるそうです。それで上がったとしても本当の英語の力は伸びたかどうかということはわかりません。

ただし、なぜ20パーセントかということなんですけれども、一つはそれは串刺しにしたということで、レベルが3つのレベルに分かれているわけなんですけれども、いわば絶対的な力として、本当に絶対的な力かどうかはTOEICの検証してみないとわかりませんけれども。かなり権威のあるテストだといわれておりますので、そのテストの、20パーセント分は全部共通に、どの3つのレベルに関しましても全部20パーセント分は入れたと。あと80パーセントに関しましてはそれぞれのレベルのその授業に応じて評価してもらおうというような形にしたと。絶対的な評価として20パーセントを組み入れたというふうに考えていただければいい、というふうに思っております。答えになりましたでしょうか。

**司会** ほかにございましたらお願いいたします。



**伊藤** 東北芸術工科大学の伊藤といいます。この建物の1階のCALL教室、さっき見させていただいたんですけども、質問2点あるんですけども、その中でどのぐらいの授業が行なわれているのか。頻度等。例えば90分コマの一部だけをやるとか、毎週15回の授業をそこでやるのか。それとほとんど使われていないのか。

それと別に、学生が、放課後、授業時間外、どのぐらいそのCALLの教室を利用しているのか、あるいはさせられているのか、あるいはこれから、今は自由ですけれどもやっぱりさせなくちゃならないのか、そういったその方針というか考え方についてお伺いしたいと思います。

**佐々木** ありがとうございます。CALLLABっていう部屋がここに一つございます。それから人文学部がCALL演習室というのがございます。人文学部の学生がここにこないでCALL演習室の方で使用しています。それで稼働率ですけども、まず授業での稼働率ですけども、それほど高くありません。

英語のコマが当たっているところといいますか、もともと英語を開講しているところに関してはほぼ100パーセントに、授業が開講されています。それから稼働率が高くないというのは、実は放課後、学生に自由解放しています。それを、実際は3分の2ぐらいの席が満たされているということで、もう少し、満杯になるぐらい、来てもらいたいなと思

っているところです。これも先ほどのアンケートにありましたように、知っているけれども使っていないというのが、使用していないというのがかなりのパーセントで高かったのも、このアンケートからいうと当然だなと思いますが、さらにPRをしていきたいとは思っています。

ただし、1700人が全員来たら、実はあの部屋は50何人しか入りませんので、もうどうしようもない状態です。あの部屋に入って、あの部屋だけに使わせるということはまったく現実的ではありません。学内のLANから、同じシステムにアクセスできる。さらに学外からもアクセスできるという、あの部屋を飛び出したところからアクセスできるというふうに住掛けていかなきゃならないというふうを考えて、そのような形で動き出しているところであります。

しかし、今度の問題なんですけれども、ご指摘の様に、そのシステムを授業の中でどう組み込んで義務付けてやらせていくかということが非常に重要になってくると思います。申し訳ございません、それはこれからの検討ということになっております。以上です。

**伊藤** ありがとうございます。

**司会** ラウンドテーブル2に集中しているようなんですけれども、その理由はなんとなくわかるんですけども、中村教授もちょっといつもいじけておりますし、大体3年に一度外国語教育というのはテーマになるんですが、いつもその外国語教育に集中するんです。杉原さんはほっとされていると思えますけれども、ほかのラウンドテーブルにも質問がありましたらよろしく願います。という2はダメだと言っているわけではありませぬので、2の方でもかまいませんし。

**小田** ラウンド3に、質問します。中村さんに質問じゃないんですけども、芸工大の伊藤さんに質問です。なにかと言いますと、今さっきの報告で、芸工大のシステム良くて、事務職員がいかにも少なくていらぬような感じで言われたんです。僕はそんな馬鹿なことはないだろうと。事務の職員の人たちが、事務職員が減ってうれしいことはあるわけが無いと。もし事務職員が楽になるならば教員に負担がかかるか、トータルな部分でどこかにしわ寄せが行く。それか本当にばら色の、何か減ったものがあるのか。どのような、もし本当に、何処かがポーンと楽になるようなシステムだったならばおそらく日本中に売れると思えますよ。正直なところを、中村さんいつも良い様なお話しかきませんのでね。

**元木** 私がかかわりにお答えいたします。よろしいでしょうか。私は芸工大で非常勤やっておりますので、いかに教師が使われているか非常によくわかります。例えば答案用紙ですが、答案用紙は私が作られます。原型、一つだけネットで送られてきて、これをプリントしろというふうに言うわけなんです。私は面倒くさいから山大的なものはちよろまかして持って行って向こうでやっております。その他、実際事務の人とっても少ない。その分たぶん教師はかなり仕事をやらされていると思えます。違いますか？

伊藤 答案用紙すみませんでした。一応教務課にもありますので。うちのシステムは今、基本的に一人でシステムそのものをメンテナンスしているんですけども、同じシステムですから、唯一入っていないのは財務と人事、それはまた別のシステムですけども、将来的に一部統合しようと思っ  
ていますが、そちらのシステムはあと一人やっていますので、学内のすべてのシステムは2人でメンテナンスを行なっています。実際に利用する職員とか教員、学生、そういえば学生ですけども、それぞれ自分の分をやっているという認識を持っていますが、一利一害というか、例えば本学の今のシステムは、受講者名簿は瞬時にリアルタイムでいつでも確認できます。プリントもできます。昔ですと教務課の方でそれを連休明けぐらいにすべて印刷して教員に渡していたと。サービスで言えばそれはよいサービスですけども、ただそれと別に実際教員の皆さんのニーズは早く名簿が見たいと。

そういうこともあって今のシステムの基本的な考え方になったんですけども、システムを導入することによって、従来例えば紙でやらなければならなかった履修登録とか、成績書類とか、そういったものは昔の担当、私もその時代を経験していますけれども、確かに履修申請・履修登録とか成績登録の時期は徹夜も何度も、やっぱりありました。2、3人で、やっていました。それは今はまったく不要になったという意味で、たしかに少数で、少人数で対応できるようになったんです。

先のラウンドテーブルでも申し上げましたが、システムは、前のシステムも似たような機能もあって、完全なフル機能になったのは去年からですけども、確かにいくつかの、私とかシステムを実際に運営している側から見れば不満な点もあるものの、概ねこれでいいかなと思うところも当然、そういう考え方になってしまいます。

教員とか学生、ほかの職員の使ってみての感想は、しょっちゅう聞いているし、自分で直せるところは直していますけれども、正直に言いますと、教員から見ればなんでこれできないのというようなことは、要するに有償、結構お金がかかるものなんです。いったん電子的な、そういうインターネットを通してシステムの利用に慣れてきますと、何でもそれができるんじゃないかという考え方に当然なりますけれども、その辺は逆に言うと余計に経費がかさむという可能性もあります。順に、できるだけは直していこうと思っていますけれども、それで答えになったんでしょうか。

元木 はい



中村 まず、何か山形大学で数年前に文書管理の規則を作りました。成績に関する答案用紙とかレポートとか出席簿とか保管しておけというのがありました。今どうなったのかわかりませんが、その時これはすごい大変なことだと思った覚えがあるんですが、今どうなっているのか、皆さん保管されているのかわからないですけども、LMS で回答を集めるとプリントアウトもできますけれどもファイル化して保存ができますので紙はまったくいりません。

当然ですけども、感想文を書かせたりレポートを書かせたりすると紙がこんなことになること、授業、200人の、池田先生の授業なんてたぶん、いつも紙袋をこんなにして歩いていますよね。池田先生どうぞ Blackboard を使ってください。こんな必要ありません。授業は身軽にいけます。部屋の中も整理できます。

それから、コースというのは特に教養教育の場合、専門もそうでしょうけれども毎年まったく違う授業をするわけではなくて、少しずつ変えたり、あるいは同じ授業を繰り返したりすると思いますが、コースというのは一回使うと、作ると使い回しができて、次の年にまったく同じ授業をするのであればほとんど何の準備も要りません。同じコースの中にコース文書等をアップロードしておけば、順次公開は切り替えていくことができます。非公開にもできますので、週を追うごとにまた公開していけばいいわけですから、それについての省力化は明らかにできます。非常に省力化という点においては、当然ですけどもウェブシステムというのは非常に協力です。間違いなく協力です。

ただ、スタッフを減らせるかどうかというのはまたそれは別の要因もあると思いますが、私が申し上げたのは、NETBUS+というのは集積度が非常に高いので、ばらばらのシステムに比べたらこれは非常にスタッフの労力というのは少なく済むだろうなというふうなことです。

さっきいろいろ数え上げましたけれども、我々でも例えば物品購入の時はこっちのサイト、図書館はこっちのサイト、学務情報はこっちというふうにみんなばらばらになっています。その都度アクセスしなきゃならないわけです。

NETBUS+はもう全部一元管理されているので、今のお話にありましたけれども、そういう点で非常に、やっぱり省力化、それから時間の節約につながっていく部分が多いだろうなというふうに思います。ウェブシステム一般にそうなんだけど、NETBUS+の集積度に驚いたと、そういうつもりで私はお話したので、スタッフ少なくてもいいとかそういうことを言っているわけではございません。

**司会** ほかにございますか。残り時間あと2、3分なので、たぶん最後の質問になるかと思いますが、絶対これはしておきたいというような質問がございましたらお願いいたします。

**伊藤** FDに関してなんですけれども、もうFD活動皆さん取り組んでいらしてからもう早い方は10数年になると思いますけれども、授業評価アンケート、私は本学の分を回収したものをまとめながら今週考えていましたけれども、これを具体的に、どのように具体的にその授業に生かせばいいのか。

当然教員同士とか職員を交えての授業公開とか検討会もやりますし、授業評価の結果を例えば公開したりしますけれども、次の元木先生のその授業が何か、一つの、対象になっていたようなんですけれども、例えばこういう質問をアンケートに載せて、そしてその結果具体的にこれをするだけでよくなるんですよと、もうそろそろ具体的な話に入っていくか、ちやならないかなと思うんですけど、もしFD、本当に義務化するのであれば、その辺についてお伺いしたいと思います。

**杉原** はい、ありがとうございます。今おっしゃっていただいたまさしくその通りだと思います。それで、ラウンドテーブルの中でも同じようなご質問もありまして、まず最初の、これまで全国で行なわれているような授業アンケート、授業改善、学生による授業評価という呼び方もありますが、それが実際じゃあどういふふうに授業改善に役立てていくのか、これは本当に大きなテーマであると思います。

それで、限界というのはやっぱりあると思います。すべてをあれて授業改善にすることは不可能だと、私は思っています。あそこでできることは何か、そしてそれできないことは何かについて考えています。

まず限界ですけども、やはり一つのフォーマットで全部とりますから、やはりそこは、押し付けになってもいけませんので、各先生方でフィードバックをした時に、ああなるほどと、各先生方の中でピックアップできるデータはなにか、そしてそれで有効でないデータは何かといったことを私どもの方では常にポストアンケートで問うていますので、授業改善に役立ったデータはどれですかということを問う中で改善をいっています。そして2つ目は、統一したフォーマットでやりますから、自分のデータだけでなくほかの先生方のデータとこう比べることができるわけです。全体の中で自分の位置付けというのがわかる。これは非常に大きな意味があるのではないかと考えています。

2つ目のご意見ですけども、まさしく今、これまでのFDとは少し違う形での個別、非常にこの丁寧なケアをするFDを始めまして、この秋から学内には公開をしまして、是非、ちょっとでも授業改善したいと思う先生方は是非、一度ご相談いただければと思っていますが、そこでは今おっしゃっていただいた、まさしくミニ授業改善アンケートと呼んでいるんですけども、授業をされる先生方が知りたい情報、例えばですね、私どもが今回行ったのは、座席に皆さんこうやって座っていらっしゃいますけれども、前の方に座られている方と後ろの方に座られる方ではモチベーションも違いま

すし、興味関心も違うわけです。そこで、それぞれ場所、9つのブロックに分けて、前左、後ろ左とか、その9つのブロックごとでどういふふうな、例えば、授業の板書をどこにメモを取っているのか、どれぐらいの頻度で取っているのかという差を見たりとか、総合的な評価の点数もどういふふうに違うのか。あとは性別、学部、どこの学部の人が実はあの辺に多かったなど、感じていたけれど本当にそうだったなっていうような違いだとか、いろいろその個人の、先生方がそれぞれ知りたい情報を細かく分析することが今可能になっていますので、これは非常に授業改善に有効ではないかなと感じています。

**元木** ほかに今年の共通の教養教育のアンケートでは2つ、各教師に任された自由質問がありまして、各教師が、2つほど質問できるということになります。したがってその聞きたい質問というのを各教師ができるような方向に徐々に行くんだらうなというふうに思います。伊藤さんよろしいですか。

それでは、所定の時間も過ぎました。通常ですとここで最後にもう一度川島先生に全体をまとめてご意見をいただくということになるのですが、短くて結構ですのですいません、よろしくお伺いいたします。



**川島** 今日第一分科会の方に参加させていただいて、そのときにも申し上げましたけれども、実はラーニング・アウトカムズの話と、それから今日いろいろとお話が出た、教育方法だとかそのためのさまざまな仕掛けの問題と言うのは実は表裏一体になっているところがありまして、そういう努力みたいなものが、それがかなり世界的な動向でもあるし、日本でもそういう形に反応して行なわれているんだなということは、今日こちらのお話をいろいろ伺えて実感できたところがありました。

私自身、今日いろいろ伺えて、いろいろ、さらにこういう方向でいろいろ考えていたりだとかまとめていたりだとか、あるいは提案していたりとかというところで、材料をいただいたというところがあります。山形大学の今日の成果が非常に実りあるものであって、これからもまたそれがさらに増進されていることを願いつつ、そういう感じのご挨拶でいいでしょうか。

**元木** ありがとうございます。どうも無理を言ひまして申し訳ありませんでした。

**川島** ありがとうございます。

元木 それでは第9回教養教育ワークショップ「21世紀型教養教育を問う」をこれにて終了いたしたいと思います。

最後に一言だけ、21世紀型教養教育何ていう大上段に構えた言い方ではなくて、基本的には自分の授業をどういうふうに変えていくか。あるいは自分の学科の授業、自分の学部の授業をどういう具合に構成していくかという現場の努力が一番大事なのであって、今何か一つ一つ問題があればそれを現実に変えていこうという、基本的にはそこなんだろうというふうに思います。

それを、金を取るためにうまいこと言ってくれるのは小田さんでありますから、それはあと小田さんに任せて、小田さんの言うことを全面的に信用はしないで、各自が本当は努力するということが一番なんだろうというふうに思います。私の勝手な意見で最後を締めくくらせていただきます。これにて終了いたしたいと思います。どうもありがとうございました。

(第8回教養教育ワークショップ参加者数)

部局等	人数
学長	1
副学長	1
人文学部	15
地域教育文化学部	7
理学部	4
工学部	7
医学部	1
事務局	18
東北芸術工科大学	5
鶴岡工業高等専門学校	2
その他	4
計	65